

論考

特集 文学から再照射する日本と朝鮮半島、そして未来

特集に寄せて

鄭雅英

金石範『火山島』に描かれた済州島4・3事件とその意味

金東潤

金達寿と雑誌『日本のなかの朝鮮文化』

廣瀬陽一

植民地郷愁を撃て——小林勝「『懐しい』と言ってはならぬ」と「日本人中学校」——

原佑介

キルチャピ（道標）

朝鮮民主主義人民共和国における科学史研究

任正嫻

「今日のソリは今日限り」

安聖民

特別講演会（『新・韓国現代史』をめぐって）を終えて

文京洙

書評

玄武岩『「反日」と「嫌韓」の同時代史』

鄭雅英

高史明著『レイシズムを解剖する—在日コリアンへの偏見とインターネット』

鄭榮鎮

廣瀬陽一著『金達寿とその時代 文学・古代史・国家』

総谷智雄

学会誌 コリアン・スタディーズ 第5号 目次

論考

特集 文学から再照射する日本と朝鮮半島、そして未来

特集に寄せて.....	鄭雅英	1
金石範『火山島』に描かれた済州島4・3事件とその意味.....	金東潤	2
金達寿と雑誌『日本のなかの朝鮮文化』.....	廣瀬陽一	15
植民地郷愁を撃て ——小林勝「『懐しい』と言ってはならぬ」と「日本人中学校」——.....	原佑介	28

キルチャピ

朝鮮民主主義人民共和国における科学史研究.....	任正嫻	43
「今日のソリは今日限り」.....	安聖民	48
特別講演会（『新・韓国現代史』をめぐって）を終えて.....	文京洙	55

書評

玄武岩『「反日」と「嫌韓」の同時代史』.....	鄭雅英	59
高史明著『レイシズムを解剖する—在日コリアンへの偏見とインターネット』.....	鄭榮鎮	62
廣瀬陽一著『金達寿とその時代 文学・古代史・国家』.....	総谷智雄	65

学会報告

国際高麗学会日本支部 第20回 学術大会報告.....	徐正根	68
2016年度学会活動.....		75
投稿規定・執筆規定.....		77
編集後記.....		80

特集「文学から再照射する日本と朝鮮半島、そして未来」

特集に寄せて

鄭雅英（立命館大学）

ある一定の時期まで、在日朝鮮人社会を含んだこの日本の地にあつて、文学とは国家と社会の、歴史の、そして政治とイデオロギーの先端に立ち人々の行く手を指し示す営為だと、確かに信じられていたことがあつた。先導する先は、革命や社会主義なのか、神と悪魔の戦いの現場なのか、あるいはまた何かしら耽美でより幻想的な世界なのかは、文学者ごとにまるで異なっていたにせよ、そうした役割を任じている以上、文学は常に社会や思潮との激しい緊張関係のなかで積み重ねられるほかなかつた。小説なり詩なり評論なり、文学者が精力を傾けて紡いだ文字は、時として社会を大きく揺るがすばかりでなく、巨大な論争の渦を生み出して文学者自身の社会的物理的生命を脅かすことさえあつた。

こと日本に、そして在日朝鮮人社会に限って言えば、そうした文学と社会との激しい関係の時代は、とうに遠景へと過ぎ去つた。文学と社会の間の緊張関係がなくなった、というわけではない。しかし前世紀中後半の「政治の季節」を経て、文学は世の中を「先導」するどころか、時として特定のイデオロギーや組織に追従して人々を「扇動」する道具に身を貶めてしまう姿を人々に目撃されてしまい、かつてのような万能感や信頼感を少なからず失つたのは痛かつた。あるいはいつの間にか文学が、先導者としての席を自ら下りてしまつたともいえるだろう。そうした意味で、日本と朝鮮半島の今と未来を文学から再照射しようという本号の特集は、いささかアナクロの感を読者に抱かせるかもしれない。しかも編集部でさえ期せずして、今回寄稿いただいた3本の文学評論が扱う文学者は、90代を迎えてなお旺盛な創作力を示す金

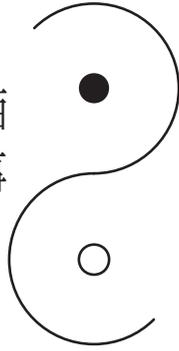
石範を除いて、没後30年になる金達寿と同じく50年の小林勝である。

ところが、である。寄稿された3本の評論のうち、金石範『火山島』を扱った金東允論文は、韓国の地で済州島4・3事件をめぐる政治と文学が、未だ血のにじむような対立と緊張の中にあること、そして在日朝鮮人文学者の金石範と在日文学そのものが韓国の社会と思想を未だ揺り動かしている現実を伝えている。その現実が、在日朝鮮人社会の中へも乱反射しているような状況がある。文学より古代史発掘に精力を傾けた金達寿の後年を扱った広瀬論文は、著者による長大な金達寿評伝の一角を占めるものであるが、従来取り上げられることのなかつた雑誌『日本の中の朝鮮文化』の創刊から休刊に至る経緯をていねいに発掘するばかりではなく、在日社会の中でさえ、もはや振り返られることの減っていた在日朝鮮人文学の巨頭・金達寿が、没後20年を経て壮年の日本人研究者によって新たな視座からの光を与えられつつあることに多くの読者は感銘を受けるはずである。最後に朝鮮植民者であつた自身を激しく拒み続けた異色の日本人作家である小林勝を扱う原論文は、短編小説「日本人学校」をめぐる数奇な人間関係を掘り起こした労作で、小林作品未読の者でも大いに関心をそそられることだろう。文末に集約される小林文学の問いかけをめぐる言説は、彼の文学がまさに現代と未来の日本(人)と朝鮮(人)を鋭く突きさすものであることに他ならない。

文学と社会の関係が、いかに変化したのであろうとも、書き手の振り絞つた文字の声は、間違いなく私たちの今日と明日の生き方を揺さぶり続けている。

特集

金石範『火山島』に描かれた濟州島4・3事件とその意味*



金東潤 (国立濟州大学校国語国文学科教授)
翻訳：文京洙 (本誌編集委員)

1. はじめに

2015年10月、在日作家・金石範の大河小説『火山島』が韓国で完訳され出版¹⁾されたことは一大文化史的事件であるといえる。韓国の批評家、研究者をはじめとする読者はこの大作によりやく完全に接することができるようになり²⁾、今後『火山島』は相当な波紋を呼び起こすものと判断される。この大河小説の翻訳者は以下のように述べている。

大ざっぱに内容を述べると、時代的には1948年前後の解放政局の激動期を背景として、空間的には濟州島 - 木浦 - 光州 - 大田 - ソウル - 釜山の陸路と海路、さらには日本の北海道 - 東京 - 京都 - 大阪 - 神戸をつなぐ朝鮮半島外側の陸路と海路も舞台となる。政治理念的には朝鮮半島（特に濟州島）で反目しあった南北朝鮮の左右両派の葛藤 / 対立とともに、<濟州4・3事件>をめぐる軍警 - 米軍 - 武装

隊 - 濟州島民の間の思想 / 武力衝突を全面的に描きながらも、国連の単独選挙決定と南北分断、李承晩政権の登場とともに植民地期の親日派勢力が再起する社会的現実が検証され、麗水・順天反乱事件などの極限的対立も形象化される。それだけでなく作品では歴史文化的に当時の朝鮮半島に存続してきた封建的な家父長制、海外留学、新世代の結婚観 / 自由恋愛、濟州島の生態学的文化地理も描かれる。『火山島』は解放政局の政治経済の現実を浮彫りにするという次元を越えて社会歴史、民俗宗教、通信交通、衣食住や教育に至る当時の政治、歴史、社会、文化を総体的に形象化した傑作であるといえる [김환기 2015 : 2]。

この引用から窺えるように、金石範の『火山島』は非常にさまざまな面で多角的に考察できるテキストだ³⁾。「多面的な作品」⁴⁾なのである。本稿ではその中でも最も基本的な問題についてのアプローチから出発する。まさしく4・3小説としてこの作品を読むことである。金石範は4・3の真相究明運動と平和・人権運動を先頭にたってすすめてきた代表的な人物として評価され、2015年4月、第1回「濟州4・3平和賞」を受賞した。それだけ4・3を象徴する作家ということだ。もちろん、金石範も4・3が自身の文学で大変重要な主題であることを繰り返し力説してきた。したがって、彼の小説で4・3に注目するということは最も優先的で基本的な作業となる⁵⁾。『火山島』に4・3がどの

* この論文は韓国の学術誌『열린정신인문학연구 (開かれた精神 人文学研究)』第17集2号 (円光大学校人文学研究所 2016.8) に掲載されたものを筆者の許しを得て本誌に翻訳掲載するものである。

なお、原文の脚注は文末に一括して示し、訳注は文中にアスタリスク (*) で示した。訳文中の『火山島』からの引用については、文藝春秋版の該当箇所から引き、巻とページを示した。

ように描かれているかを、その他の4・3小説との違いを中心に検討しつつ『火山島』の4・3小説としての位相と意味に注目したい。そのことは4・3文学研究の領域をより一層豊かにするだけでなく、足踏み状態にある4・3小説の創作にも示唆する点が多いであろう。

『火山島』についての既存研究では、4・3に対する十分な理解なしに作品を評価する場合がときとしてある。ある研究者は「パルチザン側につき従う済州民衆が詳しく描かれている反面、警察や西北の側につき従う民衆の描写はそれほど描かれていない」[오은영 2015:201]と分析している。彼は「『火山島』は、1万1千枚の分量にもかかわらず、武装隊側の観点に傾いていて軍警や西北（西北青年会）側はひたすら済州島民を赤だと決めつける存在としてのみ強調されている。なぜ事件が起きたのかを問うというより、誰が、どのようにして蜂起を起こしたのかが中心となっている。すなわち『火山島』において4・3事件は島民による蜂起というよりは、共産党組織による暴動というのが浮き彫りにされ、苦痛を味わった島民の観点が欠如していると思える」[오은영 2015:203]と述べている。結論的に彼は「武装隊側から事件を見る観点到偏っていて、読者に対する4・3事件の説明としては客観性に欠ける」[오은영 2015:250]と評価している。

このような観点到私は同意できない。なぜか。警察や西北の側につき従う民衆に対する描写がそれほど描かれていないのは当時、そのような民衆が少なかったからだ。軍警や西北側が済州島民を赤だと決めつける姿が強調されるほかはないということがまさしく4・3の真実なのだ。「なぜ事件が起きたのか」と「誰が、どのようにして蜂起を起こしたのか」というのはほとんど同じ問である。共産党組織による暴動というものが浮きぼりにされ苦痛を味わった島民の観点到欠如しているという判断は深刻な誤りに思える。蜂起指導部をはじめとする知識人の苦悩、闘争、葛藤、そして挫折を濃密に表わすことによって4・3の意味と正当性を浮きぼりにしたことがどうして問題なのか。な

ぜ廃棄されてこそ当然な「共産暴動論」に基づいて4・3を裁つのか。武装隊の観点到偏っているので客観性が欠如しているのではなく、まさに蜂起の中心勢力の信念と葛藤を真正面から扱ったというその点にこそこの作品の意味が力強く浮き上がるのではないだろうか。

逆に言えば、上の研究は『火山島』の特徴自体はよく引き出しているといえる。韓国の読者には4・3に対する金石範の観点到非常に馴染みのうすいものである。玄基榮の『スニおばさん』(1978)に代表される民衆受難史として4・3を見る観点到馴染んでいるためだ。『スニおばさん』*は、維新独裁時代にあつて巨大で堅固なタブーの壁に対応する真実復元の方式であるのに、40年が過ぎた今でもその枠組みを超えた方式のアプローチには足踏みしているのが現状だ。4・3による無念の死とそれに伴う苦痛だけがあるならば、犠牲者の霊を慰め、それに見合った記念事業と補償をしていけばそれで済むであろう。国家追悼日となったことも、もはや遺族福祉をさらに強化して適切な補償さえすればいわゆる「完全解決」だという考えから来ているのかも知れない。

* "순이삼촌" 翻訳は金石範訳『順伊おばさん』(2001年)が新幹社から刊行、2012年5月新幹社選書として再版されている。

だが、それは4・3の一部に過ぎない。国民国家を構成する過程で起きた不幸、あるいは左右対立から始まった国家暴力の問題としてのみ4・3を見るのではなく、より幅広い観点到が必要であろう。済州と朝鮮半島に止まるのではなく地球的視角から4・3に向き合わなければならぬ。金石範の『火山島』はそのような視角をまさしく示しているといえる。この点を前提に『火山島』に内在する4・3の意味をあまねく検討してみたい。

2. 反帝国主義統一闘争

『火山島』は反帝国主義統一闘争としての4・3

の性格を明確にしている。日本とアメリカという帝国主義勢力によってひきつづき侵略または、占領される状況が最も問題だと指摘される。日本とアメリカは表向きでは違うが本質的に同じ存在だとされる。したがって「日帝の支配、そして続くアメリカ支配」(韓国語版Ⅶ-153:文藝春秋版Ⅳ-518)⁶⁾という状況は作品で常に強調される。結局完全独立と真の解放への渴望が済州で噴出したのが4・3であるという観点が堅持されている。これと関連して1947年3・1節28周年記念式⁷⁾で自主独立の意味を強調したことを回顧する場面が第2部(13章5節)で重視されている点も注目する必要がある。

作家は作品の初めの章から、連続する植民地状況を当時の済州民衆が看破していたことを示している。以下は1948年2月済州城内に入るバスのなかである農夫が発した言葉だ。

だれにこき使われた? いわなくても分かっているだろ。それや、日本の軍隊に決まっているさ。いまはアメリカの兵隊がいるだが、(…)こんどはアメリカがやって来てますます住みにくくなってしまったが(韓国語版Ⅰ-17～19:文藝春秋版Ⅰ-11～12)

この農夫は国民学校の学生の孫がいる50歳余りの男だ。日帝の搾取に苦しめられて一生を送った彼は解放をむかえたのにアメリカが入ってきてさらに難しくなったという嘆きを吐きだしている。引き続き帝国主義的搾取に苦しめられることになった惨い現実が民衆の日常的な対話を通じて確認される。

知識人の考えも同じだった。中心人物である南承之は大学に通って中学校の教師になったインテリだ。彼は日章旗の代わりに掲げた星条旗を通じて本質的に持続する帝国主義の支配を確認する。解放された祖国の道庁の建物にも太極旗は相変わらずはためきえないのが厳然たる現実だった。

道庁の建物の上で星条旗が勢いよくはため

いていた。南承之はそれをちらっと見ただけで眼に深く収めた。(…)あれはほんとうにわれわれの旗ではなく、アメリカの旗に間違いないのか?(…)植民地支配から解放されたはずだった祖国のこの南端の弧島にまで異国のポールが突っ立っている光景は、瞬間彼の頭の中で一回転を遂げねばならない。(…)かつては日の丸が36年間「国旗掲揚台」にかかげられたところなのだ。その現実がいまも続いていることでしかない。本質的に何が変わったというのだろうか(韓国語版Ⅰ-36～38:文藝春秋版Ⅰ-24～25)⁸⁾

日帝が敗戦し民衆も知識人もみな新しい国の建設という希望に沸き立った。済州の人々は島に入ってくる米軍を解放軍として認識し熱烈に歓迎しようと準備することもした。新しい世の中をつくることができるだろうという期待の中で米軍を迎えたのである。

さて、9月28日、米軍がやって来た。その第1陣が輸送機で城内西郊の旧日本軍飛行場(いまは米軍用飛行場であり、米軍キャンプがある)に上陸。(…)彼らは観徳亭広場に整列した数十名の有志たちの面前を、全く見向きをしないで、さっさと通り過ぎてしまったのだ。いや、敵意に満ちた目付きで行進する彼らの姿勢は、まるで戦争中の敵国にでも上陸した軍隊と変わらなかった。(…)有志たちも、町の人々も呆気にとられて呆然としていた。ことばがなかった。歓迎アーチもプラカードも、万歳!と挙げた手も下ろす場所がなかった(韓国語版Ⅰ-164:文藝春秋版Ⅰ-108-109)。

米軍はすでに自ら占領軍であることを標榜していたのであった。9月7日、横浜の太平洋米合衆国陸軍最高司令官のダグラス・マッカーサー陸軍大将名義で「占領軍の保全をはかり、占領地域の公衆治安・秩序の安全のために」問題になる者は「占領軍軍法会議において、有罪と決定の上、同会

議で定めるところにより、これ死刑またはその他の刑罰に処する」(韓国語版Ⅱ-62:文藝春秋版Ⅰ-231)と公布していた。歓迎に出た済州の人々が落胆したことは当然の結果だったと言えよう。

ところでこの作品でアメリカあるいは米軍の存在は物語の展開に意味をもつ人物として登場しない。アメリカ人は、脇役でもなくエキストラに過ぎない。

後ろからやって来た米軍のジープが前方の牛車を追い越して砂塵を巻き上げて走り去った(韓国語版Ⅳ-438:文藝春秋版Ⅲ-277)

飛行場で、豚肉を焼く……? あはん、おそらくアメリカ軍人たちが野外で済州島の黒豚を料理、丸焼きにしているようだ。バーベキューとやらを、近くで罪なことをする。収容所テントの中の腹をへらした収容者たちが、すぐに近くで脂っぽい煙とともに発している済州島豚の丸焼きの強烈な臭いに狂いだすかも、腸がねじれて大騒ぎになるかも知れぬだろう(韓国語版Ⅵ-315:文藝春秋版Ⅳ-121)。

個別の人物としての米軍でなく不特定多数の米軍が出てきているだけだ。作品展開に特別な影響を及ぼさない挿絵的場面だけに登場するのみだ。したがって彼らが主な作中人物たちと個別にからみあうこともない。

このようにアメリカ人や米軍が本格的な登場人物として出てくることはないが、米軍とアメリカの存在はこの作品でとても重要だ。『火山島』では4・3の展開過程でアメリカが直接関わっていることが明確に提示される。作品末尾で描かれる1949年1月初めの米軍の艦砲射撃の場面はその代表的な部分だ。

艦砲射撃は威嚇の空砲だと発表されているが、実は実弾を撃ち込んでいるのだ。中山間地帯や山麓地帯に着弾して無数の火を吹き上

げるのを見ても、空砲というのはだれの眼にも明かに弁明にしかならない。もっとも標的になるゲリラの根拠地の所在が把握できていないのだから、射撃は闇雲なものにならざるをえない。アジトを目標にしないまま空からの爆弾投下も同様だった(韓国語版ⅩⅡ-195:文藝春秋版Ⅶ-402~403)

米軍が済州島に艦砲射撃を加えたという事実は公式的には確認されていない。だが、それは「何のために米軍政とアメリカが執拗に解放空間の朝鮮半島の政治社会問題に関心を示し、積極的に干渉したのか、ということについての多層的で深層的理解が切実だ」という問題意識を文学の力で示して」[고명철 2016: 80] いるということができる。

この作品で作家はアメリカの戦略あるいは米軍政の政策に対する批判を明確に表現している。そのことを通じて米帝国主義が4・3の主な原因であることを明確かつ執拗に表わしているのである。

金石範は何よりもアメリカが朝鮮を分割占領したことに対する批判を積極的に提起する。敗戦国でない朝鮮がなぜ分断国にならなければならなかったのか、連合国に協力した朝鮮がなぜ悪化の一途を辿らなければならなかったのか、ということに対する問題提起だ。

かつて朝鮮を植民地とした敗戦国がこのように前へ進み、独立し解放されたはずの朝鮮がまるで逆の方向で突き進んでいるのだ。そして、朝鮮半島南端の島、済州島から武装蜂起をする状況になって来ている。(…)“顛倒した米軍政”(…)連合国に協力した朝鮮が自由を喪失して残酷なまでに個人的制限を受けているのに反して、最近まで米国の敵であった日本人は、戦争を起こした重大な責任があるのにもかかわらず、彼らがこれまで享有できなかった自由と民主化を謳歌している(韓国語版Ⅱ-383:文藝春秋版Ⅱ-48)

このように作家は「連合国に協力した朝鮮は自

由を喪失」し、「敗戦国日本は民主化を謳歌」するという状況、日本は前進して朝鮮は逆進するという状況を容認できないという立場だ。もちろんこれはアメリカの東アジア戦略と日本の戦争責任回避戦略が野合した結果というのが金石範の考えであるようだ。太平洋戦争直後の局面で同じように米軍占領下でありながらも朝鮮のみ疲弊したという現実悲憤しつつ、結局済州島がその関連で武装蜂起におよび大きな犠牲を払うことになる状況に怨嗟の気持ちを抱いているのだ。

とりわけ米軍政の親日派登用は大きな問題であった。金石範は親日派問題を終始一貫、執拗に争点化している。「アメリカが庇護、育成してきた親日派」(韓国語版XII-236:文藝春秋版VII-428)の勢力拡大は新しい世の中への熱望を抱いた民衆を憤怒させた。「どいつもこいつも日帝協力者じゃねえか! 全くね。この国は日帝協力者の天国なんだ」(韓国語版V-175:文藝春秋版III-439)という韓大用の発言はそういう怒りを如実に物語る。故について8・15についての認識を異にするに至る。「あしたは光復節・糞食らえの8・15だ……」(韓国語版V-501:文藝春秋版IV-90)とか、「トンタンジ(糞壺)みたいな8・15だ……」(韓国語版V-558:文藝春秋版IV-125)という嘆きが蔓延する。

主人公李芳根は「私は済州島事件も親日派支配のせいだと思ったと思っているんだ。もとを糺せば……。」(韓国語版VII-318:文藝春秋版V-68-69)と語る。4・3の展開において「大体、過去の反日派はいまゲリラ、過去の親日派はいま反ゲリラという構図になるのだから」(韓国語版V-511:文藝春秋版IV-96)という局面になったと診断する。

李芳根はいつまでもソファに埋もれているはずだったが、親日派が勢力を伸ばす現実を見過ごせなかった⁹⁾。彼は4・3蜂起にも基本的には同調したし、後には国会の反民特委(反民族行為特別委員会)の結成と活動にも一抹の期待をかけた。だが、蜂起はますます失敗に傾いて行ったし、反民特委は瓦解するにいたってしまった。取り返しのつかない状況となった。「潮が満ちて貝掘りをする式で、すでに遅きに失っていた。解放直後にさっ

さと手をつけるべきなのに、日本敗北から3年、アメリカ軍政下で温存されてきた親日勢力はほとんど政府をはじめとしてこの社会のあらゆる機構に取り込まれずみなのである」(韓国語版IX-157:文藝春秋版VI-100)。もう頼れるところはなかった。

ソファから抜け出した李芳根は自らのやり方で行動を開始する。彼の親日派に対する断罪は柳達鉉に対する私的処断として決行された。柳達鉉は、植民地期に協和会会員として内鮮一体、一億総力戦運動に情熱を燃やした分子として警視庁から表彰まで受けた人物であり、解放後にはいち早く変身して南労働党秘密黨員として活動する¹⁰⁾。そのような彼が4・3の渦中で城内の組織が一網打尽された事件に決定的な役割を果たしたことが確認され、李芳根はもはや耐えることが出来なかった。作家は場面展開の技法で李芳根と韓大用をはじめとする青年たちの柳達鉉処断を高い比重をもって描いた。彼が柳達鉉に対して最後に発した言葉は、「昔の人間はよくいったもんだ。犬の尻尾は3年を土に埋めておいても鼬の毛にはならんとな。きさまはだ、その根性、日帝時も、それから3年経ったいまもまったく変わらんやつだ。きさまは自分で自分の屈辱も、恥かしさも分からんやつ……。腐りはてた親日派と同じだ。ユダメが!」(韓国語版XI-346:文藝春秋版VII-218)であった。

反帝国主義闘争と統一闘争は事実上同じ脈絡だ。「この国土に米軍が駐留を続け、権力を手中にした親日派が跳梁する。かつての売国奴の彼らが‘反共愛国’を唱え国是とする」(XI-210:文藝春秋版VII-133)という認識は反共を名分として分断を企む勢力の不当性を明確に表わす。この作品で重く扱われる西北青年会の横暴は反共を掲げる彼らの呵責なき歩みであり、みな一つの還として絡み合って4・3の原因となる。「朝鮮半島の分割を実施しようとする国連朝鮮委員会に反対するデモ、南朝鮮だけの単独政府樹立に反対するデモ、米ソ両軍の同時撤収と朝鮮統一民主政府樹立を朝鮮人民に委せろとのデモ、労働者と農民、人々の生活権を要求するデモ」(韓国語版II-325:文藝春秋版II-13)がまさしく4・3蜂起につながったのだっ

た。結局4・3蜂起は反帝国主義闘争であり「断ち切ると一つになり、断ち切らないと二つになる」(韓国語版XII-58:文藝春秋版VII-316)38度線をつき崩す統一闘争だということが強調される。これは「鴉の死」(1957)から堅持してきた彼の一贯した所信であり[金東潤2015:355-376]、それが『火山島』では体系的に深く形象化されたといえることができる。

このように『火山島』は、反帝国主義統一闘争として4・3がもつ意味を明確に堅持した作品だ。引き続き植民状況の突破と米ソの朝鮮半島分割占領に対する完全な統一政府樹立への念願が済州島で噴出したのが4・3という認識である。その他の4・3小説でもこのような問題が部分的に提起されなかったわけではないが、『火山島』はそれを確固たる主題意識の下に全面的に提起したということに優れた点があるといえる。

3. 人間愛と平和指向の精神

『火山島』を通読する中で始終一貫感知されるのは4・3が大惨事の悲劇に帰結したことにともなう作家の無念で悲痛な心情だ。これは当時にその現場にとともに居ることができなかつたことへの作家の罪の意識と相通じている。

『火山島』で金石範は4・3蜂起の正当性自体には根本的に同意している。だが、その過程にもたらされた犠牲は果たして避けられなかつたのか、という問いを真剣に投げかけているように思われる。どのようにしてでも犠牲を最小化すべきだったという信念を明確に表出しているのである。『火山島』で作家のそのような信念は主に李芳根を通じて現れているといえる。

「あ、見える、見える……。」(…)いま夜の広大な漢拏山麓一帯に、まるで烽火のパレードさながらに赤々と燃えあがる光景は壮観だった。あちらこちらに聳えるオルムごとに烽火は上がっているのである。(…) / 闇に燃

える幻想の火の群れ、李芳根は一瞬恍惚に打たれ、それらがゲリラ蜂起のシグナルであり、デモンストレーションであることをしばらく忘れ去っていた。(…)深夜外に出て、こうして烽火を眼にしたのは喜びだった。李芳根は家に向かって歩きながら、想像もしなかつたある感動で軀が打ち慄えるのを感じた。彼は珍しく興奮していた(韓国語版IV-317~318:文藝春秋版III-199~200)

李芳根が4・3蜂起を知らせる、オルム*にあがる烽火を壮観だと感じて恍惚感に浸つたのは、単純にその場だけの一時的な態度ではなかつた。心情的に蜂起の大義に同調しているという意味に解釈できる。だが、現実の状況は蜂起勢力をひたすら支持して声援出来るようには展開しなかつた。城内攻撃の失敗などで闘争が長期化し、これによる犠牲はますます大きくなっていく。

* 漢拏山の火山活動から生まれた甲型や円錐型をなした小山(寄生火山)で済州島では四百近い大小のオルムが漢拏山の周囲を囲んでいる

李芳根は時間が経過するほど、平和的解決の道が切実だということを感じた。そのような渦中に「すでにゲリラ側が交渉の場を想定しているがごとき」とう話を聞いて「康蒙九のこのいささか意外な弾力的な態度の背景には、できれば4・3蜂起のたたかひが一定の段階に至れば収拾してもよいという考えがある」(韓国語版V-93:文藝春秋版III-389)ことを感知する。その後、国防警備隊9連隊長金益九(金益烈がモデル)とゲリラ司令官金星達(金達三がモデル)間に4・28平和交渉¹¹⁾が成果を上げてその合意事項により戦闘中止と下山などの措置がとられ始めた。李芳根は平和的解決の成り行きに期待をかけた。だが、メーデーの吾羅里防火事件とその直後の5月3日に起きた警察の帰順破壊工作で和平はこわれてしまった。

(…)警察による下山者の虐殺が行われた。梁俊午が何かを予感していた、その起こりうる

かも知れぬ警察の謀略が現実におぞましい形で起こったのである。梁俊午は二つの事件とも綿密に組まれた警察側の、交渉破壊の陰謀だと見ていた。彼は鄭世容の名こそあげなかったが、その彼の前で李芳根は氷のような冷たい炎の怒りが背筋を突っ走って噴き上がるのをおぼえた（韓国語版V-350：文藝春秋版Ⅲ-549）

まともな世の中であれば、日帝時代に朝鮮人学友を売って木浦警察署の巡査部長を拝命したとの噂があった鄭世容が、いま頃何をしているのか分からないだろう。（…）こんどの人事も遅まきながら軍・ゲリラ間の4・28平和協定の破壊工作に対する論功行賞的なにおいがするものだった。事件直後の表彰では目立つのでカムフラージュのために一定の時期まで延ばしてきたのだろう（韓国語版Ⅷ-159：文藝春秋版V-259）

交渉破壊のための警察の工作は、李芳根の母方の親戚である鄭世容によって主導されていた。彼は、5月3日ゲリラ下山者を襲撃して負傷し、米軍に逮捕されたという高警偉が自身は警察上部の指示により暴徒に偽装した警察特攻隊長だと自白するや、その日の夜、警察取り調べ室で彼を射殺する仕事を引き受けた。その論功行賞に昇進までしたことに李芳根はとうてい見過ごせなかった。4・3が早期に収拾できる絶好の機会が消えてしまったのである。平和的な解決策は消えて、事態は悪化の一途を辿った。鄭世容は結局「4・28和平協商破壊陰謀、高警偉謀殺主犯、10・25<宣戦布告文>印刷直後の城内組織一斉検挙旋風の仕掛け人」（韓国語版Ⅻ-289：文藝春秋Ⅶ-461）としてゲリラに拉致された。その報せに接した李芳根は山に入って鄭世容を直接処断する。

右腕が狙いに向かって動いた。全身が爆発する凄じい摩擦が氷の熱を発生して背中を駆け上がる。取るな！目隠しが取られて2メートル

の距離で視線がかち合い、鄭世容がギャアッと恐ろしい悲鳴を上げた瞬間、ほとんど地獄の炎が覗くその眼に向けて撃ち込みかけたピストルの銃口が左胸に向かって、火を噴いた。突き刺した白刃を引き抜くような感覚が李芳根の全身をゆっくり走った（韓国語版Ⅻ-316：文藝春秋版Ⅶ-478）

李芳根はこれに先立って友人である柳達鉉を親日派として処断していたし、今回の和平破壊工作については親戚である鄭世容を処断した。4・3を成功に導くことが出来なかった、あるいは平和的に解決できなかったことへの済州島民自らの責任を強調する一方、自らに対する痛切な反省がまさしくこのように身近な人物に対する私的処断の方式で表出したのである。最後に李芳根が自殺するのも同じ脈絡と解釈しうる。

李芳根はゲリラ側に対して無条件の支持を送ることはなかった¹²⁾。ゲリラ指導部の無責任さに対しても呵責ない批判の態度を取った。とりわけに海州で開かれる南朝鮮人民代表者会議への参加のために北に行った金星達に対しては「あえて海州会議に参加したのだから、彼はそれ相応のものを持って済州島に戻り、そして新しい局面での闘争に合流せねばならぬだろう」（韓国語版Ⅷ-11：文藝春秋版V-165）という立場を堅持する。「帰ってこなかったなら無責任極まる、裏切り者だ」（韓国語版Ⅸ-413：文藝春秋版Ⅶ-260）と言ったりもする¹³⁾。しかしついに彼らは帰ってこなかったし、ゲリラはより一層孤立していく状況となった。

「（…）4・3事件は起こるだけの必然性があった。そうだろう。でなければ、全島民的蜂起、その支持には至らん。しかしだ、勝敗に関する限り、矛盾するが、おれは否定的なんだ。つまり勝算がないたたかいはじめたということだよ。つまり失敗ということだ。（…）あとは強大な政府軍に包囲されて、袋小路でたたかうしかない。しかもアメリカ軍が後ろに控えているんだぞ。……どうすればよいか。

うーふむ、どういう事情なのかは分らんが、おれは許せない気持ちだ。島民として許せんのだよ、金星達たちを……」（韓国語版X-248～249：文藝春秋版VI-425）

濟州島は大殺戮の惨禍に陥ってしまったし、ゲリラの敗北は火を見るより明らかだった。このような状況で李芳根は「山中のゲリラ全員を組織的に島から脱出させる道」（韓国語版X-258：文藝春秋版VI-431）を夢見る。それは困難な夢であったが、個人的な次元で制限的ではあるが脱出作業におよぶ。韓大用に買い与えた漁船などを動員してゲリラを日本へ密航させることに渾身の力を振り絞る。

（…）おれは敗北を予想するたたかいで死を、革命的な死とは考えないよ。少なくとも犬死というのは、何らかの方法を見出さなければならぬ。方針の転換、犠牲を最小にしながら全員救出、脱出、退却というのはことばの美化になるだろう、脱出の道を図らねばならない。（…）全員脱出が不可能ならば、一人でも二人でも……。”（韓国語版X-274：文藝春秋版VI-442）

「（…）あらゆる死は生者、生のためのみあって、死者は、生者のなかでのみ生きる」（韓国語版XI-324：文藝春秋版VII-204）という信念の下に彼は愛する妹、有媛と城内地区女性同盟副委員長である辛英玉を日本から脱出させたのに続いて、城内の醸造工場に収容されていた南承之を引き出して無理矢理、密航船に乗せる。

金石範は数多くの人命の犠牲に対してアメリカ、李承晩、西北、軍警にだけ責任を求めたのではない。用意周到な準備もなしで蜂起を起こして島を抜け出た一部武装隊指導部にも悲劇的事態に対する責任があることを、李芳根らを通して明確に述べている。したがって1人でも多く生かすために密航船を浮かすことに全力投球する李芳根の姿は、とても涙ぐましくて崇高に映る。それは平

和を念願する切実で孤独な闘争だったといえることができる。

以上のことから、『火山島』は作家金石範の人間愛が平和指向の精神に密かに昇華された作品だといえることができる。作家が終始一貫力点を置いている平和に対する信念はまさしく4・3の精神であろう。これは『火山島』が巨大叙事の政治性を越えて注目されなければならない部分であると同時に、「今-ここ」においても奥深く銘記されなければならない要素となっているといえる。

4. 海と城内*の場所性

* ソンアン성안ともいうが、かつて濟州邑と呼ばれた地域で、旧濟州市（現在の濟州市の洞地区で、濟州国際空港近くの市街地が「新濟州」と呼ばれるのに対して最近では原（ウォン）濟州とも呼ばれているようである）の中心部が城郭都市の形態をとっていてその城郭の内側地域を指す。耽羅国の時代から永らく濟州の中心地であった。

『火山島』のもつ4・3小説としての位相は場所性という面でも目を瞞るものがある。注目すべき場所として海と城内が挙げられる。海は4・3小説の幅を拡げ、城内はその深さを際立たせる役割も果たしているといえることができる。

とくに、4・3小説の領域を海まで拡張したという点は他の4・3小説にはない大きな成果といえる。その間の4・3小説では事態の様相や展開は、主に漢拏山とオルム、草原、そして村と海岸を舞台として形象化された。4・3小説に描かれた海は水葬の空間、往来する空間、遮断された空間以上の意味を持つことはなかった。ところが『火山島』では海が4・3にとってどれほど重要な空間であったかを明確に認識されている点に小説としての卓越さが確保されているといえる。

4・3蜂起を控えて康蒙九と南承之は海を渡って日本に行く。在日濟州人などから闘争資金を集めるためだ。すなわちカンパ（kampaniya）闘争のための渡日だ。

密航船は一昼夜半走り続けてから、ようやく島影を望むことができた。朝、甲板に出た南承之は、鬢をなでる春風のさわやかな音を耳にしながら、それを見届けた。壱岐の島だという。(…)南承之はとうとう日本だという感慨よりも、迫ってくる何か未知の力にこれから捕捉され吸い込まれるようなためらいをおぼえた。高いところで下をのぞきこむときの、一瞬の眩暈に似た突き上げだった。日本に最愛の肉親たちがいるにもかかわらず、南承之はそのときふと背後の広大な海の向こうに漢拏山の美しい山容のもとにひろがる濟州島の姿を思い浮かべた。そして後ろを振り返り、茫漠とした水平線の彼方を追ったのだった。(韓国語版Ⅱ-360：文藝春秋版Ⅱ-34)

日本到着を控えて海上で南承之が感じる不可思議な圧迫感と恐れは、蜂起の主役が担った重荷に対する負担感だ。それは彼らの使命感や誠実さと相通じているといえる。水平線の向こう側の漢拏山を望みみて心を整えて今一度闘争の勝利を決意しているのである。

彼らは185万円の資金を集めて濟州行きの密航船に乗る。次の引用は康蒙九と南承之が日本でカンパ闘争を終えて帰ってくる時、海で嵐にあらう場面だ。荒波の中の急迫した人々の姿が非常に躍動的に描かれている。

「動くな！」いつの間にかカバンから取り出していたのか、康蒙九の右手に拳銃が構えられていた。(…)[(…)]いろんな事情はあろうが、きみたちは商人だ。カネはまた儲ける機会がある。しかし私が持っていく荷物は個人の商品じゃない。カネ儲けの荷物じゃないんだ。(…)/先刻から日本へ引き返そうといった出目で薄禿げの男が半狂いのように、ドロボー、海賊だとわめいて泣きだした。康蒙九はドア際の船長と船員をよけさせると、軋むドアを開いて腕を突き出し、風が暴れ込んでくる空

へ向けて一発ぶっ放した。(…)/南承之は船室の壁に取り付けた太いロープを掴み、デッキにしがみつきながら船首のほうの甲板へ行った。波が大きな岩でも叩きつけるように轟音とともに舷を打ってくる。それでも船は波を撥ね返して海面すれすれに傾いた船体を持ち直して進む。全身に降りかかる冷たい波しぶきを浴びながら南承之は恐怖心を通り越して、荒海と格闘する小さな船に感嘆した。(…)/波をかぶりながら、揺れる船の上で船員たちは荷物を次々と海へ捨てた。小一時間で20数個の大きな荷物が捨てられたが、それだけで船は海面からすくっと浮き上がり、しかも身軽になって波に乗っているような感覚が突っ張った足もとから全身にのぼって来た。(韓国語版Ⅲ-232～234：文藝春秋版Ⅱ-278～279)

座礁の危機を克服した船は、結局波を越えて濟州島にたどり着いた。人命被害はなかったが、荷主の荷物はほとんど海に捨てられた。カンパ闘争で集めた康蒙九と南承之の荷物のうちでも長靴や運動靴が入った箱は一部捨てざるを得なかった。このようにカンパ闘争を終えて帰還した海で荒々しい嵐に会う状況は4・3の険しい旅程を暗示する。闘争の将来にやってくる試練が決して侮れないことを予測させる。危機状況で康蒙九のように用意周到な指導力と決断力が発揮することができなければ、蜂起は座礁する可能性があることを警告するメッセージにも解釈される。

作品後半部で李芳根は他人に偽装して逃げる柳達鉉を自身の密航船に乗せる。親日派であり組織の背信者である彼に対して「山のなかではなく、海の上の人民裁判」(韓国語版Ⅺ-310：文藝春秋版Ⅶ-196)を計画したのだ。ところがそのような過程で意図せず韓大用と青年たちによって柳達鉉が帆柱に縛り付けられるという事態が起こる。荒々しい海上に浮かぶ密航船の帆柱に人が縛り付けられた状況は非常に印象的な場面だ。

「おまえは、お、オレを殺そうとしている。悪魔め、おまえの手で、おまえの自らの手で。ユ、ユダじゃない、柳達鉉を、殺せ、殺してみろ、おまえはまえからおれを殺そうとしていたんだ。アイグ……、アイグ……。」/ミシッ、ミシッとマストが歯ざしりをして船が揺れた。舷を叩いた大きな黒い波のかたまり甲板に躍り上がってくる。船は反対側の波の谷間へ吸い込まれんばかりに傾きながら、盛り上がる波に押しあげられるようにしてふたび揺れ戻す。甲板に音を立てて溢れる海水がまたたくまに流れて落ちた。李芳根は下半身がびしょ濡れになり、足を踏ん張って立った。/追い風ながら、風もしぶきも氷のように冷たかった。これが向かい風だったら、寒い、寒い……と声を出していたが、マストの柳達鉉は凍てしまいうだろう。船体が傾くたびに、天辺のほうに重心を取られた古いマストは左右にかなり大きく揺れて軋みつづけた。海は時化でもないのに、荒れてきているようだった。/間歇的に襲ってくる船体より大きな波の底に頭を突っ込みながら、船は船首を立て直して懸命に進んで行く。まるでしゃくり上げようにして（韓国語版XI-346：文藝春秋版VII-218）。

縛りつけられた柳達鉉は、幻覚に捕われてカラスが飛んでくると大声を張り上げるとついに糞尿を垂れ流して死ぬ。彼の死体は波に洗われた後、暗い海に投げ棄てられた。ゆらゆらする海の上で繰り返される場面は、読者に途方もない緊張感を与えつつ劇的に受け止められるであろう。

李芳根は海に密航船を浮かすことによって自身の方式で闘争を展開し、これ通じて再生と復活の種を残した。海がなかったとすれば彼は愛する人々を生かすことができなかつただろう。彼は漢拏山麓の山泉壇で迎える最後の瞬間にも海を見る。「はるか高原の、なおはるかに、初夏の陽光にぎらつく不動の海」（韓国語版XII-370：文藝春秋版VII-511）が引き金を引く瞬間の彼に捉えられた。海

は彼に最後の希望となった。

このように『火山島』は、4・3で海がもつまた別の側面を遺憾なく示している。ディテールにおいて密度ある描写を基礎に誰も書くことが出来なかつた新しさを提示しているのである¹⁴⁾。成功した「異化」*といっても過言ではない。それは何度も済州、木浦、日本などの地を船で出入りした末に1946年7月に日本に密航した金石範の経験と関連が深いことはもちろんだ。国内の4・3小説では見過ごされてきた海洋文学的要素の意味深い発見というに値する。

* 낯설게하기、英語では defamiliarization で非日常化とも訳される。慣れ親しんだ日常的な事物を奇異で非日常的なものとして表現するための手法で、ロシア・フォルマリズムの嚆矢とされるV・シクロフスキーによって提唱されたものとされる。

一方、城内が主な空間的背景に前景化したことも重要な脈絡だ。韓国の作家の4・3小説では済州島地域の場合、城内よりは郊外周辺の農漁村を舞台としてストーリーが展開する作品が大部分だった¹⁵⁾。3・1事件の状況を描くことや、観徳亭の前に展示された李徳九司令官の死体の描写などを除いて、城内はほとんど注目されてこなかった。それは、民間人虐殺の問題や、討伐隊と武装隊の狭間で犠牲になる良民の姿を主に扱ってきたためであると分析することができる。したがって城内という場所性が強調されるということは、『火山島』がもつ秀でた特徴だと言える。

この作品は南承之が城内に入ってくる場面から始まる。ここで李芳根、梁俊午、金東辰、康蒙九、柳達鉉などが絡み合うなかで事件が展開し、ゲリラのビラが印刷されてまかれ、李芳根が苦悩と葛藤で揺れ動く。西北の横暴が拡大して、単独選挙推進勢力の歩みが具体化され、討伐作戦が樹立され、米軍と米軍政の動きが捉えられる。巫女の祭りが繰り返り広げられて祭事が挙行されるかと思えば、あらゆる風俗が繰り返り広げられる。

金石範が「多少の避難民はいても、しかし直接の被害のない城内」（韓国語版VII-55：文藝春秋版

IV-456) を選んだ戦略は有効だった。濟州島の政治・経済・社会・文化の中心地であり武装隊の攻撃がほとんど及び得ないところ、討伐側の軍警と西青の活動根拠地であるところ、その一方で濟州島の知識人の活動の中心地である城内が主な舞台となることで4・3の心臓部により近くアプローチすることのできる条件を整えることができた。

城内は事件そのものから距離をおくうえでも適切な空間となった。そこが殺戮の真っ只中ではなかったので事態をより客観的に眺望できたといえる。4月3日城内攻撃の不発によって「城内の真空のような静寂」(韓国語版IV-319:文藝春秋版Ⅲ—346)を描いた部分では蜂起の究極的失敗を予感させる。城内の状況が事態全般を押し量る核心因子だったことを意味する。

同時に、主人公李芳根が城内のブルジョアだという点も重要だ。城内に位置する彼の家は蜂起を主導した人物がいつも出入りする空間だった。西北や警察、地域の有志もたびたび訪ねてきた。でんぼう爺い、木鐸令監(木魚爺さん)も出入りしたし、‘プロギ’¹⁶⁾は李芳根の家を拠点に組織連絡員として活動した。彼が資産家だったので事態の渦中にあっても例外的に木浦を通じてソウルに出入ってきたし、密航船まで運営することもできた。それは4・3をさらに立体的に照明できる条件となった。

要するに『火山島』が海と城内の場所性を浮び上がらせたことは4・3小説において格別に注目される事項だ。4・3事件への新しいアプローチとして海を意味深く捕らえたという点、城内が異化の方式で小説の主な空間的背景となったという点は、他の作家の4・3小説では接しえなかった重要な要素だ。空間的領域の拡張と新しい発見はこの小説が果たした独自の成果を物語っている。

5. おわりに

金石範の『火山島』は、2015年10月の韓国での完訳出版を契機にその研究に新しい局面を迎え

た。この作品は多様なアプローチが可能であるが、本稿では4・3小説という観点から考察した。これまでの議論を整理すると次の通りである。

第一に、『火山島』は、反帝国主義統一闘争としての4・3の意義を明確にしている作品だ。日本からアメリカへと引き継がれる植民地状況と、朝鮮半島の分割占領という状況での分断克服の念願が濟州島で噴出したのが4・3という認識だ。とりわけこの作品では持続する植民状況に対する濟州島民衆と知識人の認識、占領軍を自任した米軍の存在、4・3の勃発と鎮圧過程でのアメリカの役割、米軍政の政策による親日派の勢力拡大などを問題にしている。と同時に連合国に協力した朝鮮が分割され、疲弊したという、逆説的状況に対する批判とともに分断克服のための統一闘争としての4・3の意味も強調されている。

第二に、『火山島』では4・3が大惨事に帰結することに対する無念さが始終一貫感知される。作家の信念は作中人物李芳根を通じて主に表現されるが、李芳根は事態の平和的解決が切実だと感じる。ところが成功したかにもえた4・28平和交渉が警察によって破られて以後、事態が悪化の一途を辿ることになり、交渉破壊工作を仕組んだ鄭世容は作品の最後で直接処断される。さらに、李芳根はゲリラ指導部の無責任さについても呵責なく批判する。大殺戮の惨禍に陥る後半部で李芳根はゲリラを日本に密航させようと渾身の働きをする。それは人間を愛して平和を念願する孤独な闘争だった。

第三に、『火山島』の位相は海と城内の意味を浮び上がらせた場所性という面でも異彩を放っている。海は、カンパ闘争のために行き来し、柳達鉉を処断し、密航船を航行させる空間として濃密に描かれるが、これは4・3小説の領域を海に拡張したという点で他の4・3小説にはない成果として評価できる。城内が主な空間的背景になったことも他の作家の4・3小説ではみられない重要な部分だ。濟州島の政治社会的中心地であり、知識人の主な活動舞台であったところ、ゲリラの攻撃がほとんど達し得ないところ、米軍と軍警・西青の拠

点であるところの城内が前景化されることによって4・3の心臓部により近くアプローチすることのできる条件となったといえる。

4・3小説は久しく停滞状態を脱することが出来ないという指摘が多い。このような状況で金石範の『火山島』はその完訳を通じて4・3小説刷新の方向に相当な示唆を与えている。本稿で検討したように、『火山島』は、反帝国主義統一闘争を強調することによってイデオロギーコンプレックスを果敢に突破し、人間愛と平和指向の精神を終始一貫堅持することによって崇高な4・3精神を継承すべきことを提示し、海と城内の場所性の浮上を通じて4・3をより一層立体的に照射する戦略的想像力の必要性を立証したといえることができる。

注

- 1) [김석범, 김환기·김학동 2015]、日本語原典は1997年までに文芸春秋で刊行されている。第1部の翻訳本が1988年イ・ホ Chol・キムソクヒによって実践文学社から刊行されたが、これは原典と異なり日誌風で欠落部分もある。
- 2) 共同翻訳者であるキム・ハクトンは「『火山島』は日本文学でなく、いつかは韓国語で翻訳されて紹介されるときその存在価値が光を放つことができるような韓国文学であり民族文学としての性格を濃厚に内包している」と述べている [김학동 2005:287]。
- 3) クォン・ソンウは「『火山島』は、それについての批評を書くことに対する熱望を精一杯刺激する最良の文学テキスト」としながらディアスポラ・アイデンティティと亡命、密航、人物形象化の意味、革命に対する理由などを議論している。彼は「機会があるならば『火山島』にあらわれた親日問題、政治と芸術、虚無主義と孤独、組織と自由、革命と反革命に対する理由、極めて文学的な描写と表現、済州島の人文地理、解放直後のソウル都心の文化的風景、登場人物の夢、文学的限界などに対して文書を書きたい」 [권성우 2016 : 262 - 283] と述べている。
- 4) [유임하 2016]。ユ・イムハは韓国語完訳本の責任校閲者である。
- 5) 中村福治は「『火山島』は1948年から1949年にかけての韓国を舞台としつつ、済州4・3抗争と親日派処断という二種類の問題を小説の支柱としている」としているが、親日派問題は4・3の一原因で

あるとされていることから、事実上4・3がこの小説の核心といえる [나카무라후쿠지 2001 : 7]

- 6) ローマ数字は韓国語完訳本の巻数、アラビア数字はページ数、漢数字は原書の巻数を示す。
- 7) この記念式直後の街頭デモの途中、警察の発砲で6人が死亡し、6名が負傷するなどの事態が起きた。「3・1事件」というが、これが4・3の導火線となった。
- 8) 小説の中盤になると、韓国の単独政府が樹立して太極旗がはためく。「星条旗が解放後のかた3年間、昼となく夜となくポールに掲げられて」いたのが、「8月15日の新政府樹立ということで星条旗が下されたのは、表向きには理に適っているだろう。それではなせ米軍が撤退せずこの国に居座りつづけようとするのだ」(韓国語版VI-287: 文藝春秋版304) という疑問は引き続き提起される。
- 9) 李芳根は親日経歴者を無条件すべて問題にするのではなかった。「過去の日帝協力者であっても、それはかまわぬこと。そのことの徹底した自己否定の上での社会参与なら、何もしないこのおれなんかよりもずっとまし、大いに喜ぶべきことなのだ」(韓国語版VI-29: 文藝春秋版IV-142) と述べているように、真の懺悔が前提になるならば彼らの社会参加は望ましいという立場だ。
- 10) 金石範は、解放直後の状況と関連して「協和会の幹部しとった男が、今こそ私みたい人間が出てやるべき時だって言うんです。(…)人間が一夜に変わるんだ。考えたら日本へ戻った私も情けない人間だったが、一晩で変わる人間を見るのも情けなかった。ほんとにね、涙出るね……。」と語っている。金石範が実際に体験したこの男が『火山島』で柳達鉉として登場したことがわかる [김석범·김시중 (문경수編), 이경원·오정은訳 2007 : 26、原書 : 30]。
- 11) 1948年4月28日大静面九億里での金益烈と金達三交渉は「①72時間内に戦闘を完全に中止するものの、散発的に衝突があれば連絡不十分と見なして、5日以後の戦闘は背信行為と見なす、②武装解除は順次実施するものの約束に違反すれば直ちに戦闘を再開する、③武装解除と下山が円満に行われれば主謀者らの身柄を保障する」などの合意をみた [제주 4.3 사건 진상 규명 및 희생자 명예 회복 위원회 2003 : 198 〈日本語版〉 203]。
『火山島』でもこのような歴史的事実をほとんどそのまま叙述している。
- 12) キム・ジェヨンは「この作品は武装隊を主な登場人物にしているうえに、彼ら自身が語るように配置しているにも関わらず、私たちが想像するように彼らを一方向的に美化してはいない」と『火山島』を分析している [김재용 1999:288]。

- 13) これに比べて最後まで島に残って闘争を導いた李成雲(李徳九がモデル)に対しては「篤実で地味な青年」(韓国語版X-318:文藝春秋版VI-469)など肯定的に評価している。
- 14) クォン・ソンウは『火山島』が「その間、韓国の小説が十分に形象化できない事件と場面を真に印象的に形象化しているが、その中の一つに〈密航〉をあげることが出来る」としながら、「密航過程に対する描写が非常に驚くべきで新鮮」だとし、それを「密航の想像力」と称した[권성우 2016: 273]。
- 15) 済州島以外の地域を舞台とする小説では、朝鮮半島南部や日本などに舞台が拡大することもある。ヤン・ウィソンの『한나의 메아리(漢拏のこだま)』(2000)のような北朝鮮作家の作品では北側の海州と平壤などの地が背景に登場する。『한나의 메아리(漢拏のこだま)』については[金東潤 2003: 177-210]を参照すること。
- 16) [김석범, 김환기·김학동訳 2015]の「부억이」という名前は問題があると思う。実践文学社版では「부억이」となっていた。原典は「ブオギ」「ブオガ」となっていてそのパッチムに‘ㄹ’を使うことはできないであろう。부억이, 부억야と呼ぶのはあまりにも不自然だ。부억이 もしくは, 부옥이と訳さなければならないのではないだろうか。韓国人の名前としては부옥이がより適当だと考える。済州語では一定の施設を備えて料理や皿洗いなどの仕事をする所を意味する名詞としては부억ではなくてチョンジ정지(정제)を使っているという点、原典で「台所」は「厨房」(日本の文藝春秋版1巻256ページ)と表記しているという点を考慮する必要がある。

参照文献

基本文献

- 김석범, 김환기·김학동訳(2015)『화산도』I~XII, 보고서.
- 金石範(1983)『火山島』I~III文藝春秋.
- (1997)『火山島』IV~VII文藝春秋.

ハンゲル文献

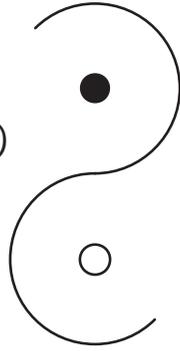
- 고명철(2016)「해방공간의 혼돈과 섬의 혁명에 대한 문학적 고투: 김석범의 『화산도』 연구 (1)」, 済州大学校在日済州人センター·耽羅文化研究院 『제일제주인문학에서 세계문학으로 학술심포지엄자료집』.
- 권성우(2016)「망명, 혹은 밀항(密航)의 상상력」『자음과 모음』春号.
- 金東潤(2003)「북한소설의 4·3 인식양상: 양의선의 〈한나의메아리〉론」『4·3의 진실과 문학』각.
- (2015)「빛나는 전범(典範), 관점의 무게」, 김석범, 김석희 옮김, 『가마귀의 죽음』, 각.
- 김석범, 이호철·김석희訳(1988)『화산도』1~5, 실천문학사.
- 김재용(1999)「폭력과 권력, 그리고 민중: 4·3 문학, 그 안팎의 저항적 목소리」, 역사문제연구소, 『제주 4·3 연구』, 역사비평사.
- 김학동(2005)『『火山島』 완역의 의미』, 『제주작가』冬号.
- 김환기(2015)「김석범 『화산도』 < 제주 4.3 >: 『화산도』의 역사적 / 문화사적 의미」, 『일본학』41, 동국대학교일본학연구소.
- 오은영(2015)『제일조선인문학에 있어서 조선적인 것: 김석범작품을 중심으로』선인.
- 유입하(2016)「초대서평 - 김석범소설 『화산도』」, 『아시아경제』5.2.
- 제주 4.3 사건진상규명 및 희생자명예회복위원회(2003)『제주 4.3 사건진상조사보고서』 済州 4·3 平和財團(2014年)『〈日本語版〉 済州 4·3 事件真相調査報告書』.

原典が日本語の資料

- 김석범·김시중(문경수編), 이정원·오정은訳(2007)『왜 계속 써왔는가, 왜 침묵해 왔는가』 済州대학교 출판부(金石範·金時鐘著, 文京洙編[2001]『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか: 済州島四・三事件の記憶と文学』平凡社).
- 나카무라후쿠지(2001)『김석범 『화산도』 읽기: 제주 4·3 항쟁과 제일한국인문학』삼인, (中村福治[2001]『金石範と『火山島』—済州島 4·3 事件と在日朝鮮人文学』同時代社).

特集

金達寿と雑誌『日本のなかの朝鮮文化』



廣瀬陽一（大阪府立大学非常勤講師）

キーワード：金達寿，鄭詔文，『日本のなかの朝鮮文化』，古代日韓関係，渡来人

Key words: KIM Dalsu, JUNG Jomoon, 'Korean culture in Japan', Ancient relationship between Japan and Korean, Toraijin (migrants)

1. はじめに

金達寿（1920-97年）は、1970年前後から徐々に活動領域を文学から古代史へと移しはじめ、日本全国に残存している古代文化遺跡を探訪して、それが意味するものを問い続けた。『日本の中の朝鮮文化』全12巻として残されている膨大な紀行文こそ、その集大成に他ならない。同シリーズに代表される彼の古代史研究について、私は『金達寿とその時代』[2016: 第4章1～2節]で取り上げて詳細に論じ、彼の研究に触発された多くの日本人と在日朝鮮人によって、古代史に関する専門家とアマチュア、日本人と朝鮮人との壁を乗り越える、多元的で連合的な知的ネットワークが構築されたことを示した。ただしこれは彼が意図した結果ではない。たしかに彼は、50年代半ば頃から60年代を通じて古代史への関心を深めていったが、古代史の領域に深入りするつもりはなかった。彼はむしろ、リアリズム研究会に代表される独自の文学運動を通じて、このような知的ネットワークの構築を目指してきた。それが古代史という、彼自身がまったく予想しなかった領域で実現したのである。

しかし経緯はどうあれ、『日本の中の朝鮮文化』第1巻を刊行した後、金達寿の説に賛同した日本人から、愛読者カードや手紙などが千数百通も届いたというエピソード[金達寿 1983:5]に窺えるように、彼が古代史研究における連合的な知的ネットワークを構築する上で、極めて重要な結節点の役割を果たしたことは疑いない。しかし我々は同時に、彼が唯一の結節点というわけではなかったことにも目を向ける必要がある。実際、70年代には、この知的ネットワークの広がりや、ある意味では金達寿の著作以上に目に見える形で提示し、結びつける舞台となった雑誌があった。それが鄭貴文（1916-86年）・詔文（1918-89年）兄弟が創刊した季刊誌『日本のなかの朝鮮文化』（1969-81年。全50号。雑誌名の「なか」は平仮名）である。金達寿は雑誌の創刊を企画した当事者の一人で、対外的には一執筆者という立場をとったものの、創刊号から50号まで実質的な編集長を務めた[松本 1987.5:216]。このためこの雑誌も、ある程度は彼の意向が反映されている点は否めない。しかし執筆者の中には上田正昭や司馬遼太郎をはじめ、すでに様々な領域で活躍している研究者や文学者たちが数多くおり、彼らが自説よりも金達寿の意向を優先して論文を書いたり座談会で発言したとは考えられない。またこの雑誌で行われた古代史批判は、やはり金達寿らが中心となって75年に創刊した『季刊三千里』の8号（76年11月）から始まった連載企画「教科書のなかの朝鮮」の先駆けとして位置づけられるものである。こうし

た意味で『日本のなかの朝鮮文化』は、金達寿の『日本の中の朝鮮文化』とは別の角度から、70年代の日本社会と在日朝鮮人社会における、古代日朝関係史をめぐる知的ネットワークの姿を浮き彫りにしてくれる、貴重な雑誌なのである。

しかし管見の限り、今のところ日本社会でも 코리아社会でも、この雑誌に焦点をあてて論じた研究は一つもない。雑誌の運営に関わった人物が書き残した文章、および鄭詔文についての評伝とドキュメンタリー映画の中に、雑誌に言及したものや出版社が企画した遺跡巡りツアーの映像が出てくる程度である。私も著書では簡単にしか触れなかった。しかしそれだからと言って、『日本のなかの朝鮮文化』は決して軽く扱ってよい雑誌ではない。「日本のなかの朝鮮文化」を励ます会で、竹内好 [1973.3:54] が、「これは日本でいちばん革命的な雑誌であると思うようになりました」と絶賛したように、これは、未だ〈皇国史観〉を根本的に切断できていない日本の古代史研究の言説空間と、それを無批判に受け容れている日本人の歴史認識に対する、在日朝鮮人からの異議申し立ての雑誌だからだ。

以上の視座から、本稿では、『日本のなかの朝鮮文化』が創刊されるまでの経緯、雑誌を舞台に展開された様々な論考や座談会、出版社による企画を見ていくことで、この雑誌が果たした役割や意義を明らかにする。それとともに、在日朝鮮人が主体となって発行・運営された雑誌の研究が、現在のところ、『民主朝鮮』『季刊三千里』などの総合雑誌や、『朝鮮文芸』『ヂングレ』などの文芸雑誌に偏して行われている状況に対し、日本と朝鮮の関係史に焦点をあてた歴史雑誌である『日本のなかの朝鮮文化』にも目を向けることの重要性を提起したい。

2. 金達寿と鄭貴文・詔文兄弟との出逢いから雑誌創刊まで

金達寿と鄭兄弟との出逢いから雑誌創刊までの

経緯、初期の運営体制については、金達寿・鄭貴文をはじめ、創刊時から名前を伏せて関わっていた李進熙、実務を担当した社員の松本良子がそれぞれ書き残している [金達寿 1998, 鄭貴文 1970.11, 1976.3, 1987, 李進熙 2000, 松本 1987.5]。二次資料としては、鄭詔文の生涯を描いた備仲臣道の評伝と鄭詔文・鄭喜斗の編著、および崔宣一がプロデューサー・黃哲民が監督を務めたドキュメンタリー映画がある [備中 1993, 鄭詔文・鄭喜斗編 2013, 黃哲民 (監督) 2015]。それらの記述の中には矛盾するものもあるが、誰の発言が正確なのか判断できないものがあるため、矛盾する部分については基本的に論者の判断を入れずに記録を並置し、雑誌創刊に至るまでの経緯と初期の運営体制を明らかにする。

さて、金達寿と鄭兄弟はいつ出会ったのか、また鄭貴文と鄭詔文のどちらが先に金達寿と知り合ったのか。まず、金達寿が鄭貴文と出会ったのは60年代初め頃と推測される。金達寿は57年に、西野辰吉や霜多正次たちとリアリズム研究会という文学運動体を結成しており、会を主導する立場にあった。研究会では『リアリズム』(9号より『現実と文学』と改題) という機関誌を発行していたが、それとは別に、63年1月、研究会に属していた在日朝鮮人が主体となって、『朝陽』という機関誌を創刊した。その編集長を務めたのが鄭貴文だった。鄭貴文がいつ研究会に入会したかは不明だが、『朝陽』を創刊するための編集会議は62年以前に行われただろうから、遅くともこの段階で金達寿と鄭貴文は顔を合わせていたはずである。これに対し、金達寿が鄭詔文と出会った時期は明確でない。鄭貴文 [1987:184] は、60年代初め以前から、鄭詔文は金達寿や李進熙と交遊があったと書いている。他方、備仲 [1993:132] は、63年当時、金達寿は総連の傘下団体である文芸同 (在日本朝鮮文学芸術家同盟。金達寿は63年頃から68年頃まで、文芸同の非専任副委員長を務めていた) におり、全国を巡ってカンパを集めていたのだが、京都を訪れた際に鄭貴文の紹介で会ったと記している。

二人について、金達寿 [1998:255] は、「ともに自家用車などももっている事業家で、朝総連京都の役員でもあったが、兄の貴文は、かつては文学青年だったということもある男だった」と記している。鄭詔文は49年頃に京都の東山三条にパチンコ店を開いて以後、事業家としての道を歩んでいた。55年、東山区縄手通りの骨董店「柳」で朝鮮王朝時代の白磁の壺と出会い、次いで知り合いの大工からも壺を買い取り、これを契機に朝鮮の美術品の収集に没頭しはじめた。その過程で彼は、朝鮮の文物を恒常的に展示する美術館を作りたいという夢を膨らませていった [備中 1993:122]。なお金達寿は、鄭詔文と白磁の壺との出会いについて、68年終わり頃に、事務所に入出入りしていた清水某という大工から頼まれて購入したことに始まると述べている [金達寿 1998:266]。しかし『日本のなかの朝鮮文化』創刊が69年3月なので、収集を始めた時期については金達寿の記憶違いと思われる。

他方、「かつて文学青年だった」という鄭貴文であるが、以前から文学に関心があったことは確かだろう。しかし「私は四十なかばにして小説なるものを書き始めたばかりだったから「朝陽」を主宰することによって、勉強したいという願望を持っていた」 [鄭貴文 1987:203] と語っていることから、実際に文学作品を創作・発表しはじめたのは62～63年頃と思われる。確認できる早い時期に書かれた小説としては、63年に発表された「傷痕」「民族の歌」（いずれも『朝陽』）と「稚児の舌」（『現実と文学』）がある。「民族の歌」は、『朝陽』が総連の圧力によって2号で廃刊に追いこまれた [鄭貴文 1987:201-203] 後、『現実と文学』に発表の場を移して23～46号（63年7月～65年6月）まで連載、66年に東方社から刊行された。また『朝陽』と前後して創刊された同人誌『東大阪文学』にも、「故国祖国」「透明の街」「わがナグネ」（いずれも創生社より刊行）などの小説やノンフィクション、エッセイを精力的に発表し続けた。

備仲 [1993:132] によれば、鄭詔文は金達寿と初めて会った際、「先生のご本はおもしろいことあ

りませんなあ」と言ったが、金達寿は、「これはおもしろそうな男だ」と思ったという。また鄭貴文については、先述のように文学青年という印象を持った。他方で鄭兄弟も金達寿の古代史への関心に共感し、三名で連れ立って骨董店や朝鮮に関する展覧会を巡ったり、日本各地の古代文化遺跡を探訪するようになった。

そうして68年夏、三名が佐賀県の古代文化遺跡を探訪した帰りのことである [松本 1987.5]。金達寿は、自分たちが探訪している文化遺跡などについての雑誌を出し、もっと多くの人々、特に日本人に知ってもらいたいと語った。すると鄭詔文が、いくらぐらい掛かるものなのかと尋ねてきた。金達寿は概算を示して、「支出一方の赤字雑誌と考えなくてはならない」と答えた。これを聞いた鄭詔文は決意したように、「それだったら、それ、おれが出そうじゃないか」と応じた。鄭貴文も「ああ、それはいい。そうしてくれ」と賛同し、「おれにもそれに何か書かしてもらいたい」と述べた。この会話が『日本のなかの朝鮮文化』創刊の発端となった [金達寿 1998:256]。しかし雑誌を発行するためには、財政の他に、さらに二つの大きな壁を超える必要があった。その一つは、彼ら三名が属していた総連の許可を得ることだった。

金達寿は、雑誌の刊行許可を得るため、文芸同などの傘下団体を飛び越え、直接、『民主朝鮮』時代からの顔なじみだった、総連議長の韓徳銖の諒解を取りつけようと試みた。慣れない朝鮮語で上申書を書き、李進熙に字句を修正してもらって、総連副議長だった許南麒を通じて提出した。一週間ほど後、許南麒は金達寿に、「韓議長は、あれ、許可できない、と言った」が、「とって、許可しないとも言わない、とも言ったよ」と告げた。許可しないと言ったところで、金達寿は止めないだろうからだ、ということだった [金達寿 1998:257-258]。こうして一つ目の壁は乗り越えられた。しかし実際には総連は創刊後、三名に様々な形で圧力をかけ、廃刊に追いこもうと画策した [松本 1987.5:217-220, 鄭貴文 1987:194-197, 備中 1993:142-146, 廣瀬 2016:232-235]。後述のように、創刊

号で鄭貴文が編集兼発行人だったにもかかわらず、途中で鄭詔文に変わったり、李進熙が長らく誌面に名前を出せなかった要因は、このことと深く関係している。

もう一つの壁は、在日朝鮮人が自分たちに都合のいいように文化遺跡や文献資料を解釈していると誤解されないよう、日本人学者の協力を得ることだった。そこで金達寿がまず目を付けたのが、当時京都大学教養学部助教授で、『帰化人』（65年）を著していた古代史研究者・上田正昭だった。金達寿は65年に立命館大学で開かれた上田の夏期講習に鄭兄弟を連れて行き、67年に開かれた朝鮮史研究会の後で行われた、京都の中の朝鮮文化遺跡巡りツアーにも鄭兄弟と参加した。これを機縁に、上田は金達寿や鄭兄弟と知り合い、雑誌に関わるようになった〔備中1993:150, 金達寿1998:260, 上田・姜在彦・鶴見・辛基秀2002:107-110〕。他方、上田とともに雑誌に深く関わるようになったもう一人の日本人・司馬遼太郎には、自宅が近所で、散歩中に顔を合わせる間柄だった鄭貴文が協力を要請した。司馬は、「どうせ三号でつぶれる」と思いつつ、パチンコ店や食堂を営んでいる親父がこういう雑誌を作るのも面白いと考え、協力を約束した〔司馬1973.3:51, 備中1993:151〕。以後、上田と司馬は毎回のように雑誌に登場したばかりか様々な形で雑誌を支え、社のメンバーから非公式的に「顧問」とされるほど密接な関係を持った。

こうして二つ目のハードルも乗り越えた彼らは、京都市北区柴竹上岸町15の鄭詔文宅の車庫のガレージの上に一室を作り、「日本のなかの朝鮮文化社」の事務所とした〔金達寿1998:261〕。社名は金達寿の提案で、彼が『民主文学』68年1月号に発表したエッセイのタイトルがそのまま使われた〔金達寿1998:259〕。13号（72年3月）より社名が「朝鮮文化社」に変更され、24号（74年12月）より事務所が京都市北区田中門前町28-10に移転した。創刊号の奥付には、編集兼発行人として鄭貴文の名前だけ記されたが、3号（69年9月）より編集人が鄭貴文・発行人が鄭詔文となり、15号（72年9月）より鄭詔文が編集兼発行人となった。総

連からの圧力によるものである〔鄭貴文1987:196〕。ただし鄭貴文はその後もこの雑誌にエッセイなどを発表し続けた。さらに18号（73年6月）からは、朝鮮大学を辞め、本格的に広開土王陵碑文の研究に没頭しはじめた李進熙が、公に名前を出して座談会に参加したり、論文を発表するようになった。

3. 『日本のなかの朝鮮文化』の概要

『日本のなかの朝鮮文化』は、13年という長い期間にわたって刊行されたため、誌面の構成や論調などに、いくつかの特徴や変化が見られる。そこで本節では、全体的な特徴を述べた上で、雑誌を大きく3期に分け、その変遷を概観したい。

(1) - a 刊行目的と執筆陣

一般的に雑誌の創刊号には、雑誌刊行の目的や編集方針などが、巻頭言や編集後記に掲げられる場合が多い。しかもそれらの文章は大抵、力強い意気込みに溢れている。それに比べると『日本のなかの朝鮮文化』の刊行目的は、創刊号の編集後記に鄭貴文〔1969.3:50〕が記した、「私たちは、私に即していえば、自分の民族の文化というものを知らなすぎていた」という自己反省の弁と、2号以降、断続的に編集部からの「通信」欄に記された、「『日本のなかの朝鮮文化』は日本にある朝鮮の文化的、歴史的遺跡などを明らかにすることによって、両国・両民族の自主と連帯とに寄与（ママ）しようとするものであります」〔無署名1969.6:43〕という、非常に穏当で読み手に刺激を与えないものとなっている。しかしもちろんこの控え目な態度は、日本人と総連の両方からの反発を避けるための戦略である。この戦略は執筆者の構成からも窺える。すなわち、在日朝鮮人が主体となって発行・運営された雑誌であるにもかかわらず、50号を通じて登場した在日朝鮮人の執筆者は、金達寿・李進熙・鄭兄弟の他には、金達寿の古代史研究やこの雑誌に触発されて、奈良・大和文華館で開催中だった「日

本・朝鮮の工芸品展」を見に行った随想を發表（5号に掲載）した林英由しかおらず、この5名以外はすべて日本人なのである（ただし読者投稿欄には、在日朝鮮人からの便りが何通か掲載されている、また、後述する日本のなかの朝鮮文化遺跡めぐりツアーの現地レポートにも在日朝鮮人の参加者が登場する）。2号に劉寒吉、4号に姜魏堂という人物が文章を寄せているが、4号の編集後記〔無署名1969.12:58〕でわざわざ、劉寒吉はある日本人のペンネームであり、姜魏堂も、彼が文章の冒頭で、自分は薩摩焼の「原産部落に生まれた日本人である」と書いているため、やはり日本人である、と断っているほどの徹底ぶりである。

雑誌には、古代史と近世（豊田秀吉の朝鮮侵略から朝鮮通信使）の二つの時代の日朝関係史を中心に、農業・印刷・舞踊・医学・焼物など、様々な分野における日本と朝鮮の関係を公的・私的に研究している、専門の研究者からアマチュアの郷土史家・歴史愛好家まで、多数の日本人の論考や随想、座談会やシンポジウム¹⁾が掲載されている。しかし歴史関係者だけでなく、松本清張や岡部伊都子などの文筆家、古代の伝説の研究者や言語学者などによる論考や随想も少なくない。変わったところでは、物理学者の湯川秀樹が、「神宮と神社について」（5号。70年3月）と「仏教と寺院について」（6号。70年6月）という2つの座談会に登場している。ただし湯川が呼ばれたのは、彼が神社や仏教に詳しいからではなく、「仏教渡来以前の日本文化」に関心を持っているから〔上田・金達寿・司馬・湯川1970.3:18〕であり、湯川は座談会を通じて聞き役・質問役に徹している。その後、雑誌の存在や「日本の中の朝鮮文化」の意義が認知されていくにつれ、商業誌や学術雑誌でも望めないような著名な専門家や知識人の論考の数は増え、座談会のメンバーも豪華なものとなっていった。

(1) - b 誌面構成と発行部数・販売ルート

誌面は大きく「誌上・朝鮮美術館」・座談会・論考や随想の3種で構成されている。「誌上・朝鮮美

術館」は、鄭詔文が自費で収集した朝鮮の古美術品や工芸品などのモノクロ写真を掲載した、アート紙2ページのコーナーで、創刊号から50号まで途切れることなく続いた。座談会もまた、「誌上・朝鮮美術館」とともに、50号を通じて行われた看板コーナーであるが、次節で述べるように、のちには座談会の代わりにシンポジウムが掲載される場合もあった。金達寿〔1998:260〕によれば、「いちいち論文を書いてもらうより、座談会の方が出してもらいやすいのではないかと思ったから」という理由で企画したのが発端だという。論考や随想は毎号3～8本程度掲載された。大多数は単発的なもので、分量も、長くても10ページ程度である。

その他のコーナーとしては、以下のものがある。

編集後記（1～4, 8, 15, 20号）
読者投稿欄（2～13, 15, 16号）
雑誌の表紙に使われた写真の紹介文（7～50号）
鄭貴文の小説「日野と小野」（8～10号）
新聞等に掲載された雑誌に関する書評の転載（17, 18, 24, 28, 32, 35号）。この他、別刷りで挟み込まれた書評・紹介記事も2, 3ある。
日本のなかの朝鮮文化遺跡めぐりツアーの現地レポート（14, 16, 18, 22, 23, 29, 32, 34, 39, 41, 42, 44, 46, 48号）
「日本のなかの朝鮮文化」を励ます会の様子やスピーチ（17号）
文化講座「日本と朝鮮」の講演の内容（27～31号）
記念随想（30, 40号）
第三十号記念論文募集（30号）。選出論文は32, 33号に掲載。
誌上講座「日本・朝鮮関係史」（41～50号）

創刊号の発行部数は1000部で、一般書店に卸す流通ルートではなく、京都市内の知り合いの書店や古書店、および彼らが個人的によく通っていた京都や東京の小料理店に置いてもらうという販売方法を取った。金達寿〔1998:264〕は、「はじめは全体として五〇部か、一〇〇部も売ればいいか

な」「十年くらいのうちには何とかなくなるはずだ」という気持ちだった。ところが『読売新聞』『毎日新聞』『神戸新聞』に創刊号の、『朝日新聞』『読売新聞』『図書新聞』に2号の紹介記事が掲載されたことにより、全国から注文が殺到し、創刊号は500部増刷、2号からは発行部数が2000部へと一挙に倍増した〔松本 1987:217-218〕。34号(77年6月)の段階では、在庫も含めて5000部を発行した〔鄭貴文 1987:200〕。取り扱ってくれる書店・古書店の数も全国各地に増えていき、最終的には宮城県仙台市から沖縄県那覇市まで広がった〔無署名 1980.9:11〕。なお、50号を通じて広告は一つも掲載されていない。

(2) - a 『日本のなかの朝鮮文化』第1期(1969-72年)

日本社会で古代史をめぐる状況が決定的に変化するの、72年3月に高松塚古墳から装飾壁画などが発見されて以降のことである。これは『日本のなかの朝鮮文化』も例外ではない。ゆえにこの時期までを、『日本のなかの朝鮮文化』第1期とする。

この時期に発表された座談会や論考は、朝鮮との関係を抜きにして日本の歴史を考えることはできないという、現在では当然の前提から議論をはじめ、様々な具体的な事例を通して日本列島と朝鮮半島の関係を論じたものが多い。例えば創刊号の座談会では、秦氏^{はたうじ}や漢氏^{あやうじ}を中国の王朝の始祖に結びつける、日本社会の思考の在り方への批判が見られる〔上田・金達寿・司馬・村井 1969.3:18-19〕。論考としては、武蔵野・近江・備前・周防・河内などの地方における古代の「帰化人」の広がりを概観したもの、山城の高麗寺・摂津の百濟寺・信州の善光寺、旧山口県左波郡の大日古墳・琵琶湖の大通路古墳・房総の芝山古墳、さらに石上神宮の七支刀、「天女伝説」や妙見信仰、地名など、個別的な遺跡や文物を通して、古代の日本における「帰化人」の存在の大きさを述べたものもある。これらを通して、『日本のなかの朝鮮文化』に関わった人々と読者の間に、古代日朝関係史への関

心と重要性が少しずつ共有されていったと考えられる。

これと平行して、第1期の誌面には、焼物や民芸品に関する論考やインタビュー記事もいくつか掲載されている。この方面で精力的に文章を書いたのは鄭貴文である。彼は朝鮮の美術品や民芸品の収集家を訪ねて話を聞いたり、鳥取の民芸美術館を訪問して記事を書いた。これを筆頭に、豊臣秀吉の朝鮮侵略の際に連れてこられた薩摩の陶工や、やはりこの時に持ち帰ってこられた金属活字に関する研究者や民芸家などの論考や座談会が見られる。李朝芸術を全般的に扱った論も見られる。なお、鄭貴文はこの時期、朝鮮の美術品や民芸品に関わるエッセイの他、「日野と小野」という連載小説も発表した。このことは、この時期にはまだ、雑誌の方向性が完全に固まっていなかったことを示している。

第1期は、雑誌の方向性が明確でなく、雑多な話題が混ぜ込まれている印象が強い。実際、鄭貴文〔1987:192〕によれば、旅先で出会った「地方の学者や研究者、社寺の宮司、住職といったひとびと」は、自分たち以上に歴史の矛盾を説いたが、「雑誌に載せたいということで執筆を依頼し、原稿をもらってみると、従来の歴史書と変わるところがな」く、「むしろより肩をいからせたものとなっていた」という。思うような原稿を揃えられなかった苦勞が窺える。ここに見られる公的な発言と私的な発言の使い分けは、専門の古代史研究者にとっても無縁なものではなかった。たとえば門脇禎二は、「蘇我氏の出自について」の冒頭〔1971.12:59〕で、「ことに最近、本誌の敬畏すべき活動と役割も含めて、朝鮮及び朝鮮史への差別的なみ方を改めるべきだとする声が強くなったが、新しい主張と自分の旧説とのかわりや否定を明らかにしたうえで新見解^{〔ママ〕}の展開するというやり方をしているのはほとんどない。いわば、旧説は旧説のままとして、それを云い書きした当人が、いわばなし崩し的に新しい見解へ転進しているのである。それも一つのやり方とは思いますが、わたくしは当面の主題にかかわってくる問題についての古

く誤っていた点を、この機会にまず明らかにしておきたいと思う」と自己批判している。アマチュアの歴史愛好家と違い、専門の学者が安易に新説を主張するのは難しいという理由はあるが、〈皇国史観〉の権威の呪縛と訣別するために門脇が敢えてこのように宣言したこと自体、古代史研究の言説空間に、いかに〈皇国史観〉的発想が深く根づいていたかを示していると言える。

(2) - b 『日本のなかの朝鮮文化』第2期(1972-78年)

第2期は、高松塚古墳を契機に日本社会で古代史ブーム・朝鮮ブームが急激に盛り上がっていた時期から、金達寿と鄭兄弟が雑誌の区切りと考えた40号までである。

高松塚古墳から装飾壁画などが発見されたことにより、日本中が時ならぬ古代史ブームに沸き返り、古代日朝関係史への関心が急激に高まった。金達寿が『日本のなかの朝鮮文化』創刊号の座談会で提起した「渡来人」の語〔上田・金達寿・司馬・村井1969.3:29〕が一般に使われるようになったのも、この時期からである。古代日本史における朝鮮半島と関係の重要性を再認識した点では歴史学者や考古学者も同様だったが、多様な研究が細分化されたまま行われ、相互に学問成果を参照したり議論してこなかったことへの反省が唱えられた。これを受けて高松塚古墳をめぐって国内の様々な学問分野の専門家が共同で討論会やシンポジウムを開催し、さらに72年10月1日から10日にかけて、北朝鮮・韓国・フランスの歴史学者や考古学者などが参加し、高松塚古墳の総合学術調査が行われた。このような状況の中、『日本のなかの朝鮮文化』にも古代日朝関係史に関する座談会や論考が数多く掲載されたが、第1期と異なるのは、朝鮮渡来の人々を抜きにして古代の日本史を語ることはできないという認識が執筆者の間に共有され、それを前提とした議論が展開されるようになったことである。

もちろん古代史に関する議論と平行して、焼物や民芸、朝鮮通信使など、近世の日朝関係に関す

るトピックスも扱われた。特に鄭詔文が24号(74年12月)に発表したエッセイ「沖縄の李朝の炎——私の古美術散歩」は、その後、「私の古美術散歩」というコーナーとして、29号(76年3月)より陶芸家の八木一夫が担当するようになり、35号(77年9月)まで連載された。八木が79年に死去したのちは、45～50号(80年3月～81年6月)まで鄭貴文がこのコーナーを引き継いだ。

しかしより重要なのは、朝鮮文化社が主催者となって、様々な企画を催すようになったことである。まず72年4月9日、「日本のなかの朝鮮文化遺跡めぐり」ツアーの第1回が実施された。これは金達寿と上田正昭を現地の講師として、日本のなかの朝鮮文化遺跡をめぐろうというツアーである。これが予想以上の好評を得たことから、その後も1年に2～3回の割合で開催され、30回(32回? ²⁾)続けられた(回によって李進熙なども講師に加わった)。うち14回は、現地レポートが『日本のなかの朝鮮文化』に出された。

『日本のなかの朝鮮文化』に掲載された座談会と論考は、それぞれ72年11月と73年2月に、中央公論社と新人物往来社から刊行された。その出版記念を兼ねて、司馬遼太郎・上田正昭・金達寿が発起人となり、73年2月24日、中央公論社ビル大ホールで「雑誌『日本のなかの朝鮮文化』を励ます会」が催された〔無署名1973.3:50-64〕。和歌森太郎・松本清張・竹内好・井上光貞・中野重治・旗田巍・岡本太郎・陳舜臣など、様々な分野の著名人や関係者など約180名が集まって鄭兄弟をねぎらい、単行本の刊行を祝した。司馬と上田は、挨拶の中で、現在の朝鮮ブームは1～2年もすれば終わるだろうと語った〔司馬1973.3:52, 上田1973.3:64〕が、むしろこれはこの雑誌の役割も終わるという意味ではない。一時期のブームに流されることなく、これからも従来の刊行姿勢を堅持して欲しいという激励が込められていると解釈すべきである。なお、この後も座談会は3冊、論文集は2冊、続編が両社から刊行され、座談会は中公文庫でも出された。

75年には4～9月にかけて、毎月第三土曜日の

夜、京都市上京区の社会福祉会館で文化講座「日本と朝鮮」が開講され、末川博・上田正昭・森浩一・金達寿・飯沼二郎・林屋辰三郎・司馬遼太郎が月代わりに講演を行った。この文化講座も好評を博し、76年5～10月に第二期が、77年5～10月に第三期が開講された（講師は一部を除いて非固定）。この講演のいくつかは、『日本のなかの朝鮮文化』に掲載された。

さらにこの時期から、『日本のなかの朝鮮文化』に、座談会の代わりにシンポジウムが掲載される号が出てきた。シンポジウムは地方の市教育委員会が主宰したものと、市教育委員会と朝鮮文化社や「東アジアの古代文化を考える会」（72年結成。代表・江上波夫）など在外の研究会在共催したものがあった。場合によっては、シンポジウムが開かれた翌日に、日本のなかの朝鮮文化遺跡巡りツアーが行われた。

この他、30号を記念して論文が募集され、2編が佳作に選ばれた（入選作なし）。

この時期には古代史ブーム・朝鮮ブームの追い風もあり、雑誌の方向性は完全に明確化し、動かし得ない歴史的事実とされてきた〈神宮皇后の三韓征伐〉や〈任那日本府〉経営、「帰化人」という用語などへの問い直しが積極的に展開されるようになり、〈皇国史観〉の根幹を大きく揺るがした。また上記の様々な企画から窺えるように、ブームが沈静化した後も、誌上で展開された批判を受け入れ、自分の問題として考える読者層は、着実に分厚くなっていった。鄭詔文が財政を一手に引き受ける同人雑誌であることに変わりなかったが、『日本のなかの朝鮮文化』の存在感は明らかに、商業誌や学術雑誌に勝るとも劣らないものとなっていた。

(2) - c 『日本のなかの朝鮮文化』第3期（1979-81年）

50号の「休刊について」[無署名 1981.6:106]の中で、「本誌はかねてから十年を画期とした四十号を目標とした」と述べられたように、『日本のなかの朝鮮文化』は40号（78年12月）をもって幕を

下ろす予定だった。しかし終刊を惜しむ多くの声に後押しされ、50号まで続けることになった。

雑誌の性格や方向性は、すでに第2期で確立されており、第3期は基本的にその方向性や誌面構成を踏襲する形となった。新しい企画としては、林屋辰三郎が40号の座談会で、「日朝の交渉史を十回やって欲しい。十講をもうけて、それは日本の時代区分にとらわれないで、むしろ朝鮮の方の時代区分を十分考慮した形で、「日朝関係史十講」というのをやって欲しい」[上田・金達寿・司馬・直木・林屋・森・李進熙 1978.12:50]と提案したことを受け、41～50号まで「講座 日本・朝鮮関係史」が設けられた。「素戔鳴尊と天日槍」に始まり、「日韓併合」以後で終わるというもので、日本の国造り神話から朝鮮の植民地時代までの幅広い時代にわたる、様々な日朝関係史の側面について誌上講座が開かれた。なお、第3期の誌面は、「講座 日本・朝鮮関係史」の6～10回を除くと、座談会や論考はほぼすべて古代史に関するものとなり、朝鮮の美術品や民芸品に関するものは「誌上・朝鮮美術館」と、鄭貴文が八木から引き継いだ先述の連載エッセイ「私の古美術散歩」のみとなった。そして81年6月、『日本のなかの朝鮮文化』は50号で「休刊」した。「休刊について」の末尾に、「なお、装いをあらたにした、第二次『日本のなかの朝鮮文化』を期しております」と記されたが、第二次が創刊されることはなかった。

4. 知的ネットワークの舞台としての『日本のなかの朝鮮文化』

先述のように、『日本のなかの朝鮮文化』の刊行目的として掲げられた文言は極めて控え目である。しかし彼らが当初から、朝鮮を独自の文化を持った人々が生を営んでいる歴史的空間とみなさず、中国と日本との間に横たわる地理的空間としてのみとらえる〈皇国史観〉を、正面から問い直す強い意志を持っていたことは疑いない。それと同時に彼らは、朝鮮民族の多種多様な文化や文物

を紹介していくことで、朝鮮の美術品や民芸品の価値を賞賛しながら、それらを生みだした朝鮮民族を蔑視している日本人の認識を変えるとともに、日本人からの蔑視を内面化して苦悩している在日朝鮮人が、自尊心を取り戻す助力となることをも目指した。

ただし、この二つの課題は完全に重なるわけではない。鄭貴文の、「自分の民族の文化というものを知らなすぎていた」という発言から導き出されるのは、いわば〈失われたものの回復〉というテーマである。この点では「日本のなかの朝鮮文化」という題名は、この雑誌が、朝鮮民族という民族観念を持った人々が日本各地に残した多種多様な文化遺跡や文物を提示するものであることを意味することになる。その意図は何よりも、「誌上・朝鮮美術館」に顕著に示されている。

これに対して、「日本にある朝鮮の文化的、歴史的遺跡などを明らかにすることによって、両国・両民族の自主と連帯とに寄与^{ママ}しようとする」という刊行目的に示される、〈皇国史観〉への根本的な問い直しは、日本列島と朝鮮半島には、歴史の最初から、果たして互いを異質な存在と考える〈民族〉観念を持った人々がいたのだろうか、という点から再検討しなければならないテーマである。金達寿が創刊号の座談会で、「誰でもふつう帰化人、帰化人といっておりますけれども、日本のばあい、これはいったどこからが帰化人で、どこまではそうではないのではないかとということなのです。ぼくはだいたい、大和政権が確立される以前のものはこれを渡来人といい、それら以後のものを、つまり、時代が飛鳥から奈良へ移る以後のものを帰化人といっているかと思いますが、これについてはみなさんどう思われますか」〔上田・金達寿・司馬・村井 1969.3:29〕と疑問を提起したり、「中でも国宝中の国宝と呼ばれねばならぬものの殆ど凡ては、実に朝鮮の民族によって作られたのではないか。〔中略〕それ等は日本の国宝と呼ばれるよりも、正當に言えば朝鮮の国宝とこそ呼ばれねばならぬ」と主張した柳宗悦に対し、柳は人種と民族を混同していると批判して、「柳氏のこれ

は、「実に朝鮮渡来の人々によって作られたものではないか」となるべきものだったのです。したがって、「それ等は日本の国宝と呼ばれる」ものとなっているのです」と述べた〔金達寿 1985:306〕背景には、このような認識があった。この意味で、この雑誌のもう一つのテーマは、渡来人を主人公とする、〈国家〉や〈民族〉によって隔てられる以前の日本列島と朝鮮半島との、重層的で錯綜した歴史空間を開示しようとするところにあった。

この二つのテーマのうち、執筆者にも読者にも理解しやすいのは、豊臣秀吉の朝鮮侵略時に連れてこられた陶工による焼物や、やはりその時に持ち帰られた金属活字、同じく秀吉の侵略時や植民地時代に略奪されたり、収集家などに売られた美術品・民芸品など、朝鮮民族の手による「日本のなかの朝鮮文化」であることは言うまでもない。『日本のなかの朝鮮文化』50号を通じて、これらに関する論考や座談会は、各号あたり1～2本程度に過ぎないが、そのいずれにも〈失われたものの回復〉というテーマが色濃く流れている。特に「誌上・朝鮮美術館」は、朝鮮の民族文化をよく知らない在日朝鮮人や日本人読者に朝鮮の〈美〉を視覚的に紹介するのみならず、その制作者がどのような人々であるかを考えてもらう上で、非常に重要な役割を果たしたと言える。

これに対して、〈国家〉や〈民族〉成立以前の、渡来人を主人公とする歴史空間を、実感を持って理解することは容易ではない。その大きな理由の一つは、まず国家や民族ありきで歴史を眺める〈皇国史観〉の発想にあるが、古代の日本列島にいた人々のうち、どこまでが渡来人でどこからが「日本人」なのかを一律に線引きすることが出来ず、渡来した時期や地域によって個別的に考えていかねばならないという、極めて複雑で曖昧なところにも要因がある。たとえば上田正昭は『帰化人』の中で、日本列島に人々が渡来した時期を大きく、①紀元前200年頃から3世紀頃、②5世紀前後、③5世紀後半から6世紀初め、④7世紀後半の四つに分けている〔上田 1965:23-26〕が、もちろんこれは特に目立った時期であり、朝鮮半島から人々

は、途切れることなく朝鮮半島と日本列島各地を行き来していた。また日本列島に中央集権的な国家体制が成立したからといって、直ちに渡来人全体に帰化制度が適用されたわけではない。渡来人に関する理解が日本社会に広く浸透した時期の話ではあるが、例えば森浩一は座談会「古代信濃と朝鮮をめぐる」の中で次のように述べている。

森 『日本後紀』——廣瀬注 七九九年の延暦十八年に、甲斐の百濟系の人たち百九十人がまず姓を改めることを願い、それに続いて信濃の人たちのことが出てくる。そうすると逆にこれを読んでいったら、七九九年までは日本列島の中で、卦婁とかまるで「魏志」の高句麗の条に出てくるような人名、あるいは「新唐書」の高句麗のところに出てくる人名、それも下っぱじゃないんですね。向うではトップクラスの支配階級ですね。七九九年と言えば、もう奈良の都は終わっているわけです（笑い）。

金 高句麗も、朝鮮ではとっくに滅びちゃっている（笑い）。

森 だからいままでのように簡単に、推古であるとか、天智の頃に「帰化人」が来て全部帰化し終わったというようなことではないわけです。来ているけれども、少し強く言えば高句麗人として七九九年まではここにいてという理解も出来るわけです。[飯島・桐原・金達寿・森 1978.9:36]

高句麗の滅亡は668年だが、信濃にはそれから100年以上もの間、高句麗のトップクラスの支配階級が、日本国家の中で帰化せず、高句麗の官職名や姓を名乗って暮らしていたという。森は同じ座談会の中で、この文献を読んで恐ろしくなると述べているが、金達寿や鄭兄弟にとってこのような文献は、日本国家が成立した後もかなり長いあいだ、日本列島には渡来人を主人公とする地域空間があったことを示すものなのである。

『日本のなかの朝鮮文化』は、この二つのテーマ

に関わる論考や座談会を掲載し、様々な企画を立てた。その中で特筆すべきことの一つは、郷土史家や歴史愛好家など分野で独自に活動している人々の論考を掲載したり、座談会に招いたことである。もちろん彼らの主張や研究の質は玉石混濁である。しかしそれまで、地域の研究会や役所内の郷土史編纂の担当部門など、非常に限られた範囲にしか知られておらず、専門家のみならず歴史に興味がある他の地域の人々から注目されるなど考えられなかったような分野の人々を、表舞台に上げた功績は極めて大きい。これにより、〈中央〉の専門家を通じて間接的にしか知ることの難しかった各地域に固有の歴史空間の姿を、各地域の郷土史家や歴史愛好家から直接的に窺うことが可能になったからである。

また専門の研究者や著名な知識人が、彼らから見ればアマチュアの文章を掲載する同人誌だからといって、手を抜くことなく質の高い論文を書き、彼らと同じ土俵に立つことを厭わなかった点も特筆すべきである。『日本のなかの朝鮮文化』が古代史という極めて専門性の高い学問分野の雑誌だったことを考えると、この点はずっと注目されてよい。看板コーナーの一つである座談会は毎回テーマが設けられ、上田正昭や森浩一など古代史学者や考古学者の堅実な発言と、金達寿や司馬遼太郎などの作家や知識人が空想力を働かせた発言による自由闊達なやりとりが、読者の知的好奇心を大いに刺激した。座談会のテーマが対馬・能登・出雲など、特定の地域の「日本のなかの朝鮮文化」の場合は、出席者が現地に行き、現地の郷土史家・博物館主任・郷土資料館館長などを交えて座談会を行った。

こうした様々な壁を超える実践活動の代表が、72年4月から10年近く続いた、「日本のなかの朝鮮文化遺跡めぐりツアー」である。先述したように、これは金達寿と上田正昭を現地の講師として日本各地の文化遺跡を巡るという企画だが、在日朝鮮人の作家と日本人の歴史学者という講師の組み合わせ自体、このツアーが、「日本のなかの朝鮮文化」は日本にある朝鮮の文化的、歴史的遺跡などを明ら

かにすることによって、両国・両民族の自主と連帯とに寄与^{〔ママ〕}しようとするものであります」という雑誌の刊行目的を象徴する実践活動であることを示している。第1回のツアーでは、高松塚古墳から装飾壁画が発見された直後だったこともあり、500名以上もの事前申し込みがあった〔水野1972.6:58〕。その後、古代史ブームの落ち着きとともに参加者は少なくなったと思われるが、現地レポートの中には参加人数が書かれていないものも多い。このため各回の参加人数の概要は不明だが、多い時で200名（第1回の定員は当初100名だったが、参加希望者が多すぎたため200名に増やした。以降のツアーでもこの定員数を踏襲したのではないかと推測）、少ない時は50名ほどということもあった。ツアーの参加者における日本人と在日朝鮮人との比率は、残念ながら不明である。またツアーの前日に講演会が催される場合もあった。この講演会も、やはり聴講者数は不明だが、唯一、出雲の古代文化遺跡を巡ったツアー（第15回。77年4月24日）の前日に島根県民ホールで開かれた講演会には、600名近くの聴講者が集まったことが記録されている〔藤野1977.6:64〕。翌日のツアーの参加者は150名ほどなので、これを参考にすると、他の場合も、総じてツアー参加者より講演会の聴講者の方が多かったのではないかと推測される。

また雑誌上で広告したシンポジウムも盛況を見せ、例えば76年10月、豊岡市民会館で行われた公開シンポジウム「但馬の古代文化——天日槍をめぐって」には1000名もの聴講者が集まった。地元の関係者によれば、地味な講演会にこれほど集まったことは、「これまでになく画期的な成果」だったという〔鄭貴文1976.12:53〕。

5. 終わりに

金達寿の古代史研究が、金達寿という個人を媒介として、専門家とアマチュア、日本人と朝鮮人の壁を乗り越える知的ネットワークを構築したの

に対して、『日本のなかの朝鮮文化』は、以上のように、特定の個人や団体に偏らない、重層的で多元的な人々を結びつける舞台を提供した。そしてこの舞台を通じて、日本人と在日朝鮮人の両方を、〈皇国史観〉の呪縛から解放し、古代と近世における日朝関係を通して、新たな日本列島と朝鮮半島との関係史を眺められる視点があり得ることを提示した。この点において、『日本のなかの朝鮮文化』が果たした役割や功績は、他に比べるものがないほど大きい。

しかし『日本のなかの朝鮮文化』休刊と同時に、金達寿と鄭詔文との関係は終わりを迎えた。81年3月、在日朝鮮人「政治・思想犯」の助命や減刑を請願するという目的で、金達寿が姜在彦・李進熙・徐彩源とともに全斗煥政権下の韓国を訪問したからだ。さらに82年11月には鄭貴文が祖母と母の遺骨を移す目的で、個人的に、故郷である韓国・慶尚北道醴泉郡憂忘里を訪問した〔鄭貴文1983〕。彼らのはのち「韓国」籍を取得した（徐彩源は81年以前に取得済み）。鄭詔文はただ一人、〈朝鮮〉籍のまま、朝鮮半島の地を踏むことなく日本で活動を続け、88年10月、京都の自宅を改築して高麗美術館を開設したが、翌年2月に死去した。金達寿・李進熙と鄭詔文が生前に会うことは二度と無かった。そして今日まで、81年以後の金達寿と鄭詔文の評価は対照的である。

金達寿たちの訪韓が投げかけたものについては、拙著で詳しく検討した〔廣瀬2016:第3章2節,第4章3節〕ので触れない。ただここでは、金達寿が訪韓後、「日本にある朝鮮の文化的、歴史的遺跡などを明らかにすることによって、両国・両民族の自主と連帯とに寄与^{〔ママ〕}しようとする」ための活動を、韓国社会に向けても行うようになったことを指摘しておきたい。

たとえば、金達寿は82年2月4日の『読売新聞』に、韓国の世論調査で「嫌いな国」第二位に日本が上がったことを紹介した上で、「両者が「嫌い」合っていることのうちには、そのような歴史教育があるのではないかと思うのであるが、しかしもしかすると、これは私の一面的な見方によるもの

かもしれない。そこで私は一つ提案をするが、両者がどうしてそのように嫌い合っているかということについて、このさい「デスク討論」だけではなしに、日本、韓国（朝鮮）それぞれの代表者が集まって、そのことを究明する討論会を開いてみたらどうであろうか」[金達寿 1982.2.4:7]と投げかけた。これを受けて同年5月15日、読売新聞社の主宰で、韓国から作家の鮮于輝と歴史学者の高柄翊を招き、金達寿・森浩一・司馬遼太郎の3名と座談会を行った。内容は『読売新聞』に掲載され、のち読売新聞社から『日韓理解への道』の題名で刊行された。また金達寿は82年10月から『週刊京郷』に「京都の開拓者は高句麗人〔京都의 개척자는 고구려인〕」（第2回以降、「京都（日本の古都）の開拓者は韓国人〔京都（일본의 옛서울）개척자는 한국인〕」）と改題。少なくとも14回連載。連載終了時期は不明）、85年10月から86年2月にかけて『朝鮮日報』に「日本に生きている韓国〔日本에 살아있는 한국〕」（全43回）を連載、また86年10月には『日本の中の韓国文化〔일본속의 한국文化〕』を朝鮮日報社から出版するなど、韓国の雑誌や新聞、著書を通じて、「日本の中の朝鮮文化」の重要性を韓国社会に伝える役割を担った。このため韓国では今日まで、学術研究としての評価は別としても、金達寿は「日本の中の朝鮮文化」研究の先駆者と位置づけられている[兪弘濬 2015:8等]。

鄭詔文の追悼文の中で、金時鐘 [1989.6:159] は「同床異夢というよりは、祖国に対するお二人のユメの見方の違いだったようにも、今さらながら思う」と記している。確かに81年以降の活動から振り返れば、金達寿と鄭詔文の係に「同床異夢」だった部分があったかもしれない。しかし訪韓後の金達寿が、積極的に韓国社会に「日本のなかの朝鮮文化」を紹介していったことを考えると、果たして二人の見ていた「ユメ」は異なっていたのだろうか、その「ユメ」の価値に差異はあるのだろうか、といった疑問を抱かずにはいられない。当時を知る日本人や在日朝鮮人の間で、81年の訪韓が、一種のスティグマとして金達寿の活動に貼り

つけられている現在、この問いに答えることは容易ではない。だが、金達寿と鄭詔文との、複雑に絡みあった係を丁寧に解きほぐしていくことで、何らかの道筋が見えてくるのではないか。この点からも、『日本のなかの朝鮮文化』が果たした役割と歴史的意義、そしてその中で交わされた金達寿と鄭詔文との知的な交流係を、あらためて問い直す必要があるだろう。

注

- 1) 座談会是非公開、シンポジウムは公開で行われた。
- 2) 上田正昭 [上田・姜在彦・鶴見・辛基秀 2002:111] によれば、このツアーは32回開かれたという。しかし管見の限り、確認できる最後のツアーは81年5月17日に開催された第30回のも（『日本のなかの朝鮮文化』1981年3月、朝鮮文化社、p.66の広告。神奈川近代文学館「金達寿文庫」に、当日配布されたと思われるレジユメが残されているので、実際に開催されたと考えられる）であり、31、32回目の開催事実については不明である。

参照文献

日本語文献

- 飯島一彦・桐原健・金達寿・森浩一（1978.9）「座談会 古代信濃と朝鮮をめぐって」『日本のなかの朝鮮文化』朝鮮文化社。
- 上田正昭（1965）『帰化人——古代国家の成立をめぐって』中公新書。
- 上田正昭・金達寿・司馬遼太郎・村井康彦（1969.3）「日本のなかの朝鮮（座談会）」『日本のなかの朝鮮文化』日本のなかの朝鮮文化社。
- 上田正昭・金達寿・司馬遼太郎・湯川秀樹（1970.3）「座談会 神宮と神社について」『日本のなかの朝鮮文化』日本のなかの朝鮮文化社。
- 上田正昭（1973.3）「無題」『日本のなかの朝鮮文化』朝鮮文化社。
- 上田正昭・金達寿・司馬遼太郎・直木孝次郎・林家辰三郎・森浩一・李進熙（1978.12）「座談会 「日本のなかの朝鮮文化」の十年」『日本のなかの朝鮮文化』朝鮮文化社。
- 上田正昭・姜在彦・鶴見俊輔・辛基秀（2002）「シンポジウム「金達寿さんを偲んで——その半生と文学・歴史観を語る」」（辛基秀編『金達寿ルネサンス——文学・歴史・民族』解放出版社）。
- 門脇禎二（1971.12）「蘇我氏の出自について——百済の木苧満致と蘇我満智」『日本のなかの朝鮮文化』日本のなかの朝鮮文化社。
- 金時鐘（1989.6）「白磁の骨壺——望郷の蒐集家・鄭詔

文氏を送る』『季刊在日文芸民壽』民壽社。
 金達寿（1983）『日本の中の朝鮮文化2』講談社文庫。
 単行本の刊行は1972年。
 ——（1985）「古代日本史と朝鮮」『日本古代史と朝鮮』
 講談社学術文庫。
 ——（1998）『わが文学と生活』青丘文化社。
 ——（1982.2.4）「なぜお互いに嫌い、嫌われるのか——
 ／＼日韓討論会、開いてみては？」『読売新聞』夕
 刊読売新聞社。
 司馬遼太郎（1973.3）「無題」『日本のなかの朝鮮文化』
 朝鮮文化社。
 竹内好（1973.3）「無題」『日本のなかの朝鮮文化』朝
 鮮文化社。
 鄭貴文（1969.3）「編集後記」（『日本のなかの朝鮮文化』
 日本の中の朝鮮文化社）
 ——（1970.11）「新しい「名刺」の一つとして——「日
 本の中の朝鮮文化」のこと」『文学』岩波書店。
 ——（1976.3）「『日本のなかの朝鮮文化』余録」『思想
 の化学』思想の科学社。
 ——（1973.12）「天日槍の道・但馬——第十四回 日
 本の中の朝鮮文化遺跡めぐり」（『日本のなかの
 朝鮮文化』朝鮮文化社）
 ——（1987）「日本のなかの朝鮮文化」『日本のなかの
 朝鮮民芸美』朝鮮文化社。
 ——（1983）『わがナグネ（羈旅）』創生社。
 廣瀬陽一（2016）『金達寿とその時代——文学・古代
 史・国家』クレイン。
 備仲臣道（1993）『蘇る朝鮮文化——高麗美術館と鄭詔
 文の人生』明石書店。
 藤野雅之（1977.6）「古代出雲と朝鮮文化 第15回日

本の中の朝鮮文化遺跡めぐり」『日本のなかの朝
 鮮文化』朝鮮文化社。
 松本良子（1987.5）「『日本のなかの朝鮮文化』の十三
 年」『季刊三千里』三千里社。
 水野明善（1972.6）「河内飛鳥めぐりの記——日本のな
 かの朝鮮文化遺跡めぐり」『日本のなかの朝鮮文
 化』朝鮮文化社。
 兪弘濬（橋本繁訳、2015）『日本の中の朝鮮をゆく 九
 州篇——光は朝鮮半島から』岩波書店。
 李進熙（2000）『海峡——ある在日史学者の半生』青丘
 文化社。
 無署名（1969.6）「『朝鮮文化』について」『日本の
 なかの朝鮮文化』日本の中の朝鮮文化社。
 ——（1969.12）「編集後記」『日本のなかの朝鮮文化』
 日本の中の朝鮮文化社。
 ——（1973.3）「『日本のなかの朝鮮文化』を励ます会
 より」『日本のなかの朝鮮文化』朝鮮文化社。
 ——（1980.6）「本誌取扱書店の紹介」『日本のなかの
 朝鮮文化』朝鮮文化社。
 ——（1981.6）「休刊について」『日本のなかの朝鮮文
 化』朝鮮文化社。

韓国語文献

鄭詔文・鄭喜斗編（崔宣一・李須恵・金姫敬・孫銀美・
 姜米貞編訳、2013）『정조문과 고려미술관——재
 일동포의 삶과 조국애』도서출판다연。

映画

黄哲民（監督、2015／韓国）『정조문의 향아리』（邦題
 『鄭詔文の白い壺』）

特集

植民地郷愁を撃て*

——小林勝『『懐しい』と言ってはならぬ』と『日本人中学校』——



原佑介 (立命館大学衣笠総合研究機構
専門研究員)

キーワード: 小林勝, 引揚者, 戦後文学, 朝鮮, 植民地主義

Key words : KOBAYASHI Masaru, repatriate, postwar literature, Korea, colonialism

かれの愛はかれの権力とぴったり一体になっていた。それは支配する者がみずからの権力を保持しつづけながら、その範囲のなかで支配される者にそそぐ愛だった¹⁾。

1. はじめに——「私の小さな歴史のはじまり」

植民地朝鮮で生まれ育った小林勝が生前最後に発表したのは、「『懐しい』と言ってはならぬ」(1971) というタイトルの短いエッセイであった。このタイトルは、かれの文学の集約的メッセージと受け取れることもできるが、植民地をなつかしく思う気持ちとどう向き合うかは、多くのいわゆる引揚者の戦後文学に共通するテーマでもあった。関東州で生まれ育った藤森節子の回想記『少女たちの植民地』の巻末解説のなかで、林淑美は、植民者二世たちの引揚げ後の人生についてこう述べる。「植民地生れの郷愁というのは、植民地後のながい時間、文化的にも情情的にも祖国との軋みを感じながら、ふる里への郷愁にさえ罪の意識を感じながら、ふる里への限らない懐かしさに歯をく

いしばって生きることなのだ²⁾。」この言葉に導かれて藤森の回想記を読んでみると、そのなかに小林勝の名前が出てくる。

他国の人々の、まさに血と脂汗の上に築かれた生活は、個々の人間が中国人にどう対したかを問う以前に、存在そのものが罪であることに気づくのは後になってからだ。それを思うと心が震えだすのだが、もう取り返しはつかない。

そのうえでそれでもなお、私がある地で育ったことは事実であり、私の小さな歴史のはじまりは、そこにしかないのだ。朝鮮で育った作家小林勝は「懐かしい」ということを自らに徹底的に禁じることで、我が身を切り刻んだのだったが、それはあまりにも痛ましいやり方だった³⁾。

日本の敗戦当時、帝国日本の植民地や勢力圏、各地の戦域には、当時の「内地人」人口の1割に迫る700万人近くの日本人がいた。そのうちの約半数が民間人だったが、そこには植民地で生まれた(育った)子供たちが多数含まれていた。それぞれの「小さな歴史のはじまり」が植民地にあった日本人たちである。藤森の述懐にあらわれているとおり、戦後日本でそのことに苦悩した者は少なかつた。小林勝はそのうちの一人であり、文学活動のほとんど全精力を、日本による朝鮮植民地支配を批判することに注いだ稀有な日本文学研究者

であった。

まず、小林勝の生涯を簡単に紹介しておきたい。1927年に朝鮮半島の南端に近い晋州で生まれた小林勝は、同じ慶尚道の安東や大邱で育った。長野県出身の父親は農林学校の教師であった。中学校を4年で早期修了した後、1944年春からは、埼玉県の陸軍予科士官学校、陸軍航空士官学校で訓練生活を送ったが、特攻隊員になる前に日本の敗戦を迎えた。

1948年、日本共産党に入党。翌年に早稲田大学に転入学するも、50年のレッドパージ反対運動で退学処分を受ける。1952年6月25日、党の「武装闘争」方針にしたがった小林勝は、新宿の朝鮮戦争反対デモで火焰壇を投げ、現行犯逮捕された。警視庁の留置場でかれは、自分を「同務」と呼ぶ朝鮮人共産主義者たちが戦争中の大韓民国に強制送還されていく場に立ち会い、大きな衝撃を受ける。このとき感じた「ふるえだすような憤怒」は、かれの文学の原点であり、その後死に至るまでかれに朝鮮のことを書かせつづける原動力となったという。

1953年1月の保釈後、本格的に文学活動を開始するが、59年7月、朝鮮戦争時の「火焰壇事件」の有罪判決が確定し、半年間獄中生活を送る。64年、肺結核を発症（遺族によれば、ツベルクリン反応検査ではじめて陽性の結果が出たのは、かれが「火焰壇事件」のために獄中にあった52年冬のことであった）。右肺の大部分を切除し、長い闘病生活を余儀なくされる。復帰後、「日本および日本人にとって、朝鮮および朝鮮人とは何か」を問う作品群を、命を削るようにして書いていくが、残された時間は短く、1971年に43歳で病死した。

小林勝の文学の重要性に対しては、日本人よりも在日朝鮮人のほうが鋭敏だったように思われる。かれが死んだとき、多くの在日朝鮮人が深い喪失感と哀悼の意を表明した。小説家の李恢成は、「何よりも心をうたれたのは、朝鮮ないしは朝鮮人にたいするその真摯にして誠実な追求である。日本人としての主体に立って、文学的にとかく不問に付されがちな、精々題材的にあつかわれがちな

朝鮮・朝鮮人を真向うから正眼に構えてひたむきに追究しているその姿である」と述べ⁴⁾、小林勝の死後にかれの最後の小説集（『朝鮮・明治五十二年』1971）を世に送り出した新興出版社の朴元俊は、「もちろん朝鮮および朝鮮人をテーマにして作品を書いている作家がほかにないわけではない。だが、真実生涯をかけて、ひと筋に朝鮮および朝鮮人をテーマにして、情熱を傾け、その情熱を死に至るまでともしつづけた作家はほかにいない」と明言した⁵⁾。晩年の小林勝を知る愛沢革は、「これらの在日朝鮮人の小林勝への哀悼——というよりはあたかも同志の一人を失ったかのような痛恨の言葉を見ると、この作家の苦しみや楽しみ・悲喜劇を最も深いところで理解し吸収していた読者は彼らではなかったか、と私は今考え始めている」との感想を漏らしている⁶⁾。

小林勝のなにかが、その「苦しみや楽しみ・悲喜劇」を在日朝鮮人たちと共有させえたのか。この問いから出発し、本稿では、小林勝のなかで朝鮮に対する郷愁と戦後的な罪悪感がどのようにせめぎ合っていたかに焦点をあてることを通じて、かれの文学が目指していた地平がどのようなものだったのかを考えたい。おもなテキストとしては、エッセイ「「懐しい」と言ってはならぬ」と、そのなかで反省的に解説されている短編小説「日本人中学校」（1957）を取り上げる。

2. 「べったり」と「断絶」

渡邊一民によれば、小林勝の晩年にあたる1970年ごろは、「日本で育ち日本の植民地政策ゆえに母語を奪われた在日朝鮮人作家の作品が一斉に開花したばかりか、敗戦で引揚げてきた植民地二世の作家がほとんど同時に作品を書きだした、近代日本の文学史上画期的な意味をもつ時代であった⁷⁾。」この時期、金鶴泳が1966年に文藝賞（「凍える口」）、李恢成が69年に群像新人文賞（「またふたたびの道」）を受賞するなど、新しい世代の在日朝鮮人文学者が次々と頭角をあらわす。崔真

碩は、72年に李恢成「砧をうつ女」と東峰夫「オキナワの少年」が芥川賞を同時に受賞したことを踏まえ、「元来、日本文壇の在り方は日本ナショナリズムの動きと連動していて、植民地帝国時代から一貫してそうですが、日本文壇はスランプに陥ったり、日本ナショナリズムが再編される時、植民地文学を発見します」と指摘する⁸⁾。東峰夫に先んじて大城立裕が沖縄出身者ではじめて芥川賞を受賞したのは、1967年のことであった（「カクテル・パーティー」）。同じ時期に、大連生まれの清岡卓行（「アカシアの大連」1969）、同じく大連で幼少期をすごした三木卓（「鶉」1972）、朝鮮で少年期をすごした日野啓三（「あの夕陽」1974）といった引揚者作家が、相次いで芥川賞を受賞している⁹⁾。闘病生活から復帰した小林勝が最後の光芒を放ったのは、このような「植民地文学」の「発見」の時代でもあった。この時期かれは、植民者二世の朝鮮に対するコンプレックスを描いた「蹄の割れたもの」（1969）や、3・1独立運動を活写した「万歳・明治五十二年」（1969）など、重要な作品を書き残している。1970年前後は、ポストコロニアル日本語文学とでも呼ぶべき一群の文学作品が続出した特別な競演の時代であった。

戦後日本の文学史を振り返ってみてわかるのは、小林勝のような日本人引揚者にしろ在日朝鮮人にしろ、日本の植民地主義の問題を主題化した日本語文学のおもな担い手は二世世代だった、ということである。在日朝鮮人では、解放後第一世代である金達寿（1919～1997）や許南麒（1918～1988）よりも下の世代に属する金石範（1925～）や金時鐘（1929～）、高史明（1932～）、李恢成（1935～）らが、1970年前後に登場してくる。一方、かれらと同世代の植民地朝鮮生まれの日本人には、小林勝のほか、村松武司（1924～1993）や森崎和江（1927～）、梶山季之（1930～1975）、後藤明生（1932～1999）、五木寛之（1932～、生後まもなく朝鮮に移住）らがいる。戦後日本文学がなによりもまず戦争や敗戦後の状況を主題とする文学として出発したのに対し、つづく世代の文学者のなかには、植民地での生活を主題とする者も多数いた。

ポストコロニアル日本語文学の中核を成したのは、戦争や植民地支配、あるいはそれに抵抗する民族解放闘争や独立運動に本格的に関わる前に1945年8月を迎えることになった、「遅れてきた青年」（大江健三郎）たちだったといえる。

さて、この時期の日本人引揚者や在日朝鮮人の文学作品をみると、植民地支配の歴史に関する記憶や考え方が、ぶつかり合ったりきしみ合ったり、ときには響き合ったりしていたことを示す痕跡が、さまざまな形で残っていることが浮かび上がってくる。たとえば金石範は、一人称小説「虚無譚」（1969）のなかで、戦後日本に暮らす在日朝鮮人と旧在朝日本人の対話を通して、「故郷」朝鮮をめぐるかれらの認識のすれちがいを浮き彫りにしている。

少年期を植民地朝鮮ですごした日本人ジャーナリストのFは、思いやみがたく、朝鮮の言葉や文化に好んで触れる「心情派」であった。しかし、語り手の在日朝鮮人にはむしろ、失われた「故郷」に思いを寄せるFの「そのべったりがひっかかる」。

Fの説明はこうである。「だいいちぼくは故郷がないでしょう。分りますかね、日本なんてぼくの故郷じゃないんだ。もちろん国ではあるけれどね。いまのぼくの中に住んでいる青少年時代の、そのFの手足をのばしてやるところが日本にはない。ぼくが小学や中学の時分をすごした坂道や赤土の切通しのあるソウルが故郷でないとしたら、ぼくはどうすればいいだろう。それが否定されるとなると、ぼくは過去を持たない人間同様ってことになりますよ」。これに対して口をついて出そうになったつぎのような嫌味を、語り手は思いとどまってのみこむ——「しかし、朝鮮はFやコロンの息子の過去のためにあるわけじゃない」。

そのかわりにかれは、「分るなあ、それはだれも否定なんかできはしない。それが昔の支配者たちの懐古趣味でもないかぎりはね」と痛烈な皮肉を忍ばせながらも、ひとまず穏当にこう答えておく。「しかしそうなれば、私の場合なんかはどうなるんだろう。Fさんとは対照的だ。Fさんに過去がないとすれば、日本で育った私や、在日朝鮮人にもそ

の意味では過去がないということになる。というのは、Fさんは朝鮮に故郷があると感じ、私は日本に故郷があると感じられないから——。私は私の中にいっぱいであるはずの日本にべったりできない。Fさんは朝鮮を愛するといい、朝鮮はわが魂と呼び、私は日本を愛すると確信をもっていえないこの屈折した心情はどう説明すればよいものか……」〔ルビママ〕

旧在朝日本人は朝鮮が故郷だと感じるのに対して、在日朝鮮人は「日本にべったりできない」——戦後日本に持ち越されたこの重大な非対称を、在日朝鮮人の前でFは重く受け止めるべきであった。「それじゃお互いのコミュニケーションはどうなります？ そこには断絶の意識しかないんじゃないですか」と反論するFに向かって、我が意を得たりとばかりに語り手は即答する。「そう、コミュニケーションは後から生れますよ。その断絶をお互いにもっと意識せよということなんだな。もっと断絶せよと、いや、断絶しようと私はいいたい¹⁰⁾」。

語り手は、「故郷」朝鮮に心情の次元で「べったり」くつつこうとする植民者二世に向かって、「コミュニケーション」なんかいらぬ、むしろ「断絶しよう」とやんわりと提案する。しかし、この無難な物言いの底では、「かつて朝鮮は日本のものだった」という観念を当然視する戦後日本人たちに対する激しい憤りが煮えたぎっていた。主人公の在日朝鮮人にとって、Fのノスタルジアと「国際法上は当時の朝鮮は日本だった」といった帝国主義礼讃史観は大差ないものであった。

ところで、日本人と朝鮮人のあいだに深々と横たわる「断絶」こそが、小林勝の文学の最大のテーマだったといえる。かれの文学活動は、Fと同じ「コロンの息子」、そして自分たちがかつて朝鮮の所有者だったという観念を手放そうとしない戦後日本人の側から、この「断絶」をみつめようとするものであった。小林勝もFも、生まれ育った朝鮮を戦後も愛しつづけた点では同じだが、この「断絶」に対する感覚が決定的に異なっていたと思われる。ここで参考にしたいのが、小林勝の文学の

特質をまとめた磯貝治良のつぎのような指摘である。

一つは、植民地下にあって民族をうばわれた朝鮮人がそれをうばいかえし、朝鮮人に帰るということが、日本人を拒否することと同時に、同意味であったということです。二つには、朝鮮人と日本人のあいだによこたわる深淵が拒否と被拒否という対極の関係で成りたつほかないものであった事実をあぶりだしていることです。そして三つ目には、拒否されることで日本人の^{〔かお〕}貌が照射されてくるということだとおもいます。〔……〕小林勝の文学が朝鮮体験と執拗にからみつづけたのは、朝鮮人によって拒否されるというかたちで見られている存在としての日本人——その日本人とは何であるのかを考えることだったろうとおもいます¹¹⁾。〔ルビ原文〕

失われた「故郷」をなつかしむ自分語り——自己陶醉、あるいはある種の自己憐憫にさえ近い感情にふけるFには、そのかれをみつめ、きっぱりと「拒否」している朝鮮人の姿はまるでみえていなかった。Fの話を書く朝鮮人が苛立ったのはそのためであろう。

これに関連することだが、満洲で少年期をすごした安部公房（1924～1993）は、「故郷に準ずる町」だという奉天（現在の中国瀋陽市）について、こんなことを述べている。「支配民族の特徴はたとえばいま日本にいるアメリカ人であるが、その土地の人間を人間としてよりも、植物や風景のように見るということだ。つまり土地の人間は風物の一部なのである。よほどながく暮しても、この事情はなかなか変わらない。これは相手を見失うばかりでなく、同時に自分をも見失っているのだが、その点にはめったに気づこうとしないのだから、やっかいだ。植民地を故郷だということは絶対できない¹²⁾」。

朝鮮に「べったり」くつつこうとしていた金石範の小説中のFは、目の前の朝鮮人を見失うこと

によって、「同時に自分をも見失っている」状態にあった。これに対して、「『懐しい』と言ってはならぬ」という言明に結実していく小林勝の文学活動は、磯貝のいう「朝鮮人によって拒否されるというかたちで見られている存在としての日本人」——朝鮮人を見失うことで「同時に自分をも見失っている」状態にある日本人を内在的に問題化しようとするところみだったといえる。

3. 植民者の息子たちの闇

右肺をほぼ全部切除した上、血清肝炎と重度のアルコール中毒にもかかっていた小林勝に残された時間は短く、かれは1971年3月に、最後は腸閉塞で死亡する。前述のとおり、エッセイ「『懐しい』と言ってはならぬ」は、かれの生前最後の刊行物となった。そのなかで小林勝は、自分がなぜ朝鮮への郷愁を拒否しなければならないのか、その理由の一端を、自身の短編小説「日本人中学校」を解説しながら明かしている。かれは、「つい最近、自分の書いたこの小説そのものが、言いようのない衝撃をもって私の心を撃つこととなるある出来事」について語る¹³⁾。

エッセイの冒頭で小林勝は、自分の小説は作者の植民地朝鮮での実体験に直接的に即して書かれていると考える読者がいるが、それは誤解であり、ほとんどの登場人物や設定は想像力の産物である、と断った上で、若干の例外として、小説「日本人中学校」を挙げる。この作品は、実体験と見聞を直接の素材にして書いたものだというのである。題名の「日本人中学校」とは、小林勝が通っていた大邱中学校のことである¹⁴⁾。かれが在籍していたころの生徒数はおよそ600人、うち朝鮮人は20人ほどであったという¹⁵⁾。

慶尚北道の中心都市大邱は、「京城」と釜山をつなぐ京釜鉄道の中継地点に位置する交通の要衝であった。歩兵第80連隊が駐屯する軍事都市でもあり、大邱中学校にも軍人の子弟が多数通っていた。4月18日は連隊の「軍旗拝受記念日」に定められ、

毎年「軍旗祭」が催されていた。大邱生まれの森崎和江はこう振り返る。「軍旗祭は天皇陛下から賜った軍旗を祝して行う聯隊の祭りで、一般人もこの日聯隊の中に入ることができた。聯隊は一種の聖域だった。日本人の男が成人となった日、徴兵検査で選ばれて兵士となって、はじめて門をくぐることができる。当時の感情ではこの門をくぐるのは晴れがましい成人の儀式だった。特権であった¹⁶⁾。」

大邱中学校の敷地は、連隊駐屯地と鉄条網を隔てて隣接しており、1921年の学校創立当初から、軍事教練や野外演習の際に指導、支援を受けるなど、連隊の強い影響下にあった。日本の敗戦後、連隊駐屯地跡には米軍が駐留し、同区画内にあった中学校も朝鮮戦争時に米軍に接収された。朝鮮戦争勃発直後の1950年7月には、当時日本占領を担当していた米軍第8軍の司令部が、横浜税関庁舎から大邱中学校に一時的に移った。小林勝が通った大邱中学校と陸軍航空士官学校（日本の敗戦後米軍に接収され、ジョンソン基地と改名）は、ともに朝鮮戦争時の米軍の重要拠点として利用されたことになる。

大邱中学校は、学校軍事教練では朝鮮全土の中学校中随一との定評があり、軍事主義の気風が非常に強かった¹⁷⁾。小林勝は、ある小説のなかで、当時の校内の様子をこう描写する。「慶尚北道にただ一つある日本人中学は、粗暴な校風で、腕力が生徒間のモラルであった。上級生の下級生に対する暴力沙汰を学校は黙認していた。それは同じクラスの中でも同様であった。学問の出来のよい者でも腕力に自信のない者はびくびくして過し、獷猛で薄よごれた者たちがやくざまがいの猫背でのしあるいた¹⁸⁾。」また、小林勝の2学年下で、大邱中学校の寄宿舎に起居したことのある小説家の日野啓三は、そこでの生活を「軍隊の兵営生活の滑稽な縮小版」と表現し、「二週間毎の土曜の夜中には、消灯後、舎監室から最も遠い二階の隅の部屋に下級生全員が集められ、明りを消した暗やみの中で、勝手な理由をつけて下級生のほぼ全員が殴打される」などと当時を振り返っている¹⁹⁾。

軍との密接な関係は、日本人社会の戦争熱が高まるにつれていっそう強まっていき、軍関係の学校に進むことが盛んに奨励されるようになった。1940年入学の小林勝は第21期生（45年3月卒業）にあたるが、この代は入学者数に対する卒業生数の比率が歴代でもっとも低く、正規5年課程を修了した者は4割に満たなかった。戦争末期、多くの生徒が早期修了で軍関係の学校に進んでいったが、小林勝もその一人であった。小説「日本人中学校」の舞台は、以上のような背景をもつ大邱中学校である。

物語は、冷たい雨の降る5月のある日、若い英語教師が赴任してくるところからはじまる。講堂でかれをはじめてみた3年生の五郎の目に、容姿端麗で服の着こなしもよく、青年らしい生気に満ちたその男は、国民服に坊主頭で一様に疲れた顔つきをしているほかの教師たちのあいだで際立ってさわやかに映る。

「ぼくは、この春、東京高等師範学校を卒業した梅原健太です……」と、新任教師が苗字を発音したときの東京訛りの巻き舌に、朝鮮生まれの五郎は敏感に反応し、東京へのあこがれをかき立てられる。英語が堪能で講義も上手にこなす梅原健太は、まもなく生徒たちの人気を集めるようになる。東京での自由で新鮮な学生時代の話が、植民地の日本人生徒たちを虜にする。きびしくはあったが、ほかの教師たちとちがってけっして生徒を殴らなかった。また、バレーボールが得意な梅原健太は、いったん外に出るとたちまち兄のようになり、生徒たちとともにボールを追いかけて汗を流した。そのように澁刺と新生活をはじめた梅原健太だったが、いつしかある疑惑が生徒たちのあいだに流れるようになる。

——梅原先生な……朝鮮人だっていうど……

その言葉を聞いた時、五郎は、冷たい鉛の拳が彼の柔らかな心臓を叩いたのを感じた。彼は呆然とし、それから辛うじて相手に言った。

——誰が言ったの、そんなひどいこと……
(ひどいこと、五郎にとっては、真実そうだった) ²⁰⁾

それ以降、日本人生徒たちが生徒である前に植民地支配者だということが露呈していく。教室全体に悪意を含んだ不穏な空気が立ちこめるなか、五郎は講義している梅原健太の姿をまじまじと観察する。すると不思議なことに、江戸っ子の証だと信じこんでいたその洗練された髪型や綺麗な歯、さらにはあの巻き舌さえも、ことごとく朝鮮人の特徴のように思えてくるのであった。

夏休みの迫ったある日、ついに生徒の一人が証拠をつかむ。松林のなかで相撲をとっていた梅原健太が脱いだ洋服を調べたところ、「崔」という文字が書いてあった、というのである。この話が、校内の「いたる所で溜息や怒り声や笑い声を起させた ²¹⁾。」

小中学校時代を朝鮮ですごした田中明は、1926年生まれで小林勝とほぼ同年代だったが、この小説を読んだとき、「同じころ京城（現ソウル）で日本人中学校に通っていた私は、共犯者のように心穏やかでないものがあつた」と打ち明けている ²²⁾。小林勝の「日本人中学校」は、植民者の息子たちが一人の朝鮮人に対して犯した罪の物語であった。

4. 「ぼくが、君たちに、何かしたかね……」

植民地期を生きぬいた多くの朝鮮人の過去は、解放後のきびしい政治情勢のなかで、荒涼とした沈黙のなかに沈みこんでいった。冷戦の最前線に置かれた韓国において、それは日本よりもはるかに強固に凍てついた沈黙であった。1957年に日本で発表された小説「日本人中学校」は、作者である小林勝の意図を越えて、葬り去られた膨大な量の朝鮮人の過去のうち、ある一人の男の過去にほのかな光をあてる証言ともなった。その男、つまり作中の梅原健太のモデルとなったのは、そのお

よそ40年後に大韓民国大統領となる崔圭夏^{チ・ギョハ}——当時の日本名、梅原圭一であった。

ここで崔圭夏の略歴を紹介しておきたい。崔圭夏は、1919年7月、江原道原州の零落した両班の家に生まれた。普通学校のころから、休み時間もほとんど遊ばずに本を熱心に読み、「勉強の虫」と呼ばれるような子供だったという²³⁾。1932年、京城第一公立高等普通学校に入学。少年時代からの勤勉ぶりは一貫しており、物静かで勉強熱心な模範生であった²⁴⁾。とりわけ英語に並外れた才能を発揮した。京城帝国大学に合格するが、家運が傾いていた折だったため、経済的に敷居が低い東京高等師範学校を選択。37年、同校英文科に入学。父親が亡くなって経済事情がさらに悪化するも、母親がみずから畑を耕したり家畜を売ったりして送金をつづけ、本人もしばしば差別に遭いながら外国語の翻訳や家庭教師をして糊口をしのいだという²⁵⁾。

1941年3月、東京高等師範学校を卒業。同校の出身者は植民地朝鮮の中学校教育において大きな比重を占めていたが、崔圭夏はその恩恵をこうむり、大邱中学校に教諭職を得た²⁶⁾。朝鮮総督府は難色を示したが、東京高等師範学校と大邱中学校が強く働きかけた結果、かれの日本人中学校への赴任が実現したという。しかし、大邱中学校での教員生活は長くはつづかず、わずか1年半で辞職。崔圭夏はこの時点で、大邱を離れるだけでなく、教職自体を放擲し、進路を大きく転換させる。42年10月、満洲に渡り、大同学院に入学。今度は政治行政学を専攻した。43年7月に卒業し、解放までの2年間は、満洲国の官吏として働いていたようである²⁷⁾。

朝鮮の解放後はソウル師範大学で一時教鞭をとったが、1946年4月からアメリカ軍政庁中央食糧行政庁に職場を移す。英語力を買われ、51年には外務部通商局長に抜擢されるが、以後は長く外務部で活躍した。67年に長官にまで昇りつめた後、堅実な行政手腕と政治的野心のなさが評価されたのか、75年、國務総理に就任した。

1979年10月26日、20年近く独裁政権を運営し

てきた朴正熙が、側近に暗殺される。これを受け崔圭夏は、大統領代行を経て、同年12月6日に繰り上がる形で大統領に推戴された。しかし、就任直後の12月12日、全斗煥を首魁とする「新軍部」勢力がクーデターを起こす。これによって崔圭夏は権力の中枢から放逐され、わずか8カ月で退位することとなった。朴正熙暗殺とそれにつづく全斗煥らのクーデター、1980年の光州事件といった韓国政治史の重大局面に立ち会ったが、歴史の逆行を止めることができなかつたとされる。「崔大統領は官吏として几帳面で慎重かつ温厚な能吏だった。しかし細心すぎて、決断力に欠け小心翼翼で、現実追従タイプとの批判もあった」との評価が一般的であろうか²⁸⁾。

勤勉で篤実な人柄や質素な暮らしぶりは一貫しており、外務部長官や國務総理を務めた時期も家政婦を雇うこともせず、食卓はいつもつつましいものだったという²⁹⁾。大統領になっても態度は変わらず、秘書官がおどろくほど儉素な生活をつづけ、私邸も平凡な小さな家であった³⁰⁾。非常時に大統領職を務めることになったが、「私のような者に誰が銃を向けるというんだ」と、警護を迷惑がったという³¹⁾。実直な能吏タイプであったかれが専制君主にもたえられた大韓民国大統領になったのは、運命のいたずらだったといえるかもしれない。

1917年生まれのパク正熙と同世代である。両者とも師範学校からキャリアを築きはじめ、しばしの教員生活の後、満洲に活路を求めた。これは、帝国秩序の内側で志をとげようとする朝鮮の若者がたどるひとつの典型的な道であった³²⁾。満洲で軍官学校に入学して軍人の道を選んだ朴正熙は61歳で非業の死をとげるが、崔圭夏は長寿を全うし、2006年まで生きた。

小説「日本人中学校」の新任英語教師梅原健太のモデルとなったのは、後にこのような人生を歩むことになる崔圭夏である。稲葉継雄は、大邱中学校の同窓会誌に載った証言を引用しながら、梅原圭一と名乗っていた当時の崔圭夏についてつぎのように書いているが、小林勝の小説にあらわれ

る梅原健太の人物像と完全に符合する。「崔圭夏（梅原圭一）は、「東京高師を卒業したばかりの一番若い英語教師で、白せき長身、在学中に高分⁽⁷⁷⁾までパスし、またスポーツではバレーボールに乗馬に行くとして可ならざるは無い状態で、またたく間に生徒の信望を集めていた」が、やはり民族間の壁は厚く、一九四二年の二学期開始早々、教壇を離れることになった。一〇月二日、生徒の見送りを受けて大邱から新京へ向かい、満州国官吏となったのである³³⁾。」〔ルビ原文〕

それでは、小説の展開をみていくことにしよう。日本人よりも日本人らしくみえた梅原健太がじつは朝鮮人だったという噂が流れ、日本人生徒たちのあいだで失望とも怒りとも狂喜ともつかない興奮が爆発する。梅原健太の授業を待つあいだ、教室は異様な活気につつまれる。だれかが窓のカーテンをひきちぎり、また別のだれかがどこかからがらくたの土瓶と茶碗をもちこみ、それらで教卓を装飾する。ある者が黒板に「講談 新・鴨緑江節 一龍崔貞山」と大きな文字で書き、「崔」の字の横に二重丸をつける³⁴⁾。残忍な熱気のこもる静まりかえった教室に、いつものように軽快な足どりで梅原健太が入ってくる。かれは教室の異変にすぐに気づき、顔色を変える。

この後ほんの数秒間だけ、普段は明朗でおだやかな梅原健太が激昂するのを生徒たちは目のあたりにする。梅原健太は、土瓶と茶碗をつかんで窓の外に放り投げ、カーテンに覆われた教卓を荒々しく蹴倒し、狂乱したように両手で黒板の文字を消す。小林勝は、エッセイのなかでこのときのことをこう説明する。「目撃者（それは、そう書くのは実につらいのであるが、戦死した私の兄なのである）の語ったところによると、崔氏はそのまま黒板にむいたまま、じっと立っていたそうである³⁵⁾。」小説では、つづく梅原健太の姿をつぎのように描写している。

そのまま、どれくらい時間がたったんだろう、彼は、ゆるゆると、みんなの方へ向きなおった。彼の髪は額に落ちかかっていた。そ

して髪も顔も、青い洋服も、赤いネクタイも、チョークの粉と埃ですっかり汚れていた。ネクタイはゆがんでいた。彼の顔は青かった、彼の唇も血の気がなかった。彼の眼は放心したように見開かれていた、両手をだらっとさげたままだった。ようやく彼は、低い、震える声で、こう言った。——ほくが、君たちに、何かしたかね……³⁶⁾

なおしばらく生徒たちをみていた梅原健太は、やがて正気をとり戻したように口元をひきしめ、チョークまみれの両手をはたき、洋服についた粉を払い落とした。ネクタイのゆがみをなおしてから、かれは毅然と顔を上げ、静まりかえった教室を後にした。そうして、学校は夏休みに入る。

休み明けの校庭の朝礼で、五郎たちは校長の訓辞を聞く。地味な風采の老人をうしろにしたがえた校長は、事務的な態度で、梅原健太が「一身上の都合によって」辞任したことを告知し、その老人を後任として紹介する。前に立っている生徒が振り向いて、五郎にささやく。「梅原先生な、満洲かシナへ行ってしまったんだって……」³⁷⁾

梅原健太が姿を消し、かわりに別の教師があらわれたほかは、中学校はなにも変わっていなかった。こうして、寒々しい空気につつまれながら、物語はおわる。この小説は、梅原健太のモデルとなった梅原圭一が、1942年秋に大邱を去った後どのような運命をたどったのか、小林勝がまだ知らなかった1957年に発表された。

5. 30年後の衝撃

池東旭は、崔圭夏の植民地期の足どりをまとめるなかで、つぎのように書いている。「帰国後、一時教鞭をとったが、すぐ辞めて四三年、満州官吏養成機関の大同学院に入学した。東京高等師範を卒業した彼がなぜ教壇から離れ、満州まで行ったのか不明だ³⁸⁾。」

ここまで、小林勝の小説を手がかりにして、こ

の「不明」の部分に光をあてることをこころみてきた。崔圭夏本人が黙して語らず、詳細な評伝も存在しない現状では、かれが満洲に旅立ったのは小林勝が小説に書いた日本人生徒たちによる侮辱事件のせいだ、と断定はできないかもしれない。ただ、仮にそれが最大の要因でなかったとしても、この事件が、崔圭夏が教職をも捨てる大きなきっかけとなったことは、十分にありえるだろう。事件の現場に居合わせたのは小林勝の2歳上の次兄だったが、1940年入学のかれ自身も、41年に赴任してきた梅原圭一の姿は直接みていたはずである。当時の教員数は20名ほどであり、なんらかの関わりはあったかもしれない。

1942年の秋、梅原圭一は、生徒たちの見送りを受けて満洲へと旅立った。「内地」はもちろんのこと、祖国朝鮮でさえ望みはないと悟ったのだろうか。みずからの民族的尊厳に対する植民者の息子たちの冒流行為によって大邱中学校での記憶がすでに穢されていたそのとき、生徒たちによる歓送の光景は、かれにとってどれほど寒々しいものだっただろうか。

「最初から、「日本人」として自分をおしだしてきた人間、に対する今日からの批判はむろんあり得る。しかし、そのような生き方を同胞である朝鮮人は否定、批判しえても、異国人、侵略者たる私たちが、どのような顔と声をもって批判し得ようか」と述べた後、小林勝はこう告白する。「私は、小説やエッセイを書くたびに、決して、安易に「懐しい」などと書いてはならないあの頃の人々を思い出す。あれきりで、大邱公立中学校から姿を消した崔氏を思いだす³⁹⁾。」〔傍点原文〕

しかし、その男、梅原圭一は、大邱中学校を去ってそのまま歴史の波間に消えていったのではなかった。かれは朝鮮の解放を満洲で迎え、日本名を捨て、朝鮮に戻ってその後の激動の歴史を生きた。おそらく、忘れようにも忘れ去ることのできない梅原圭一の屈辱や怒りをうちにかかえ、ひた隠しにしながら。もしその男が、大邱中学校から消えておわりだったのなら、小林勝が人生の最終盤であえて自身の過去の作品「日本人中学校」に

言及することもなかっただろう。

エッセイは核心部分に入っていく。小説家という職業のため、電話上で名乗られてもだれなのかなかなか思い出せないような同窓生から思いがけない電話がかかってくることもある、という小林勝は、つぎのように打ち明ける。

小学校、中学校——それは、植民地にあった。私は苦痛なのである。しかし、相手は、「懐しい」といって電話してくる。本当にそう思っているから電話するのだろうか、私は「懐しい」という感情の、決して「懐しく」あってはならぬその対極から、その「懐しさ」をうちこわしまったく新しい握手をしなければならぬその道をさがしもとめつつ書いているのだから、電話をうける気持は複雑である。

——君はどんな小説を書いてきたか、と相手が言った。

——いろいろとね、私が言った、梅原先生を追い出してしまった話も書いたよ。

——梅原先生？ と相手は言い、そして事もなげにこう言った、ああ、今の外務大臣ね、韓国の崔外務部長官ね。

この言葉は、まさに正確に私の心臓を撃った⁴⁰⁾。

こうして、植民地の日本人中学校から失意のうちに姿を消した青年梅原圭一は、世界大戦と植民地解放の時代を越え、民族分断の大動乱をも越え、30年の歳月を経て、大韓民国外務部長官崔圭夏となって小林勝の前に突如あらわれ、その心臓を撃ち抜いた。崔圭夏は、もちろん大邱中学校での事件についてはなにも語らない。かわりにかれは、日本の閣僚に向かって、つぎのような儀礼的な言葉をかけるのである——「韓日間の国交が正常化してから五年にもならない期間のうちに、両国の政府と国民の間の相互理解および協力関係が多くの発展を相次いでもたらしていることを嬉しく思っているところであります⁴¹⁾。」

小林勝は、かつて梅原圭一の心を引き裂いた植

民地支配者の一人として、その内面奥深くを凝視せざるをえないような歴史的位置にあった。のみならず、かれはいまや反共を国是とする大韓民国と原理的に対立する共産主義者でもあった。つぎのような言葉で、エッセイはしめくられる。

私が、直接この小説に書いた事件にかかわっていたのではなかった。しかし、かって「植民地」朝鮮で、そのような無数の事件の積み重なりがあって、そして、その一つで心を真二つに裂かれたであろう人間がいて、その人が、現在の日本政府を友とする外交辞令とはまったくちがう日本人観を心の奥底におそらく持っているだろう外務大臣^(ママ)である、そして、その人は、日本の戦後二十五年を生きてきた私と今や真向から対立するイデオロギーの持ち主であろう、というような複雑に幾重にも屈折する事実を、私は、「日本および日本人にとって、朝鮮および朝鮮人とは何か」を考えていくそのページの上にもいま重いペンによってつけ加えねばならないのである⁴²⁾。

しかし、小林勝がこう書いた時点で、かれの死は目前に迫り、「日本および日本人にとって、朝鮮および朝鮮人とは何か」を問うその生の記録は、あまりにも多くの未完部分を残したまま、すでに最終ページに至っていた。

大統領時代まで10年以上仕えた秘書官が、激昂する姿をほとんどみたことがない、と証言しているほど温厚な性格の持ち主だった崔圭夏が、教壇を蹴倒してまで示した若き日の怒りには、どのような心情が反映されていたのだろうか。まるで大勢で寄ってたかって小動物をじわじわと追いつめいたぶるかのような日本人生徒たちの嘲りの視線を一身に浴びた梅原圭一は、朝鮮に乗りこんできた植民者の息子たちの精神の底知れぬ不気味さに戦慄したであろう。小説中の「ぼくが、君たちに、何かしたかね……」という梅原健太のつぶやきには、崔圭夏が全身で受け止めたであろう祖国朝鮮にいながらも逃れようのない孤立感と、帝国の位

階秩序のなかで生きてきたみずからの生の土台が崩れていくような絶望感が凝縮されているように思われる。

崔圭夏にとっては、家族に支えられ、貧窮や差別に耐えながらようやく手にした教職であった。2年も経たぬうちに辞めるなどとは思っていなかったにちがいない。英語力を有する人材が不足していた米軍政下の韓国において、大学教員をしばし務めた後軍政庁で官吏をしていた崔圭夏は、引き抜かれる形で外務部に入ることとなった。その意味で、その後外交官の道を一徹に歩むようになったことにも、社会変動期の一種の偶然が強く作用している。大統領にまでなってしまったのはアクシデントだったにしても、外務部長官や国務総理を歴任した以上、相当な社会的成功者だったことは確かである。ただ、そのような栄達の夢は、若いときにかれ自身が思い描いたものだったかどうかはわからない。あくまでも想像にすぎないが、堅実な性格の持ち主だったことから、子供たちに英語を教えながら暮らしていこう、などと考えていたように思われなくもない。エッセイで、「私は思いだしてしまう。いま生きているのか、と思う。なぜなら、一九五〇年にはじまる朝鮮戦争が、そこにはさまっているから」と書いた小林勝も、小説「日本人中学校」を発表した1957年の時点では、満洲に消えた梅原圭一の未来像を、漠然とそのように想像していたのかもしれない⁴³⁾。しかしじつは、この小説が発表されたまさにその年、崔圭夏は駐日韓国代表部参事官として、東京に赴任していたのである。小林勝には、小説のモデルとなった男がまさか同じ都市にいるなどとは想像もできなかっただろう。

崔圭夏が大邱中学校で受けた程度の侮辱は、数えきれないほどの朝鮮人が植民地支配下で日常的に受けてきたことであろう。小林勝は、植民地で起きた「無数の事件の積み重なり」のひとつによって「心を真二つに裂かれたであろう人間」の、歴史と時代から忘れ去られ、本人も語ることもないその傷跡をみつめ、小説という形で結晶化させた。それは、日本の統治は朝鮮を近代化したか収奪し

たかといった大きな議論からはみえてこない、その現場を実際に生きた人間一人一人の尊厳に対するおそれのまなざしであった。またこの小説は、結果的に、大韓民国で権力者となった一人の「親日派」の過去を暴いた。

生前の出版は叶わなかった小説集『朝鮮・明治五十二年』のあとがきで、小林勝はつぎのように述べている。かれが亡くなったのは、この本の最終校正を済ませた直後だったという。「この小説集の中には、朝鮮に長く住み、朝鮮人に直接暴力的有形の加害を加えず、親しい朝鮮人の友人を多く持ち、平和で平凡な家庭生活をいとんだ、もしくは、いとなもうとした日本人が登場してくる。かつて、下積みの、平凡な日本人の多くがそうだったと思う。それらの人々、あるいはいま中年に達した、それらの人々の子供たちの多くが、二十数年をへだてた今、朝鮮を懐しがっていることも知っている。」〔傍点原文〕こう前置きした上で、かれは厳粛に宣言した。

しかし、私は私自身にあっては、私の内なる懐しさを拒否する。平凡、平和で無害な存在であったかのように見える「外見」をその存在の根元にさかのぼって拒否する。ことは過去としてうつろい去ったのでは決してないのである。敗戦によって、あれらの歴史と生活が断絶されたのでも決してない⁴⁴⁾。

なぜ「内なる懐しさを拒否する」のかという問いに対する答えのうちには、大邱中学校での忌まわしい過去をかかえて30年の歳月を生きてきた崔圭夏も含まれていただろう。崔圭夏の存在は、小林勝にとって、植民地の歴史と植民者の生活が過去のものとなったのではないということのひとつの厳然たる証であった。小林勝が歴史の連続性を叫んでやまなかったのは、植民地支配に起因する苦しみを今なおかかえつづけている朝鮮人（韓国人）が日本にも朝鮮半島にも数多く実在するという、そしてほかならぬ日本人がその苦しみに今なお関係しているということ、戦後日本での

諸経験を通してかれが悟ったからであった。「敗戦によって、あれらの歴史と生活が断絶されたのでも決してない」——小林勝のこの言葉は、金石範「虚無譚」の語り手の在日朝鮮人が植民者二世のFに向かっていった「もっと断絶せよと、いや、断絶しようとは私はいいたい」という言葉を思い出させる。

ところで、「平凡、平和で無害」な植民者など存在しえず、子供もその例外ではないという小林勝の考え方は、1959年7月に発表された、植民地朝鮮の記憶をめぐるエッセイでもすでに表明されていた。「私は子供だったのだから、ということは弁解にならない。私は多分、朝鮮人たちにとって無害だったろう、ということもまた何の弁解にもならない。アメリカの軍人の中にもいい人間がいる、と試してみたところで、彼がまぎれもなくアメリカの軍隊を構成している一員で、日本に存在しているという事実の前には、それは何ほどの意味もないことと同一である。歴史とはつまりそういうもので、私が子供で、無害だったとしても、一人だけ、日本帝国主義と植民地の歴史から除外されるわけにはいかない。歴史とはそういうきびしいものだ、それくらい重いものだ、そして私をふくめて全日本人はこの歴史を体の一番深いところで背負ってゆかねばならない⁴⁵⁾。」

小林勝がこの文章を書いた年の3月、すでに日本にいた崔圭夏は、駐日韓国代表部公使に昇進する。一方の小林勝は、このエッセイを発表した直後、朝鮮戦争時の「火焰壇事件」で実刑判決を受けて下獄。かれが中野刑務所で懲役刑に服していた9月、崔圭夏は外務部次官となるべく本国に戻った。12月、小林勝は、いよいよはじまった「帰国事業」の熱狂の様子を伝えるラジオ放送に、宇都宮刑務所のなかで聞き入っていた⁴⁶⁾。かれが出獄した翌1960年、日本では日米安全保障条約更新に対する大規模な反対運動が展開されるが、韓国では「4・19革命」が起り、李承晩政権が打倒される。しかしつづく61年、朴正熙による「5・16クーデター」が引き起こされ、韓国はふたたび激動期に突入していくこととなる。

1959年に帰国した崔圭夏は順調に出世していき、67年、ついに外務部長官となる。一方、早すぎる晩年を迎えた小林勝は、1971年3月23日、さまよい出るかのように自宅から姿を消した。そして25日の夕刻、ある場所で、朽ち果てるように倒れ、搬送先の病院で死んだ。桜はまだ咲きそうにない寒い夜だったという。「懐しい」という感情の、決して「懐しく」あってはならぬその対極から、その「懐しさ」をうちこわしまったく新しい握手をしなければならぬ——新しい日本人に生まれ変わり、新しい朝鮮人と握手を交わすことを夢みて生きた小林勝の戦後は、出生地朝鮮に帰る道が閉ざされた1945年の夏にはじまり、71年の春におわった。かれが死んだ年の6月、崔圭夏は外務部長官を辞し、大統領外交担当特別補佐官となった。朝鮮が解放された後、二人が相まみえることはなかった。

6. おわりに——「ひらかれた場所へ」

高史明は、小林勝の死後、かれの生き方を評して、「日本人として、深く朝鮮を愛し、朝鮮をたんに懐しむことを拒否した」といい、植民地朝鮮で暮らしたことのある日本人が、朝鮮を愛することと「たんに懐しむこと」とをはっきりと分けた⁴⁷⁾。このことに関して、歴史学者の梶村秀樹は、朝鮮の風土や文化をなつかしむ旧在朝日本人の心情は「生身の朝鮮人の苦しみにあえてふれようとせぬ」抽象的な愛であり、それは「本質的に侮蔑と折り合える「愛」である、ときびしく喝破した⁴⁸⁾。人間へのまなざしの欠落した植民地の風物への愛情は人間に対する侮蔑と紙一重である、というこの指摘は、「朝鮮に長く住み、朝鮮人に直接暴力的有形の加害を加えず、親しい朝鮮人の友人を多く持ち、平和で平凡な家庭生活をいとんだ、もしくは、いとなもうとした日本人」〔傍点原文〕たちにとって心外かもしれないが、やはり至当であると思う。

さて、金石範は、その文学活動の全体にわたっ

て特別な土地でありつづけている濟州島を、複雑な思いをこめて「原風景」と呼んだ。そのかれが、「私は私自身にあっては、私の内なる懐しさを拒否する」という小林勝の言明に目をとめ、つぎのように指摘していることに注目せずにはいられない。「小林勝はここで「郷愁」とか「ノスタルジヤ」とはいわず、「懐しさ」といつているが、それはことばを選んだ結果だと思われる。作中では登場人物が、朝鮮を故郷だというくだりがかなり出てくるのだから、「郷愁」といつてもよさそうなものだが、「二十数年をへだてた今」、小林勝はあえてそのようなことばを使わなかった⁴⁹⁾。」

このように金石範は、似たような単語を選択する上での些事に思われなくもない部分に強い反応を示している。「心情としては一種のノスタルジヤ以外の何ものでもない」「故郷」朝鮮への愛情を表現するのに、小林勝はなぜ「郷愁」や「ノスタルジヤ」ではなく、あえて「懐しさ」という語を選んだのか、と金石範は問う。そしてこの問いは、かれ自身の「故郷」への思いとつながっていく。別のところで金石範は、「故郷」濟州島について、つぎのように語る。

ことばを詰めていえば、「私の原風景は故郷」というふうになるのだが、これは「郷愁」にも似てかなり湿っぽく、それに陳腐な感じがする。しかし、じっさいの私のなかの「故郷」はそのような情緒的なものではない。それは青く光る漢拏山の雪のような刃を私に突きつけるものであり、現実の濟州島との繋がりのないままのイデーのようなものになってしまっているのである。私の「濟州島」はいまやどこか別の空間に棲息する架空の「故郷」であろう。「故郷」は私の存在と作品のイメージの核をなすものでありながら、現実には私は故郷喪失者である⁵⁰⁾。

解放後に金石範の「故郷」濟州島で猛威を振るった凄惨な暴力が、その地を「情緒的」に想起する可能性をかれから奪い尽くした。濟州島は、今も

なお鮮血を流しつづけることをもって、やすらかな「郷愁」とともに回想されることを峻拒しつづける。それは、朝鮮戦争、そして日本国内で一方向にやまない朝鮮人迫害を目のあたりにして憤怒に震えた小林勝が、みずからのうちに息づく「故郷」朝鮮への「郷愁」をなんとか封じこめなければならなかったことと通じ合う。その意味で、小林勝の朝鮮もまた「イデー」であった。金石範は、「故郷」と自身の文学の関係について、このようにいう。「もし私が済州島に生まれ、そこで長らく住み幸福な生活の月日を送ったとすれば、「故郷」が私にとって保証されたものであったとすれば、私はおそらく済州島にこれほど執着しなかったかも知れないし、私の作品は生まれなかったのではないかと思う⁵¹⁾。」

一方、小林勝にとっても、「故郷」はけっして保証されたものではなかった。朝鮮が故郷だと思ふことが特権的に保証されていた植民者二世としてのかれの生は、日本の敗戦によって一応のおわりを告げた。しかし、植民地が消滅したからといって、かれがなにもなしに植民者であることから降りられたのではなかった。小林勝は、戦後もなおみずからが植民者であるということに終止符を打つために、ほかのどの文学者よりも強く朝鮮に執着し、同時にみずからの植民地郷愁を撃ちつづけた。

金石範は小林勝論の結論部分で、「〈朝鮮〉にがんじがらめになり、そのおのれの内に下降しつづける彼がどうして〈故郷〉に対する「郷愁」を持ちえようか」と問いつつ、小林勝の文学の可能性についてつぎのように述べる。

彼の拒否、しかしこれは彼を束縛するが、同時にまた彼をひらかれた場所へ、ほんとうの自由へみちびくものに他ならない。その〈朝鮮〉から自らを解放する過程が小林勝の自由であった。これは単なる「贖罪」ではない。「贖罪」を突き抜けたところにある広がり朝鮮人と共有する道であり、その方法としての「内なる懐しさを拒否する」意志が読者を、そ

して朝鮮人の私をも照らす⁵²⁾。

このようにして照らされた朝鮮人は、ひとり金石範だけではなかった。高史明は、自身や小林勝のような朝鮮と日本の若者たちがそれぞれに青春をなげうった朝鮮戦争時の日本共産党の「武装闘争」を、「人間としての根本における誤り」だったと反省した上で、「だが、それは純粹に朝鮮を愛した小林勝の心とは、決して一緒にしてはならないものであろう」として、つぎのように語る。

あの時代において、小林勝のように朝鮮を考えてくれた作家が、いったい何人いたであろう。わたしは、この小林勝の姿を思うのである。そして、この小林勝が、朝鮮の山野を、朝鮮人とともに駆けまわる姿を思うのである。その小林勝の姿は、満身創痍である。しかし、そこにひらかれた日本人の姿を見る思いがするのである⁵³⁾。

高史明は「ひらかれた日本人」といい、金石範は「ひらかれた場所」といった。「私は私自身にあっては、私の内なる懐しさを拒否する」と宣言した小林勝は、逆説的にも、むしろその「束縛」そのものを通して、閉ざされた場所から抜け出そうとした。「植民地後」の世界で、小林勝がみずからの植民地郷愁を撃つ苦しみのなかでなろうとしていた「ひらかれた日本人」とはどのような者で、かれが目指した「ひらかれた場所」とはどのような場所なのか、そして読者のあなたは果たして今ここにいるか——今もなお、小林勝の文学が投げかけるのは、この問いにほかならない。「贖罪」を突き抜けたところにある広がり朝鮮人と共有する道」を歩き抜いた「ひらかれた日本人」が、「ひらかれた場所」——「ほんとうの自由」に到達するまで、かれの文学は問いかけることをやめない。

※ 本稿は、하라 유스케 (2012) 「고마야시 마사루와 최규하」『사이』12호, 국제한국문학문화학회をも

とにして執筆した。

注

- 1) 津田 [1985:222].
- 2) 林淑美「解説——『記憶の糸』と『資料さがし』」藤森 [2013:313-314].
- 3) 藤森 [2013:49].
- 4) 李 [1971:86].
- 5) 朴 [1971:50-51].
- 6) 愛沢 [1973:42].
- 7) 渡邊一民「解説」梶山 [2007:225].
- 8) 崔 [2014:92].
- 9) 朴裕河「おきざりにされた植民地・帝国後体験」伊豫谷 [2014:70-77].
- 10) 金石範「虚無譚」[1973:305-308].
- 11) 磯貝 [1981:61].
- 12) 安部 [1997:87].
- 13) 小林 [1971 ① :22]. 脱字を訂正した。
- 14) 大邱中学校については、稲葉 [2007]をおもに参照した。
- 15) 古川 [2007:128]. 朝鮮で「創氏改名」がはじまった1940年に入学した小林勝は、「私の中学の同級生には三人の朝鮮人がいたが、その三人がどういう本来の姓名をもっていたのか、今、私はわからないのである」と回想している(小林[1961 ① :6]).
- 16) 森崎 [2006:88].
- 17) 稲葉 [2007:13].
- 18) 小林「瞻星」[1976:268].
- 19) 日野 [2009:56-57].
- 20) 小林 [1957:37].
- 21) 小林 [1957:40].
- 22) 田中 [2010:187].
- 23) 元珩常「崔 大統領의 幼年時節과 나」原州國民學校開校八十年年史編纂委員会 [1987:162].
- 24) 金明珪「私心 없는 行政家」현석최규하대통령팔순기념문헌집발간위원회 [1998:376].
- 25) 崔興洵「평생 정당에 가입한 적 없는 직업 공무원」현석최규하대통령팔순기념문헌집발간위원회 [1998:392-393].
- 26) 稲葉 [2001:191].
- 27) 강준식 [2011:210-211].
- 28) 池 [2002:136].
- 29) 金明珪 [1998:378].
- 30) 권영민 [2008:29-30].
- 31) 권영민 [2008:102].
- 32) 姜、玄武岩 [2010:56-58].
- 33) 稲葉 [2007:10-11].
- 34) 小林 [1957:40].
- 35) 小林 [1971 ① :23].
- 36) 小林 [1957:40-41].
- 37) 小林 [1957:41].
- 38) 池 [2002:135].
- 39) 小林 [1971 ① :24].
- 40) 小林 [1971 ① :24].
- 41) 한영구, 윤덕민 엮음 (2003) 「최규하 외무부장관의 양국관계 일반 및 국제정세에 관한 발언 (1970.7.23, 서울)」『현대 한일관계 자료집 1』 도서출판 오름, p.258.
- 42) 小林 [1971 ① :25].
- 43) 小林 [1971 ① :23].
- 44) 小林 [1971 ② :219-220].
- 45) 小林 [1959:80-81].
- 46) 小林 [1961 ② :131].
- 47) 高 [1976:75].
- 48) 梶村 [1992:237-238].
- 49) 金石範 (1976) 「解説——『懐しさ』を拒否するもの」小林 [1976:372].
- 50) 金石範 [2001:228].
- 51) 金石範 [2001:229-230].
- 52) 金石範「解説」小林 [1976:378].
- 53) 高 [1976:74].

参考文献

- 愛沢革 (1973) 「想像力の基点としての〈朝鮮〉」『新日本文学』11月号.
- 安部公房 (1997) 『安部公房全集』4巻、新潮社.
- 李恢成 (1971) 「憤怒の人」『新日本文学』7月号.
- 磯貝治良 (1981) 「朝鮮体験の光と影——小林勝の文学をめぐって」『新日本文学』10月号.
- 稲葉継雄 (2001) 『旧韓国～朝鮮の日本人教員』九州大学出版会.
- 稲葉継雄 (2007) 「大邱中学校について」『九州大学大学院教育学研究紀要』10巻.
- 伊豫谷登土翁ほか編 (2014) 『「帰郷」の物語／「移動」の語り』平凡社.
- 梶村秀樹 (1992) 『梶村秀樹著作集』1巻、明石書店.
- 梶山季之 (2007) 『族譜・李朝殘影』岩波現代文庫.
- 姜尚中ほか (2010) 『大日本・満州帝国の遺産』講談社.
- 金石範 (1973) 『鴉の死』講談社文庫.
- 金石範 (2001) 『新編「在日」の思想』講談社文芸文庫.
- 高史明 (1976) 「小林勝を思う」『季刊三千里』5号.
- 小林勝 (1957) 「日本人中学校」『文學界』2月号.
- 小林勝 (1959) 「体の底のイメージ」『新日本文学』6月号.
- 小林勝 (1961) 「日本文学と朝鮮」『アジア・アフリカ通信』3号.
- 小林勝 (1961) 『檻の中の記録』至誠堂.

小林勝（1971）「「懐しい」と言ってはならぬ」『朝鮮文学』11号、新興書房。
小林勝（1971）『朝鮮・明治五十二年』新興書房。
小林勝（1976）『小林勝作品集』5巻、白川書院。
田中明（2010）『遠ざかる韓国』晩聲社。
池東旭（2002）『韓国大統領列伝』中公新書。
崔真碩（2014）『朝鮮人はあなたに呼びかけている』彩流社。
津田海太郎（1985）『物語・日本人の占領』朝日選書。
朴元俊（1971）「小林勝氏の急逝を悼む」『朝鮮研究』4月号。
日野啓三（2009）『台風之眼』講談社文芸文庫。
藤森節子（2013）『少女たちの植民地』平凡社ライブラ

リー。
古川昭（2007）『大邱の日本人』ふるかわ海自事務所。
森崎和江（2006）『慶州は母の呼び声』洋泉社。
강준식（2011）『대통령 이야기』에스위켄。
권영민（2008）『자네 출세했네』현문미디어。
原州國民學校開校八十年年史編纂委員會역음（1987）『開校八十年史』原州國民學校同窓會。
윤덕민 역음（2003）『현대 한일관계 자료집 1』도서출판 오름。
현석 최규하대통령 팔순기념 문헌집 발간위원회 역음（1998）『玄石片貌』최규하전직대통령 비서실。

キルチャビ

朝鮮民主主義人民共和国における 科学史研究

任正嫻（朝鮮大学校理工学部教授）

1. はじめに

日本は世界的に見ても科学史研究が盛んであるが、朝鮮科学史への関心は低い。そこで、この分野の研究が活発化することを願い本誌第3号に「日本における朝鮮科学史研究の現状と展望」という論稿を寄せた。そこでは、日本人研究者と筆者を含めた在日朝鮮人研究者の著作を紹介し、今後の展望について私見を述べた。ただし、それはあくまでも日本に限定したものであり、何よりも南北朝鮮における研究状況を把握することが必要不可欠である。

韓国では宋相庸が1945～80年頃までの「韓国科学史研究略史」を整理し、韓国科学史学会結成30周年および40周年に際しても活動を振り返る論稿を『韓国科学史学会誌』に書いている。また、『歴史学報』にも1996年に朴星来が「回顧と展望：科学史」を書いて以降、研究動向に関する論稿が随時掲載されるようになった。それらによって韓国における研究についてはかなり詳細に知ることができる。

他方、朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国と略記）では、科学史は文化史の一部という位置づけで研究者の数も少ない。それでも貴重な成果が得られているが、1990年頃までについては日本科学史学会誌『科学史研究』185号（1993）で紹介したことがある。共和国における科学史研究に関する唯一の研究概観といえるものであるが、す

で20年以上が経過している。そこで本稿ではそれ以降の展開について、自身の経験談を交えながら、出版された書籍を中心に見てみたい。

2. 1990年代の代表的書籍

1990年以前の研究は、一言でいえば文化史の一部として優れた科学技術伝統の発掘・整理である。90年代以降にそれを基に科学史の問題意識を押し出した研究が行われるようになったが、その出発点といえるのが90年に出版された李容泰『朝鮮中世科学技術史』である。ここでいう「中世」とは封建時代と同義語で用いられて、紀元前3世紀の三国時代から19世紀の朝鮮王朝末期まで、実質的には朝鮮科学史の大部分を網羅している。はじめにそれぞれの時代の社会歴史的背景について言及し、技術と科学の分野毎にその詳細を明らかにした本格的著作である。

著者である李容泰は本誌第3号でも紹介した『わが先祖の誇り・科学と技術の話』の編者であり、共和国の科学史研究を主導してきた人物である。注目すべきは社会科学院歴史研究所編『朝鮮全史』の科学技術の項目を執筆したのも彼である。『朝鮮全史』は1979年から刊行が始まり1990年に全50巻で完成した、文字通り朝鮮史の通史であるが、各時代の最後には科学・技術についての記述がある。『朝鮮中世科学技術史』とまったく同じ文書が数多く見られることから、その執筆者が李容泰である

ことは間違いない。ただし、『朝鮮全史』では19世紀末まで記述されているが、『朝鮮中世科学技術史』は19世紀前半で終わっている。実は著者は1988年に他界、『朝鮮全史』の原稿をすべて整理できずに『朝鮮中世科学技術史』は出版されたためである。残念ではあるが、それでもその本の価値を損なうものではない。

もう一つ90年代の代表的書籍が93～95年にかけて出版された『朝鮮技術発展史』である。古代・三国時代・高麗時代・朝鮮前期・朝鮮後期の全5巻からなる大著で、崔尚浚、金承源、金東臣をはじめ15名の研究者による共同執筆である。取り扱っている分野は、鉱業および金属加工、紡績・染色、建築、造船、窯業、印刷および製紙、武器製作、農業、天文気象観測で、現時点で南北朝鮮を通じてもっとも優れた技術史研究書である。文字通り朝鮮の技術史を体系化したものであるが、時に実際に実験を行いながら該当する技術を分析・検討しているところが特徴的である。

ところで、この書籍の出版に関しては興味深いエピソードがある。1960年代に金策工業大学の研究者たちが『朝鮮技術発展史資料集』全4巻の出版を計画したことがあった。資料集となっているのは、その概観と技術工学的分析とともに、発展過程を明らかにする資料を古文獻から収集・整理しているからである。構成は第1集「船舶関係」、第2集「生産器械、観測器具、武器その他」、第3集「活字、印刷」、第4集「鉱業技術」であったが、第2集は刊行されなかった。というのも、当時、歴史研究における復古主義的傾向が指摘され、数多くの書籍が批判されたのだが、『朝鮮技術発展史資料集』もその対象となったのである。

ところが、90年前後する頃、この書籍の存在を知った金正日総書記がその批判は的はずれであり、改めて当時の研究者を含めて関連分野の研究者を集め、技術史を集大成する課題を提示した。そうして完成したのがこの『朝鮮技術発展史』である。

このエピソードは2004年に平壤で開催された「第二回朝鮮学世界大会」に参加した際に崔尚浚先

生とお会いする機会があり、直接、お聞きしたものである。先生の専門は金属工学で、古朝鮮の青銅が亜鉛を含む独自のなものであることをはじめて明らかにしたのも彼である。『考古民俗学』1966年第3号に掲載された「わが国原始時代および古代の金属片遺物分析」がそれである。『韓国科学技術史』の著者である全相運先生は、ハーバード大学燕京研究所に留学していた時にこの論文を読んで、大きな刺激を受け研究を深めたという。全相運先生とは来日された際に何度かお会いする機会があり、もし、平壤で崔尚浚先生と会うことができたなら自分の挨拶を伝えてほしいといわれていたので、その時に実現することができて本当によかったと思っている。

3. 分野別書籍

『朝鮮中世科学技術史』、『朝鮮技術発展史』は総合的通史であるが、『朝鮮全史』を完成させた歴史研究所では、90年を前後する時期から『部門史』を刊行しはじめた。また、部門史ではないが、いくつ科学史関係の書籍も出版されている。とくに、植民地解放以降の現代科学史の出版が一つの特徴といえる。まず、それらを朝鮮王朝以前までの伝統科学と植民地解放以降の現代科学にわけて、年代順に挙げてみよう。

①伝統科学

- リ・ファソン『部門史・朝鮮建築史(1)』(1989)
- リ・テヨン『部門史・朝鮮鉱業史(1)』(1991)
- 張国鐘『部門史・朝鮮鉱業史(2)』(1991)
- 曹喜勝『部門史・朝鮮手工業史(1)』(1991)
- 洪憲裕『部門史・朝鮮手工業史(2)』(1991)
- 洪憲裕・チェ・テヒョン『部門史・朝鮮教育史(1)』(1995)
- パク・トクチュン『部門史・朝鮮教育史(2)』(1995)
- リ・チョルファ『朝鮮出版文化史』(1995)

②現代科学

- リ・ファソン『部門史・朝鮮建築史(2)』(1989)

パク・マンヒョプ『部門史・朝鮮交通運輸史 (2) 鉄道運輸編』(1988)

キム・ジュンギほか『部門史・朝鮮交通運輸史 (3) 自動車運輸編』(1991)

キム・チャンホ『部門史・朝鮮教育史 (3)』(1990)

カン・グンジョ『部門史・朝鮮教育史 (4)』(1991)

ユン・ミヨンス『朝鮮科学技術発展史(1)』(1994)

リヨム・テギ『化学工業史』(1994)

部門史として出版されたものがほとんどであるが、そこに『教育史』も含ませた。というのも科学技術の発展には人材育成すなわち教育の発展は欠かせないからである。参考までに他の部門史のテーマを挙げるならば、政治制度史、商業史、水軍史、ブルジョア民族運動史、近代愛国文化運動史、風俗史、工芸史、彫刻史、音楽史などがある。

部門史のなかでも個人的にもっとも興味深いのは『朝鮮建築史』で、(1)は原始時代から1920年代前半まで、(2)は1920年代後半から1980年代前半までを当てている。朝鮮王朝以前の遺跡・遺物のみならず、植民地時代から現代まで一貫して記述した点が特徴といえる。著者であるリ・ファソンはすでに他界されたが、平穰建設建材大学建築史研究室・室長を務め、東明王陵と定陵寺をはじめとする遺跡遺物の発掘と復元で大きな役割を果たした人である。また、国際親善展覧館や人民大学堂などの現代建築建設にも携わっている。ゆえに、『朝鮮建築史』は歴史研究書であると同時に実践報告書でもある。実際、現代建築物の豊富なイラストは眺めるだけでも楽しめる。

書籍ではないが貴重な文献として許庚植による学位論文『わが国における化学技術の発生発展について』(1992)と『朝鮮化学技術発展史研究』(1998)がある。前者は学士、後者は博士論文である。共和国の学位制度は旧ソ連に倣ったもので、以前の「博士」は学界の権威あるいは功労者に贈られるもので、学位といえば「学士」(現在は碩士と改称)のことであった。しかし、それは国際的基準に合わないので、近年は「20代・30代の博士を輩出しよう」というスローガンが掲げられている。

筆者が知るなかで科学史関係のもっとも古い学

士論文は、1960年代の韓栄吉『七政算に関する研究』である。『七政算』は世宗時代の天文曆書であるが、彼はそれ以前にも『高麗宣明曆』に関する研究」という浩瀚な論文を発表している。韓栄吉は京都帝大理学部で天文学を専攻、共和国では数少ない朝鮮科学史の専門家で、当時は金日成総合大学自然科学史研究室に所属していた。ちなみに、韓栄吉も許庚植も1966年に日本で翻訳出版された大著『朝鮮文化史』の執筆に携わっている。『朝鮮文化史』はB4版で上下二冊、カラー写真も豊富で、今では考えられない豪華本である。各時代の文化を項目別に紹介しているが、科学技術関係では二人のほか、李容泰、金承源、金東臣、陸栄万、李弼根、洪淳元らが執筆陣にその名を連ねている。

ところで、部門史には科学史の重要分野である医学・数学に関する書籍が見当たらないが、それについて言及しておこう。共和国で医学史関係の書籍としては1981年に出版された洪淳元『朝鮮保健史』がある。保健医療に関する南北朝鮮を通じて初めての書籍で、社会的変化に伴う保健医療分野の変化を断片的な記述に終わらず一貫的に説明した点が高く評価されている。これ以降、医学史関係書籍は見当たらなかったが、つい最近ソン・チョルホ『朝鮮薬学史』(2015)が出版されたという記事が『朝鮮新報』に掲載された。朝鮮における薬物利用の始原、薬学教育、医学関係機構の変遷過程、各種高麗薬材と薬草栽培、薬物貿易など幅広い内容を取り扱った書籍である。

また数学史であるが、これまで通史としては金容雲・金容局『韓国数学史』(1979)、川原秀城『朝鮮数学史』(2010)の二冊のみであったが、数年前に共和国でもソン・チャンホ『朝鮮数学史』が出版されている。ソン・チャンホは科学院・院士で数値解析の専門家であるが、第二回朝鮮学世界大会で数学史に関する研究発表「14世紀の高麗で天文計算に利用された補間法について」をお聞きしたことがある。その他の内容も知りたいところだが、残念ながら『朝鮮数学史』も『朝鮮薬学史』も筆者の手元にはない。

次に現代科学史であるが、今のところ総合的通

史といえるのは『朝鮮科学技術発展史 (1)』のみである。1970年までを民主建設時期・朝鮮戦争時期・戦後復旧建設時期・社会主義建設時期・社会主義全面建設時期に分け、それぞれの時期の科学技術発展方針とその対策、そして工業・農業・医学・基礎科学・最新科学の部門別に得られた成果を整理したものである。記述の断片的側面を否定できないが、出典が明記されており一次史料を当るうで便利である。

また、分野別現代科学史もテーマが限られており、例えば電力工業史や機械工業史、金属工業史などより広範な書籍の出版が期待される。

4. 一般科学史と学説史

ここまでは朝鮮科学史の書籍を紹介したが、次に一般科学史と学説史を見てみよう。まずは、筆者が知る範囲で唯一の古代から20世紀までの通史であるカン・ミング『自然科学史』(1988)である。そこでは科学史研究の意義を次のように提示している。①科学の発展過程の考察に基づいて、現在の科学的成果が先行する科学発展の総和であることを歴史的過程のなかで認識すること、②過去の科学発展の経験と教訓に基づき、これからの科学発展の方向を確定し、その方法論を得ること、③哲学史的見地から唯物論哲学が自然科学発展と並行してどのように発展し、自然科学の成果が宗教、観念論を克服するのにどのように寄与したかを認識することである。

①、②は通常の問題意識と基本的に一致するが、③が強調されているのは、この書籍が金日成総合大学哲学部における教科書として書かれたものだからである。出版されて久しく末尾に挙げられた参考文献も少数の古い文献であり、改訂の余地が多く残されている。

その意味でウォン・フンヨン他、『現代科学技術の発展』(2014)は興味深い書籍である。17世紀いわゆる科学革命以降から現代までを取り扱っているが、内容に関して「まえがき」では次のよう

に書いている。

第一編では、現代科学の発生と発展過程を歴史主義的原則において、同時に当代社会の社会階級的関係と経済関係の相互作用のなかで分析しながら、科学技術の発展と社会発展の密接な連関を強調した。第二編では、20世紀の科学技術を、第三編では21世紀の先端科学技術の発展方向を包括的に分かりやすく記述することに努めた。また、新しい発見、発明資料、その着想動機と過程を記述した。

科学史研究が推進されるためには、歴史への興味とともに現在の科学を発展させるためにも過去の発展過程を振り返ろうという問題意識が成熟しなければならない。この『現代科学技術の発展』はそれが反映された書籍といえる。

現在、共和国で科学技術強国建設をスローガンに掲げているが、なかでも核心基礎技術(IT、NT、BT)、新エネルギー、新材料、宇宙空間技術などを主力分野として挙げている。『現代科学技術の発展』の第三編は、まさにそれらについての解説となっている。

次に学説史であるが、化学および物理学の書籍がある。化学では任眞淑が1997年に学士論文をもとに『化学史』を、2001年に一般向けの『発明発見の歴史・化学』を出版している。その後も研究を深め任眞淑は2007年に『化学史』で博士号を取得している。

物理学では崔淳哲による『物理学の発展』(2003)、『物理学発展の話 (1)、(2)』(2009 - 10)がある。前者は本格的な物理学史で500頁以上にもなる大著(筆者による書評が『韓国科学史学会誌』第29巻第1号に掲載されている)、後者はそれをコンパクトにした青少年向けの解説書である。両先生とは平穰で何度かお会いしたことがあり、それらの著書も直接頂いたものである。

なお、学説史と関連して2007年に出版された『光明星百科事典』第10巻「数学」、第11巻「物理学」、第12巻「化学」、第13巻「生命科学」の

末尾には、それぞれ 50 頁ほどの発展歴史の記述がある。ちなみに「数学の発展歴史」の執筆者はソン・チャンホ、「化学の発展歴史」の執筆者は任眞淑である。

5. おわりに

本稿では、出版された書籍をもとに 1990 年代以降の朝鮮民主主義人民共和国における科学史研究の状況を簡単に整理した。取り上げた書籍は基本的に筆者の手元にあるものなので限定的であるが、その一端を示すことはできたのではないだろうか。また、しばしば個人的な話も交えたが、共和国に関する情報は正確に伝わりにくいので、少しでも身近に捉えていただければという思いによる。

本稿を整理しながら、強く感じたのは現代科学史研究の重要性である。筆者はこれまで南北朝鮮および在日の研究者の論文を集めて、『朝鮮古代中世科学技術史研究－古朝鮮から高麗時代までの諸問題』（2014）、『朝鮮科学技術史研究－李朝時代の諸問題』（2001）、『朝鮮近代科学技術史研究－開化期・植民地期の諸問題』（2010）を皓星社から順次出版してきた。論点を提示した論文による通史を目指したが、通史であるためには当然植民地解放以降の現代科学史が必要となる。

南北分断の状況のなかで、それぞれがどのように科学技術を発展させてきたのか、その特徴はどのようなものであり、統一時代を見据えた科学技

術はどうあるべきか、歴史研究の第一の目的が教訓を得るためであるならば、朝鮮科学史研究のもっとも重要な目的がここにあるといえるだろう。

歴史的事実の客観的評価はある程度の時間経過を必要とする。すでに植民地解放から 70 年を経えており、その時期に至ったといえるのではないだろうか。まずは、解放後から 1970 年まで、次に 1970 年から 2000 年までを一つの区切りとして現代科学史を整理するという構想を抱いているが、実現するのはまだまだ先のことになりそうである。

【付記】

『朝鮮古代中世科学技術史研究』、『朝鮮科学技術史研究』には、共和国の研究者の論考 26 編の日本語訳を収録している。そのなかで、本稿で紹介した書籍の一部および論文は以下の通りである。

- ① 崔尚浚：わが国原始時代および古代の金属片遺物分析
- ② 李容泰：10～12 世紀高麗前期の科学
13～14 世紀高麗後期の科学
- ③ 崔尚浚ほか：高麗青磁の技術的分析
- ④ 韓栄吉：『高麗宣明暦』に関する研究
- ⑤ ソン・チャンホ：14 世紀の高麗で天文計算に利用された補間法について
- ⑥ 李容泰：15 世紀の科学
19 世紀開国以前の諸科学
- ⑦ リ・ファソン：李朝末期の近代建築
- ⑧ リ・チョルファン：朝鮮実学派とその著書
- ⑨ 洪淳元：李朝時代の医学書出版事業の特徴

キルチャビ

「今日のソリは今日限り」

安聖民 (パンソリ唱者)

仙人のように、鬼のように

真夏だというのに、まだ空気がひんやりとしている朝7時半。朝もやに包まれた溪谷に立つと、柔らかな木洩れ日に照らされて、きっと一晩かけて編んだのだろうクモの巣がキラキラと銀色に光って見える。まずは深呼吸。細胞の一つ一つに新鮮な空気が行き渡り、体中が清く澄み切ったように感じられるまで吸って吐いてを繰り返す。そうして山の気で体がいっぱい満たされたら、滝つぼに向かって勢いよく走る水の流れるに、少しずつ自分の声を乗せていく。初めはなかなか乗っからなくて、岩のくぼみに入って同じところをぐるぐる回ったり、弾かれて向こうの山に飛んで行ったり……。でもそのうちに、だんだんと水に声が馴染んできて、流れに引っ張り出された声はやがてほどなく歌になる……。サンコンブ（山学習：夏のレッスン合宿）の朝は毎日こんな風に始まる。そう、まるで仙人のように。今回の参加者は14名。私のレッスンは午後一だったので、午前中は完全に自分の練習時間だった。朝6時に起床し、7時には朝ごはんを食べ終え、合宿所になっている民家を出発し、歩いて溪谷に向かう。長く座っていられそうな日陰を探し、岩の上や木の下など、水辺のお気に入りの場所に陣取る。ていねいに昨日のレッスンの復習をし、何度も聴き、何度も歌う。午後のレッスンが終わった後も、それこそ一日中ひたすらずっと繰り返す。そう、まるで鬼のよう

に。上手く歌えなくて嫌気がさすことも多いけれど、自分がイメージする“声”を探している時は本当に楽しくて仕方ない。一番幸せな時間だ。これから先も、夏は韓国の山で仙人のような朝を過ごし、鬼のような練習を繰り返すだろう。「続けることは難しい」と言うが、「楽しいことを続ける」のは決して難しくないはずだから。

民族との出会い

「日本では教えてくれる人がいない」「在日があんなに多い韓国語の歌詞をまともに歌える訳がない」と言われ、半ば諦めかけたパンソリを習うため、1998年に韓国へ留学した。それまで9年間勤めていた民族講師の職を辞し、子どもたちに後ろ髪をいっぱい引っ張られながら、それでもなお、歌を習いたい一心で韓国に行くことを決めた。32歳の春。パンソリ歌手になってやる！というような野望も、民族文化の担い手にならねば！というような使命感も、帰ってきてからどうするのかという計画も全くないまま、ただただ歌を習いたい一心だった。

在日朝鮮人として大阪の同胞密集地で生まれ育った私は、別段そのことを意識せずに幼少時代を過ごした。が、成長するにつけ見えてくるのは厳しい差別状況。就職や結婚に挫折するいとこたちの話に漠然とした不安を抱きつつ大学に進学し

たが、ここで私の人生は180度転換してしまった。同胞の先輩に声をかけられ参加したサークル活動で、今まで避けてきた問題に真正面からぶつかることになったのである。

民族とは何か？在日とは何か？“自分”とは何なのか？・・・避けてきたが故に、得体の知れない怪物となったこの難題たちは常に消化不良を伴い、私を苦しめた。大学の先輩たちは「祖国の民主化・統一こそが在日の幸せにつながるのだ」と叫び、疑うことなく集会や街頭デモに青春を費やした。でも、私にはどうしても自分と朝鮮をそんなに急にイコールにはできなかった。消化不良を少しずつ解消できたのは韓国語を習い始めてからだ。大学2回生の時、先輩と一緒に韓国語を習い始めた。「家まで来るならタダで教える」と言ってくださったKさんは、当時の大阪における民族文化運動の中心人物の一人だった。やがて彼女に誘われて『マダン劇の会』（後の『民族文化牌マダン』）に参加するようになり、私はタルチュムを踊り、チャンゴを叩き、お芝居をし、民謡を歌う・・・といったことにどんどんハマっていった。ある時、民謡のカセットテープを聞いていて、その中の一曲にハッとしたり。母がよく歌うあの歌！「これ、おとちゃんが好きやった」と、洗い物をしながら母が歌うその民謡を、私は幼いころ意味もわからず真似してたっけ・・・そう、私の中にもちゃんと民族は存在していたのだ。ぶれたピントがびったりと合った気がした。“どこで生きて暮らしても、朝鮮人として受け継ぐべき財産を自分も受け継いでいきたい”・・・歴史を学び、民族文化を知り、日本社会のあり方や朝鮮半島の現状を考えることはそのためにある。『マダン劇の会』の活動を通してそう思うようになった。

人生の転機となった韓国留学

「歌、下手になったな」—Kさんに突然そう言われたのは30代になってすぐ。民族講師として教育現場で走り回り、ほとんど毎週のように学校公演

に飛び回る多忙な毎日にすっかり余裕をなくしていた頃だった。彼女の言葉は衝撃的ではあったけれど、その一言が留学を考える大きな契機となった。民族教育運動と民族文化運動・・・今のままではどちらもやりきることはできない。もう一度、学ぶことから始めよう。学びたいものを学ぼう。そう思って決めた留学だった。

“韓国に行ってもまで習うなら、やっぱりパンソリを習いたい”・・・向かった先はパンソリの本場、全羅南道・光州。キャリアバックに衣類を詰め込み、どこに住むのかも決めず、誰に習うのかも知らないまま飛行機に乗った。信じられない無鉄砲さだ。頼った先の劇団『トバギ（地の者）』の代表・朴曉善先生は80年光州を主題にした演劇を作り続けていて、『マダン劇の会』と交流があった関係で留学を相談し、「来い！」と言ってくださった方だ。その言葉一つ信じて向かった光州で私の留学生活は始まった。『トバギ』の小劇場が入っているビルの屋上で、劇団員の子とプレパブ住まいをした。夏は風呂代を節約するため、その屋上の片隅で水道の水で行水し、持っていったTシャツは虫に喰われて穴が開いた。それでも、まったく幸せだった。厳しいことで有名な尹珍哲先生の下に通い、諦めていたパンソリを習える喜びに毎日が輝いていた。ソウルに引越した後は、畑違いの音楽大学院の勉強にずいぶんと苦勞し、論文を仕上げようと貧血を起こしたりもした。

偶然なのか、運命なのか・・・現在の師匠・南海星先生のお弟子さんと出会い、彼女を通してサンコンブに初めて参加したのが2001年の夏。日本から突然やってきた得体の知れない珍客に南海星先生はもちろん、弟子たちもみんな戸惑っていた。「イルボ〜ン（日本）！」サンコンブの間中ずっとそう呼ばれ、胸がチリチリした。日本では「チョーセン」と呼ばれ、韓国では「イルボン」と呼ばれる、このうら悲しい疎外感。それでも、やっぱり幸せだった。分け隔てなく、情熱をもって教えてくださる先生に習い、朝から晩までパンソリのことだけ考える合宿生活・・・。ソウルに戻ってから南海星先生のお宅に週一回レッスンを受

けに通った。下宿では大きな声を出すことができず、近くにあった川に架かる橋の下で、ヘドロの臭いにむせながら、一人で練習した。2002年の春に帰阪。今も、許す限り時間を作って韓国にレッスンを受けに行く。夏のサンコンプはこれまでに16回参加してきた。皆勤は弟子の中で唯一私一人だ。

師匠の愛

愛して止まない私の師匠、南海星先生は2012年に韓国の国家重要無形文化財第5号パンソリ「水宮歌」の技能保有者に認定された大名唱だ。1935年全羅南道・光陽市の出身。唱劇団時代には「南蓮花」と呼ばれていたが、ソウルで主に活動するようになって「南海星」と名乗るようになった。1960年、8年間活躍した唱劇団生活を清算し、名唱・金素姫先生に師事。その後、名唱・朴初月先生に師事して「水宮歌」「興甫歌」を受け継いだ。1970年国立唱劇団に入団し、これまでに磨き上げたソリと演技で名を挙げ、一躍人気者となった。特に唱劇「水宮歌」ではウサギ役を演じたのだが、今でも「南海星のウサギを超える役者はいない」と言われるほどで、当時の人気は有名な芸能人に負けず劣らずだったという。1976年にはプリタニカホールで「水宮歌」完唱公演を行い、実力を認められたことで名唱の仲間入りをし、1985年南原春香祭の国楽競演大会パンソリ部門において大統領賞を受賞。1981年には国立唱劇団を退団、『南海星国楽研究所』を設立し、現在も後進の育成に力を注いでおられる。

2006年に初めて「水宮歌」の完唱公演を行った時、南海星先生は私にこう言われた。「在日のあなたにしかできないソリをしなさい」－その言葉がそのまま私の目標になった。また、雑誌のインタビューに答えて、先生はこう話されたことがある。「38歳の頃、子ども3人を残して夫に先立たれ、一人で子どもを育てないといけなくなりました。パンソリが今みたいに知られてはおらず、おまけに

当時全く無名だった私はお金の稼ぎようがなくて本当に苦勞しました。それで、一大決心をして100日修行をすることにしたんです。山に入って100日間、朝から晩までひたすら歌う……。ろくに食べもせずに無茶な練習をしたおかげでお腹は脹れあがり、手足は浮腫んで、とうとう倒れてしまった。麓の村の保険所に耕運機で担ぎ込まれて、栄養剤を注射してもらいましたが、かわいそうに思ったのか、栄養剤注射もタダにしてくれて……。あの時は本当に惨めで、どうしてこの道を選んだのかと初めて後悔しました。でも、後悔はその時の一度だけ。私はもう一度生まれ変わってもきつとソリの道を選びます」－私も生まれ変わってもきつとこの道を選ぶだろう。

突然訪ねてきたどこの誰かも分からない在日の私に「自分の民族を忘れずに、海を越えてまでソリを習いに来てくれてありがとう」とおっしゃった師匠。「どんな天才も練習をした者、努力をした者には勝てない」と、人間文化財になった今も自分の練習を欠かさない師匠。上手く歌えると「アイゴ～よくやったね、私の子」と満面の笑顔で抱きしめてくれる師匠。南海星先生と出会えたことが私にとって人生最大の幸運だと思っている。

パンソリという言葉

韓国の伝統芸能「パンソリ」は、一人の唱者が太鼓の伴奏に合わせて、語り（アニリ）と歌（チャン）で物語を紡ぐ語り芸のことをいう。

パンソリの「パン」は「多くの人が集まったなかで物事が繰り広げられる場」という意味を持つ。つまりパンソリは「設けられた場（パン）で行われるソリ」という意味になる（空間的概念）。また、紡ぐ物語の歌のパートがリズムごとの板（パン）で構成されると解釈するなら、「パン（板）の流れに沿って歌うソリ」という意味になる（音楽的概念）。また、「シルム、ハンパン（相撲、一番）」と呼ぶように、「パン」を始まりと終わりを持つ時間的な単位と解釈するなら、「初めと終わりのある一定の

物語（パン）を語るソリ」という意味になる（時間的概念）。

「ソリ」という言葉は唯一パンソリにのみ使われる。韓国の伝統音楽には声楽を表す言葉として「ノレ」と「ソリ」があるが、民謡、歌曲、歌辞、時調、雑歌などはすべて「ノレ」と表現する。「ノレ」は韓国語では「歌」の意味だが、これと比べ「ソリ」はこの世のありとあらゆる「音」を表す。川を流れる水の音、遠くまで響く鐘の音、澄んだ鳥の鳴き声、力強い太鼓の音、楽しそうな人の笑い声、胸が締め付けられるような慟哭……。表現範囲が無限ともいえる「ソリ」は、だからこそ物語の情景や登場人物の感情を表現できるのであり、劇的な展開を可能にするのである。つまりパンソリは「多くの人が集まった場で、始めと終わりのある一つの物語を、一人の唱者が太鼓の伴奏に合わせ、変化するリズムの流れに沿った歌を織り交ぜながら、物語の情景や人の感情までも語り伝えようとする演唱芸能」だといえる。

パンソリの演目

古典演目として現在も演じられているパンソリは「^{チュニヤンガ}春香歌」、「^{シムジョンガ}沈清歌」、「^{フンボガ}興甫歌」、「^{スダンガ}水宮歌」、「^{チョッピョソガ}赤壁歌」の5マダンである。“マダン”とはパンソリ作品一編を指す言葉であるが、朝鮮時代後期の両班・宋晩載（1788-1851）が著した『観優戯』にはパンソリは12マダンあったと伝えている。現在は、パンソリの辞説（台本）を研究・整理した^{シンヂェヒョ}申在孝（1812-1884）の『パンソリ辞説集』の6マダンが台本として残っており、^{イソニユ}李善有（1873-1949）は「^{ピョンガンスエ}ピョンガンスエ歌」の口伝が途絶えたため、『^{オソク}五歌全集』で5マダンとしている。^{チョンノシク}鄭魯湜（1891-1965）の『朝鮮唱劇史』は宋晩載の『観優戯』を根拠としている。

	宋晩載	申在孝	李善有	鄭魯湜
	12 マダン	6 マダン	5 マダン	12 マダン
1	春香歌	春香歌	春香歌	春香歌
2	沈清歌	沈清歌	沈清歌	沈清歌
3	興甫歌	興甫歌	瓢打令*	興甫歌
4	水宮歌	兎鼈歌*	水宮歌	水宮歌
5	赤壁歌	赤壁歌	華容道*	赤壁歌
6	ピョンガン スエ打令	ピョンガン スエ歌	—	ピョンガン スエ打令
7	裊裊將打令		—	裊裊將打令
8	江陵梅花傳		—	江陵梅花傳
9	雍固執		—	雍固執
10	チャンキ打令		—	チャンキ打 令
11	曰者打令*		—	ムスギ打令*
12	カッチャ神 仙打令*		—	淑英娘子傳*

* 演目名は異なるが内容は同じ。「興甫歌」＝「瓢打令」、「水宮歌」＝「兎鼈歌」、「赤壁歌」＝「華容道」、「曰者打令」＝「ムスギ打令」、「カッチャ神仙打令」＝「淑英娘子傳」

パンソリが最初に生まれた時はきっと内容も表現も単純なものだったと思う。が、唱者が観衆たちの要求を満たすために鍛錬を重ね、内容と表現がどんどん豊かになったのではないだろうか。パンソリの作られ方はさまざまで、まず長い間伝承されてきた説話を土台にして創られたパンソリがある。「水宮歌」「興甫歌」などがそれだ。次には「沈清歌」「春香歌」「ピョンガンスエ歌」などのように、一つの説話を土台にはせず、いくつかの説話が合わさってパンソリの台本として創られたものもある。「赤壁歌」は歴史小説『三国志演義』の一部をパンソリとして改作したものだ。また、朝鮮時代の古典小説の中には元々はパンソリではなかったかと思われる作品もある。両者には小説をパンソリに改作したり、パンソリを小説にしたりといった相互補完性があるので、その可能性はいくらかでもある。「裊裊將打令」「淑英娘子傳」などは小説に根拠を置き、パンソリとして再現された

と思われるものだ。また、パンソリは民謡や雑歌、詩などを受容し、故事成語や漢詩で装飾された。支配階級である両班が聴衆となったことで彼らの要求に合うように、いわば両班的な表現が多く加わったのである。

こうして、パンソリはジャンルの的には複雑な面を持ちながら、異なる階級どうしの重なりやぶつかり合いを経験する。つまり、そもそもパンソリが持っている民衆的な性格に支配階級的な性格を受け入れることで、そこには対話が生じ、パンソリの場はさまざまな階級層の躍動的な意思疎通の場となったのである。

2003年にはその独創性と優秀性が認められ、ユネスコ第2次「人類口伝および無形遺産傑作」に選定された。

パンソリが語り継がれる理由

私は師匠・南海星先生から「水宮歌」、「興甫歌」、「沈清歌」の三つを学んだが、それらに共通し、語り歌うたびに何度も考えさせられるテーマがある。それは“家族”について。そして“許す”ということについて。

「興甫歌」は古典演目のうちでも唯一韓国の昔話を題材にした作品だ。いじわるな兄ノルボに家から追い出された心の優しい弟フンボは、偶然助けたツバメが落として行ったひょうたんの種を植え、中から出てきた宝で大金持ちになる。羨んだノルボはわざとツバメの足を折り、助けるふりをしてひょうたんの種を手に入れるが、中から出てきた鬼に懲らしめられる。しかし、散々な目に遭った兄ノルボを弟フンボが助け、兄弟は仲良くともに暮らす……という、誰もが知っている昔話。パンソリでは、兄に追い出されたフンボの悲しみを界ゲ面ミョン調チョという哀愁を帯びた独特な節回しで表現したり、ひょうたんを割る場面をフィモリという軽快で楽しげなリズムで表現する。観客の皆さんと泣いたり笑ったりしながら、いつも思う。私がフンボならノルボを許すだろうか？兄ノルボに棍棒

で滅多打ちにされた弟フンボがそれでも最後は兄を許して助けるというのは、家父長制に基づいた長男重視の悪習のせいなのか、単にフンボがお人好しただただけなのか、それとも……。

今年80を迎える私の父には兄が二人いた。父は長兄と仲違いをし、縁を切ったも同然となって、何年も会わずにいるうちに伯父はこの世を去った。「兄貴のことはね、ぼくは今でもよう許さんねん。でも、会いたいと思うことも……あるな」そっぽを向いて話す父の淋しそうな目の色が忘れられない。

人は誰しも、今となってはどうしようもできない、でもどうにかしたい、切ない願いを持って生きている。私はそれが韓国の精神文化の根っこにある情緒“恨”^ハだと思う。パンソリが250年もの間、人々に愛されてきた理由はもちろん歌や語りの素晴らしさもあるが、それだけではない。人々はパンソリに出てくる登場人物に自分を重ね、心の底に重く澱んだドロを泣いて笑って洗い流して“恨”を解くのだ。「それでもがんばって生きていこう！」人が人として生きていく力を得られる何か……それが“古典”として、“伝統”として受け継がれていくのだと思う。

「今日のソリは今日限り」

“一人前になるには10年かかる”と言われるパンソリだが、南海星先生に弟子入りして10年が過ぎるころ、私にも少し変化が訪れた。周りから「風邪を引いたのか」「声枯れてるね」などと言われるようになり、サンコンブ中も、いつも食事を作ってくれているおばさんに「急に上手くなった」と言われた。それでも、南海星先生はレッスン中にチュイムセ（合の手）を入れてくれることはなく（うちの師匠は本当に上手いと思った時しかチュイムセを入れない）、周りの称賛はほぼ聞き流していた。が、昨年のサンコンブ。完唱公演に向けて、鼓手と少し合わせることになったのだが、歌い進めるうちに南海星先生からチュイムセがパン

バン飛び出し、結局2時間半の通し練習になってしまった。大阪では、小さい子が大きい子に混じって鬼ごっこをする時、鬼に捕まっても捕まっていないことにしたりする。この大目に見てもらった小さい子のことを“ごまめ”というが、この通し練習が終わった瞬間、“もう自分はごまめじゃない”と、そう感じた。それまでは、食事会などで南海星先生の隣にいると否応なしに「在日3世」と皆に紹介され、当然の如く「一節歌ってみろ」ということになり、突き刺さるような視線に耐えて歌い終えると「ふ～ん・・・まあ、頑張ってください」といった反応が返ってきて、“ごまめ扱い”される悔しさをずっと飲み込んできた。でも、これからは違う。これまでの努力に自信を持って、甘えることなく、一人前の^{ソリ}唱者として、履修者の一人としてしっかり歩んでいく心構えだ。

“幼いころパンソリに出会っていれば・・・”と何度も思った。太刀打ちできないような技量と声量、素晴らしいパフォーマンスを繰り広げる韓国の唱者を目にするたび、羨ましく、恥ずかしく、激しい自己嫌悪に何度も陥った。しかし今は、“自分にしかできないソリ”を作っていきたいと思っている。“安聖民パンソライヴ”にほとんど毎回足を運んでくださるファンの方からこんなことを言われたことがある。「この間、本場の全州で観てきた。ほんとにすごく上手かったんだけど面白くなかった。私は歌われてる情景が目に見えなくなるような安聖民さんのパンソリが好きだな」・・・きっと私にしかできないソリがあると信じている。“声”についても然り。韓国語のリズムを活かす複雑な節回し、喜怒哀楽を肌で感じることでできるトーン、圧倒的な声量、濃淡のあるさまざまな色と艶・・・。私には、子どもの時に入門した弟子たちとの間に埋めがたい距離がある。成長期に“声”を作ってきた年下の姉弟子が正直羨ましかった。でも今は、私には私の“声”があると思っている。以前、私が「沈清歌」を語り歌った時、目の見えない父を想う娘の切ない“声”が演じる者と観る者の心に染み入り、両者の境を取っ払って、

その場を一つにしてしまったのを感じたことがあった。この“声”をもっともっと磨いていくことが大事なんだと、今はそう思っている。

「“上手い”ってどういうこと？」・・・私のマル秘台本のあちこちに書いてある落書きの中で一番たくさん出てくる文言。長い間の自問自答のファイナルアンサーはこれ。“上手い”とは、技術的に節回しのテクニックがすごいとかいうことではなく、身がよじれるような切なさを、胸が裂けるような悲しさを、心震える喜びを、声ひとつで表現できるということ。パンソリの旋律は全羅道の巫俗音楽を基にしている。朝鮮時代後期、世襲巫が歌う叙事巫歌の伴奏を担当したファレンイ（楽士）たちの多くは経済的な理由から曲芸師やソリクンとしても人々の前に立った。“ソリ”とは本来、ムードン（巫覡）が死に逝く者を弔い、人々の健康や幸せを願う“祈りの声”であった。だからこそ、私たちはその声に癒され、涙し、深呼吸してしまうのだ。・・・“上手く”なりたいと思う。

「在日売りにしていい気になるな」とネットで中傷され、ショックを受けたことがある。親友が反撃してくれたおかげで心の傷は大きくなりませんが、私は在日売りをするつもりはないし、反対に在日を背負うつもりもない。“地球上のどこに暮らしても、先祖が大切にしてきたモノを自然に受け継ぎ、秘密やごまかしのない、人としてまともな生活をしたい”と思っているだけだ。朝鮮人として日本で生まれた私には、そう生きていくにはどうもオカシイ状況が一方にある。先祖の知恵がいっぱい詰まったパンソリを受け継ぎ、人としてまともな生活をしようとする人々と繋がって、このオカシイ状況に一石投じたいと思っている。故郷に一度も帰れなかった祖父母の悲しみを、将来を案じて子どもを日本の公立学校に通わせることにした両親の葛藤を、自己矛盾に苦しんだ若き日の自分の苦しみを、私は私のやり方で表現していこうと思っている。実子のいない私ではあるが、子どもは星の数ほどいる。民族学級卒業生たちの中には親になっている子らも少なくない。4

世、5世の孫たちにもパンソリの豊かさを伝えたい。

「今日のソリは今日限り」・・・舞台に出て行く瞬間いつも自分にそう言う。同じ「水宮歌」を語ったとしても、まったく同じ「水宮歌」は二度とできない。一つ一つのソリをこれからも大切にしていきたい。

安聖民 プロフィール

1966年大阪市生野区生まれ。私立関西大学文学部史学・地理学科卒。

大学卒業後、公立小学校の民族学級講師として在日同胞の民族教育に献身するかたわら、『民族文化牌マダン』の活動においても中心的役割を担う。

1998年より韓国に留学。漢陽大学音楽大学院国楽科修士課程を修了。

国家重要無形文化財第5号パンソリ「水宮歌」技能保有者・南海星先生に師事し、2016年履修者となる。

2013年第40回南原春香国楽大典・名唱部にて審査員特別賞受賞。

年4回定期公演「安聖民パンソリライブ」(2017年3月現在 vol.27)の他、落語家・桂花團治や狂言師・安東伸元など、日本の伝統芸能との共演も多い。2012年からは浪曲師・玉川奈々福、作家・姜信子と語り物芸ユニット『かもめ組』を組み、東京・大阪・福岡など各地で浪曲とパンソリの共演活動を展開している。2016年大阪大槻能楽堂にて「水宮歌」完唱公演を行い、好評を博した。

また、大阪産業大学、立命館大学で朝鮮語の非常勤講師を務めている。

キルチャビ

特別講演会（「『新・韓国現代史』をめぐって」）を終えて

文京洙（立命館大学）

ちょっと勉強好きな喫茶店のマスター、学部を終えて大学院に進学した頃の私の将来イメージはそんな感じであったかもしれない。1970年代後半のその頃では、フルタイムの大学教員となった在日朝鮮人はごく希で、経済や歴史を専攻する先輩の多くは、飲食店などの自営業を構えながらの、いわゆる在野の研究者に甘んじていた。「研究者としての自立」は私たちの世代の在日朝鮮人にとってはまだまだ高嶺の花の時代であった。しかも、大学院生と言えば聞こえはいいが、実態はフリーターのような生活であり、研究に振り向ける時間も限られていた。

一方で私が大学院生活を送った70年代から80年代の前半にかけての時期は、維新体制から光州事件を経て新軍部政権へと至る時期であり、そういう本国の権威主義政権といかに向き合うのが、日本にいる私たちにも深刻に突きつけられるような時代であった。他方で私たち戦後世代の在日二世が日本の地域社会にあって就職や結婚、子育てといった日常的な課題に直面するようになったのもこの頃であり、従来の本国志向的な運動とは次元を異にする、在日朝鮮人運動の新しい流れも台頭していた。私たちを在日朝鮮人の研究も、学問としてのディシプリンや方法論以上に、そういう時代にまつわる課題や取り組みに沿ったものならざるを得なかった。

大学院での修業時代を経て、拙いとはいえ、『現代韓国への視点』（鄭章淵との共著、大月書店）など最初の一連の論文や著作を世に問うことになる

のは1990年を前後する時期で、齢40に届く頃になっていた。その後、2015年に刊行された『新・韓国現代史』に至るまでの私の研究や取り組みは、主に三つの課題（①韓国の政治社会、②済州島四・三事件を中心とする現代史、そして③在日朝鮮人問題）を軸にすすめられてきた。昨年（2016年）11月19日、国際高麗学会日本支部の皆さんのご厚意で退職記念の特別講演会をもったが、そこでは主として韓国の政治社会に関連する私の研究の歩みについて語らせていただいた。学会の皆さんの暖かい心遣いに心から感謝したい。特別講演会の内容とも重複するが、以下、このキルチャビの場を借りて、私の韓国政治研究の、この間の拙い足取りを、3つの時期に区切って纏めてみた。

『現代韓国への視点』（1991年）の頃

私の研究者としての歩みの出発点となる1990年を前後する時期は、冷戦体制の崩壊という世界的な転機であるとともに、1987年の民主化を経て韓国社会の構造変化が進んだ時代であった。1980年代の韓国経済は世界経済の好条件（いわゆる三低景気）にも恵まれて高度成長が一段とすすみ、製造業部門の労働者の力強い成長とともに都市の新中産層も拡大して韓国社会は先進国型の都市型社会の様相を深めつつあった。一方で光州事件を経た1980年代は、韓国でマルクス主義が復権して、民族派（いわゆるNL派）と階級派（いわゆるPD派）の台頭を軸とする思想や社会運動の

一大転換期であった。1987年の「6月民主抗争」の原動力となったのも、当時大学のキャンパスを風靡していたNL派を中心とする学生運動と、民主化を求める新中間層だったといえる。

しかし、当時の「運動圏」の変革理論は、NLであれPDであれ、ロシア革命や中国革命を水源とする、いわば「農村型」のそれにはかならなかった。70～80年代の高度成長を経て「都市型」の特徴を示しつつ韓国社会は、力任せの「機動戦」の時代から市民社会のヘゲモニーをめぐる「陣地戦」の時代へと移っていた。

日本でのマルクス主義政治学や国家論では、アルチュセール (Louis Pierre Althusser) やプーランツァス (Nicos Poulantzas) といったネオ・マルクス主義の議論が主流となっていて、私自身もそういう流行りの議論にかぶれていた面も少なくなかったであろう。いずれにしても、私のこの頃の議論のポイントは、階級闘争や民族運動を強調する韓国の「運動圏」の議論に対して、合意や同意をめぐる競合の場としての「市民社会」の重要性を強調するものであった。もちろん、「市民社会」でのヘゲモニーの問題を提起したといっても、いわゆる「変革の主体」が労働者・農民といった「基層民衆」から「新中産層」に変わったと言っていたわけではない。大切なのは、階級や階層に関わりなく、民主主義や人権という近代的な価値を宿した「市民」としての主体性の発揮のされ方であった。そういう考え方は、在日朝鮮人をめぐる議論においても貫いたつもりである。

韓国政治の分析に「市民社会」という観点を導き入れたことへの反応はさまざまであった。そもそも韓国には「市民社会」などあり得ない、とか、階級闘争や民族運動の意義を否定するある種の「修正主義」であるとの批判も少なくなかった。ありがたかったのは、滝沢秀樹さんがご自身の労作『韓国の経済発展と社会構造』(社会評論社、1992年)の序文で『現代韓国への視点』に詳しく触れただけのことである。滝沢さんは、「市民社会」という提起に基本的な共感を示されつつも、私の議論が「民衆」の個別具体的な性格への分析を

欠いているとされた。そのうえで「不動産投機や“封筒”の飛び交う」韓国の新中産層の世界への不信を述べられた。

もっともな批判であった。私が初めて韓国の土を踏んだのは1994年であり、1990年を前後する時期の私の議論は、まさに「個別具体的」な韓国社会の日常への経験を明らかに欠いていた。

『韓国現代史』(2005年)の頃

冷戦が崩壊してグローバル化の進展した1990年代以降の現代は、韓国で「巨大談論」(リオタール Jean-François Lyotard のいう「大きな物語」)と言われたグランドセオリー(マルクス主義を典型とするような、一定の総合性や体系性を備えた価値観や世界観)の揺らぎが決定的となる。とはいえ、近代の制度や思想の達成のすべてを嘘や欺瞞だとするポストモダンの物言いや、出口やオルタナティブのない議論としてこの頃ではすでにひと頃の勢いを失いつつあった。そういう、いわば「海図なき時代」の社会科学の研究者の救いとなったのがハーバマス Jürgen Habermas やアーレント Hannah Arendt の公共性や公的領域をめぐる議論だったように思う。

いま、この短い文章で、この頃の私の心境の移ろいやものの見方の変化を語ることはとうてい出来ない。いずれにしても2000年を前後する頃には私自身も、すでにマルクス主義の論理や世界観をものの見方や考え方の拠り所とするのを止めていた。ハーバマスは、自身を「最後のマルクス主義者」(クレイグ・キャルホーン編『ハーバマスと公共圏 未来社』)だと述べているが、ハーバマスにとっての市民社会は、一言で言えば対等で開かれた自由な討議の空間であり、階級対立を前提とするものではない。例えば、元祖ネオ・マルクス主義ともいえるグラムシの市民社会があくまでもこの「階級対立」を前提としたヘゲモニー対立の空間であるのとは対照的である。国家、市場、市民社会の3要素からなるハーバマスの近代社会概念は、市民社会での尽くされた議論(熟議)が、権

力の論理で動く国家や、利潤の論理で動く市場に歯止めをかけ、社会の民主化や理性化を導くというものである。社会変化の原動力となるのは階級闘争ではなく、あくまでも市民社会の熟議にほかならない。

こうした考え方は、高度経済成長や民主化を経て財閥企業が国家から相対的に自立し、市民社会が成長した90年代の韓国社会の説明に極めて適しているように私には思えた。社会運動の次元でも、91年のいわゆる「5月闘争」の敗北を契機に、運動圏の「巨大談論」の時代が衰え、参与連帯などの市民運動が社会運動の主軸をなし始めていた。インターネットを中心とするコミュニケーション構造の転換ともあいまって開かれた熟議を前提とする市民社会の異議申し立てが社会の民主化を導き、金大中・盧武鉉の進歩派政権の時代をもたらす原動力ともなっていた。

2005年に刊行された『韓国現代史』（岩波新書）は、ハーバマス流の市民社会や公共圏の議論をベースに書かれた本であった。一方でこの本は、済州島や光州といった現代韓国の歩みを通じて周縁や周辺として追いやられた地域をクローズアップする構成となっている。この時期に私が行き着いた「公共圏」に関する考え方は、済州島四・三事件に関連するそれまでの取り組みや研究とも交錯し、2007年に刊行された『済州島現代史 公共圏の死滅と再生』（新幹社）は、その交錯を通じて得られた枠組みにもとづいて書かれたものである。石牟礼道子が「市民といえば景色が急にうらぶれる」と言ったように、市民社会の論理は、その下積みとして周縁化された人々の声に十分に耳を傾けない、という批判がいつも提起されてきた。一定の理念や世界観に立った上からの発想が厳しく問われつつあるなかで、「下から考える」ということが重視され、私自身も折に触れてそうした発想の転換を強調するようになっていた。けれども、一方で周縁や下積みの人々の声なき声の絶対視や跪拝も禁物なのである。問題は「戦争や大量虐殺によって傷つき周縁化された人びとの声を、公共的な議論の場にいかによみがえらせることが出来る

か」（『韓国現代史』あとがき）ということであり、それがこの頃に行き着いた私なりの結論でもあった。

『新・韓国現代史』（2015年）の視点

『韓国現代史』には、解放から戦争に至る殺戮の時代を起点に、強権支配の時代の社会変動、さらには学生・市民がキャンパスや街頭で強権支配に挑んだ“抗争”のときを経て、最後は進歩派の政権の下で民主主義や人権が謳歌され、過去が清算される2000年代の前半までが書き込まれている。その頃は、歴史のありのままのスペクタクルを、まるで起承転結を辿ってハッピーエンドに終わる物語のように語ることが出来た。刊行からほぼ10年で9刷り、私の本としては全く異例の3万部近い発行部数を記録したのも、この本が対象とした韓国現代史そのものの「物語」的な特質によるものであったであろう。この頃の私は、人間の社会は合理化され・理性化していく、その合理化・理性化は多少の曲折はあっても基本的には不可逆なように感じていたところがある。私の勝手な理解であるが、そもそもハーバマスの議論そのものが、人は里を尽くして議論すれば、いずれは正しい結論が得られる、という、一種の「性善説」を根底においているように感じていた。

だが、それから10年、時代の逆流が顕著となった。反共を盾に人権や民主主義を抑圧してきた旧時代の潮流はしぶとく生き続けていた。盧武鉉政権は、グローバル化にともなう社会的リス構造（就労をめぐる困難を軸に未婚者の増加、離婚率の上昇、出生率の低下、家庭崩壊、自殺、ホームレスの急増など、社会全般の病理と両極化）の拡大・深化に歯止めをかけることが出来なかった。そのことが保守政権の復活を許し、息を潜めていた旧時代の亡霊たちを一挙に蘇らせてしまったのである。

1990年代の社会運動の主役となった市民運動も2000年代の半ばにはその勢いに翳りが見え始め「市民運動の危機」が叫ばれるようになっていた。

そもそもグローバル化による社会的リス構造の問題は、90年代のような異議申し立て型の市民運動では解決困難であった。市民運動が単に異議申し立てや監視にとどまるのではなく、ときには、政府・自治体や企業と協力しながら社会問題の解決にじかに乗りだすことが求められるようになっていたのである。市民社会が公共財・社会サービスの供給体制の一翼に積極的に参加することが求められるようになったことは、ハーバマス流の公共圏のとらえ方や社会理論の想定をも超える事態でもあった。そういう文脈で協同組合や社会的企業などからなる「社会的経済」の方向が疲弊する地域社会の再生のカナメとして意識されるようになった。90年代には異議申し立て型の市民運動を象徴する人物とも言えた朴元淳の2000年代以降

の歩みがそうした市民運動の展開を象徴している。そしてグローバル時代に特有な市民社会のそういう機能や位置づけの変化を盛り込むことも『新・韓国現代史』の課題の一つであった。

いま、市民社会とのまっとうなコミュニケーションを拒み、ごく内輪の側近たちによる政治の私物化をほしいままにしてきた朴槿恵政権が劇的な末路を迎え、政権交代が現実の日程に上っている。韓国的保守やニューライトは、根強い権威主義やネポティズムにまみれた非合理的な体質が明るみに出されて、解体的危機に瀕している。だが、新政権が「進歩」であれ「中道」であれ、市民社会の“文法”に忠実にグローバル時代の問題解決の道筋を見いだせない限り、盧武鉉時代の二の舞となるのは火を見るより明らかである。

書評

玄武岩『「反日」と「嫌韓」の同時代史』

〔勉誠出版、2016年〕

鄭雅英（立命館大学）

メディア論あるいは政治社会学といった観点から在日コリアン、中国朝鮮族、ロシア極東やサハリンのコリアンの存在とこれらの人々のネットワークを解説し、国家の境界を超える「リベラル・ナショナリズム」を精力的に問い続ける玄武岩が、「最悪の日韓関係」が立ちあらわれたまさに今日、日韓双方が歴史認識や戦後補償問題を先送りにして成立させた「六五年体制」（日韓条約体制）を転換させることで日韓が「共通の利益を創出していくパートナーシップを再生する将来のビジョン」、つまり「反日」と「嫌韓」の連鎖を断つ道筋を見出すことを目指して著したのが本書である。

序章で玄は、ナショナルヒストリーの「戦後史としての六五年体制」を相対化するための視座、考え方として3つの枠組みを提唱する。すなわち①境界のポリティクス、②方法としての歴史問題、③サンフランシスコ体制のソフトパワーの転換であり、これらは何やら小難しく感じさせるフレーズである。しかし引き続き各章のケーススタディを読み進めると、国家権力の論理をひたすら優先させる日韓両政府によっていわば共犯的に編み上げられた歴史と人権不在の両国国際関係が、「ええ？こんな史実があったのか!!」という数々の衝撃を伴いながら眼前に浮かび上がることになる。

例えば一章では、長崎の大村収容所と並行して、解放後の韓国で植民地期の「内鮮結婚」に敗れて帰国を目指す日本人女性や「李承晩ライン（あるいは平和線）」を突破して拿捕された日本漁船員を収容するために運用された釜山収容所の存在が明

らかにされる。釜山に収容された在韓日本人女性に対し、日本の外務省引揚課は「鮮籍日系婦女子」は純然たる日本人ではないという観点から入国を拒み、1950年代初期に日本人女性収容者は600人に達したという。一方、大村収容所には外登令や刑法に違反した在日朝鮮人数百人が押し込まれており、韓国政府は「密航者」の身元や「北韓間諜」を疑い、その多くの入国を拒んだ。1950年代半ばには膠着する日韓会談を背景に、大村収容所は在日余刑者や「密航」朝鮮人の収容者で満杯になる一方、釜山収容所には長期抑留された日本人漁船員があふれ、収容者の「相互保釈」をカードにした日韓政治交渉が繰り返られる。日韓双方とも敗戦／解放後の「境界」の構築という課題に向け、好ましからざる内国人外国人を包摂・排除する「もう一つの境界」＝外国人収容所を設置するという合わせ鏡のような手法を用いたのだ。韓国籍を持つ日本人を母親とし、さらにごく最近になって自分自身が出生時には日本国籍だった（2歳時に母親とともに韓国に「帰化」した）ことを知った評者にとっては、ひりひりするほどの現実感から逃れたい内容なのだが、ここでは「境界」の越境者を排除して成り立った日韓「六五年体制」がその後の日韓諸問題の基盤にあることを明快に説明している。

歴史認識問題では、韓国における広島・長崎の原爆体験（三章）、金大中拉致事件（四章）、中国残留日本人（五章）、サハリンの日韓「残留者」（六章）など、不意を突かれるほど多様なテーマから

接近しつつ「反日」と「嫌韓」の境界を乗り越えようとしていて、筆者の視座の広角度と柔軟さを感じさせる。例えば原爆や空襲被害者、朝鮮人BC級戦犯、帰国した中国残留日本人らが国家の責任を追及する訴訟を起こしても、それらは「戦時における「一般の犠牲」として国民がひとしく受任しなければならないもの」という国家利益優先の「戦争被害受忍論」で悉く棄却されてきた。戦時強制動員や慰安婦問題も全く同じ位置づけにあるが、だからこそ、同じ「受忍論」の壁を共有する日韓戦争被害者のトランスナショナルな連帯の可能性を筆者は指摘する。それを阻むのは、日本が「唯一の被爆国」だとするような戦争被害もナショナル・ヒストリーに回収される日本のナショナリズムであり、一方でまた日本人の戦争被害をめぐる言説に対し「加害者意識の欠如」という自らの歴史認識のフレームで裁断してしまう韓国ナショナリズムの存在である。

筆者によれば、韓国では南北関係を背景に現在もなお広島・長崎の原爆投下を正当化する「原爆解放論」が優勢で、1980年代以降に盛んになった反戦反核運動も、核問題は「民族解放」=反米の課題となり、「そこには広島・長崎における原爆の非人道性や惨状というリアリティはなく」「ヒロシマ／ナガサキと向き合いつつも、それを取り込むことに失敗した」のだという。そうしたなかで、韓国人原爆被害者は「日本では「唯一の被爆国(民)」という神話を克服し、韓国では「原爆解放論」を乗り越える」、つまり日韓の二項対立を超越する重要な地点に位置していると説く。日本の戦後民主教育がまだ優勢の1960年代に子供時代を過ごした評者は、家にあった『星は見ている—全滅した広島一中一年生父母の手記集』(1954年刊)や1967年にアメリカ政府が日本に返還した広島長崎原爆被災記録映画(69年ころにテレビで放映)を見て、脳髓深く広島長崎の恐怖と悲惨さを刻みつけられた。しかし、長じてから痛感する「加害者意識欠如」という学校で習う平和主義に背反する日本の現実との整理がなかなか付けられないできた。どちらかが正義、と割り切れなかったからである。日

韓の平和運動が「断絶した記憶を包みなおす創造的实践としての「平和の文化」をもって、もう一つの和解の場を築く基盤にすることもできるはずだ」という筆者の言は、分裂する平和議論の深いところに届く。

七章は在日の名前をめぐる論争、つまり「通名使用」の強制と「本名使用」の強制にそれぞれ異議を申し立てた異なる二件の訴訟を通じ、アイデンティティの「境界」と脱境界を探る。八章では、米日韓軍事同盟を基軸とした「サンフランシスコ体制」が、軍事同盟関係というハードパワーは維持しつつも、経済的影響力や歴史認識というソフトパワーを通じて対立的様相が展開され、日韓の歴史問題をアメリカが仲裁したりアメリカを「記憶をめぐる戦場」としたりする状況を提示する。従って、ソフトパワー化したサンフランシスコ体制下で慰安婦をめぐる2015年12月の日韓合意が根本的解決を生み出すわけがなく、筆者はここでも国家権力から離れた日韓市民社会のトランスナショナルな連帯に希望を託す。ただし、本章では「ソフトパワー化」の説明が弱く、理解に苦勞するところがある。最終の九章では、朝鮮植民者だった自分自身を厳しく問い続けながら民衆同士が自律的に出逢い交わり連帯関係を作り出す契機を追い求めた森崎和江の、思想的営為をさぐる。森崎の「からゆきさん」を「帝国の慰安婦」の前史として「安易に位置付けた」朴裕河への評価は、新鮮である。

「反日」と「嫌韓」に引き裂かれる日韓をテーマにしながらも、国家や民族間、あるいは同じ民族の内側にさえ幾重にも築かれた境界をいかにして越境するのかをとことん問い詰めたところに、本書の真骨頂がある。日韓のみならず、もはや全世界のあらゆる空間と民衆間に壁=境界が張り巡らされようとしている時代に、本書の問いかけは重厚な響きをもつ。同時に、本書が扱う個別テーマの興味深くも豊かな広がりには刮目に値し、次の授業の参考材料として大いに活用(流用?)する意欲さえ掻き立てることも付け加えよう。

最後に、日韓のアニメとアニメソングを題材に

双方の大衆文化の関係史を追った第二章は、秀逸である。詳細は本書に譲るが、評者も幼少時代の記憶に刻まれているテレビアニメ『黄金バット』と

『妖怪人間ベム』が、実は日韓アニメ文化の交錯点で生まれていたという事実に、眩暈のような感慨を覚えたのだった。

書評

高史明著『レイシズムを解剖する—在日コリアンへの偏見とインターネット』

〔勁草書房、2015年〕

鄭栄鎮（大阪市立大学）

本書は、「歴史的経緯にも由来して長年日本に住居する者が多く、今なお偏見の対象となっている在日コリアンに対するレイシズムについて解明すること」（p.7）を目的とした書である。

レイシズムとは、本書からいえば、「人種偏見 racism と民族偏見 ethnic prejudice の総称」（p.20）であり、本書が研究の枠組みとして採用しているのは、アメリカでの黒人に対するレイシズム研究から生まれた、他集団を自集団より劣っているとする「古典的レイシズム」と、差別はなくなっているにもかかわらず努力不足の責任を差別に転嫁して抗議し、不当な特権を得ているとする「現代的レイシズム」の新旧のレイシズムである（p.4）。

さて、「レイシズム」と聞いて、昨今で在日朝鮮人に対するものとしてまず思い浮かぶのは「ヘイト・スピーチ」であろう。「特別永住資格」や「生活保護優遇」など根拠なき「在日特権」という虚構をネット空間と現実空間に流布し、また、現実空間では街頭にて在日朝鮮人をきわめて口汚く罵ることなどによって、社会問題化したのは周知のとおりである。それらに対して、まずはカウンター行動が行われ、それらに押されるように、大阪市では対策条例が、国では対策法が制定されるに至っている。だが、これらの条例等はヘイト・スピーチへのなんらかの「対処」を示したものはあるが、その制定時に「在日特権」という虚構そのものが否定されるには至っていない。したがって、これらを根拠としたレイシズム、ヘイト・スピーチが垂れ流され続ける危険性は皆無ではな

い。

本書で「コリアンに対する差別・偏見は、多くの日本人にとっては目に入らない、とっくの昔に解決された問題であったとしても、コリアンとして日本で生きる人びと（それに、コリアンであると疑いをかけられる者）にとっては、現にそこにある問題だった」（p.2）と指摘されるとおりに、ヘイト・スピーチが社会問題化される以前より、在日朝鮮人がなんらかの偏見と差別にさらされてきたのは明らかである。ヘイト・スピーチは可視化された差別であり、いわば、誰もが気づきやすい、わかりやすい差別である。しかしながら、偏見と（意識的かどうかを問わず）差別にもとづく罵詈雑言を受けてきた在日朝鮮人が多かれ少なかれ存在してきたのに疑いはない。在日朝鮮人差別としてのヘイト・スピーチは社会問題化されたがゆえに可視化されたといえ（逆もしかり）、可視化／不可視化された差別のいずれであっても、そこにレイシズムが介在しているのは明らかであろう。このような在日朝鮮人に対するレイシズムの実態を、本書では、ネット空間での在日朝鮮人に対する言説のツイートの計量テキスト分析、質問紙調査などを通じて明らかにしている。

膨大なテキスト分析を通じた考察は、ある意味、「やはり」というものが多い。「やはり」を実感してもらうためにも、本書を手にとっていただきたい。そして、この「やはり」を実証したところに、本書の大きな価値がある。推測でしかなかったものを数量化し、分析した筆者の功は大きく評価さ

れるべきである。

さて、本書では、「在日特権」という虚構—現代的レイシズム—が鵜呑みされ、意図的に拡散されているという (p.44-45)。「嘘も 100 回言えば真実になる」というフレーズがあるように、このように拡散された「在日特権」は、いつしか虚構が「真実」と化してしまう危険をはらんでいる。「私は特定の誰かの味方をしたいわけではない。ひどい差別にも、在日特権にも反対し、あらゆる不正を許さないだけだ」とすることばがカウンター行動側から発せられたことを野間が記すとおりであり [野間 2013: 4]、つまり、「在日特権」が虚構にもかかわらず、真実として「本質」的に扱われていくと考えられなくもない。

一方、本書では「古典的レイシズムにおいても在日コリアンへの言及が多い」(p.55)ともある。古典的レイシズムは他者を劣ったものと扱うことであるが、まずは他集団を特定することが必要であり、かつ、自集団と他集団の境界線を画定する必要が生じる。そこでは他集団の内実をこころみる必要はまったくなく、逆に、それらを一樣な存在として扱うことによって成り立つ。つまり、古典的レイシズムは集団や個人の多様性を無視し、一樣な本質的存在として扱うと同時にさらなる本質化を促していくのだが、他方では、現代的レイシズムは虚構である「特権」を繰り返し述べることで、それらを「真実」として本質化する。このようなレイシズムがもたらした二つの「本質化」のまなざしに、現下の在日朝鮮人は翻弄されているのである。

では、このような本質化を促すレイシズムに、在日朝鮮人はどう立ち向かえばよいのだろうか。本書が差し出す処方箋は、集団間での友人関係などの接触である「直接接触」である (p.166)。しかしこれは、「在日コリアンと日本人との交友の機会を増やすことは、レイシズムの低減の有効な手立てとなりうる。ただし、直接接触を通じてレイシズムを低減する努力を、日本人よりはるかに少ない在日コリアンに対して求めることは、それ自体差別的でありうる」(p.174)と指摘されるものであ

り、注意深く提示されている。さらには、「在日コリアンがアイデンティティを明らかにしつつで(同時に日本の住人であるという共通のアイデンティティも表しつつ)日本人と接触することが、在日コリアンという集団へのレイシズム低減の最も効果的なプロセスであるかもしれない」(p.190)ともある。つまり、レイシズムは集団の本質化を促すだけでなく、その対抗策すら、個人の集団への帰属とそれら集団の本質化をかいくぐる必要が生じてしまう。

評者の経験では、在日朝鮮人差別への抗議として、「日本人として恥ずかしい」「日本人として反対する」などをよく聞いた。ヘイト・スピーチへのカウンター行動でも、「日本人として」という言辭が飛び交っているのではないだろうか。レイシズム、そしてヘイト・スピーチの陥穽がここにある。レイシズム、ヘイト・スピーチの支持者、反対者のいずれであっても、人びとの属性の構築性を無視して本質的なものとして扱い、他集団との境界線を画定してしまうのである。集団内部や個々人の多様性はないがしろにされ、一樣な「主体」して扱われてしまう。しかし、それが「在日コリアンという集団へのレイシズム低減の最も効果的なプロセスであるかもしれない」となると、迷路にはいらざるをえない。その解決策は本書にはなく、もちろんそれを求めるものではないが、このような陥穽のメカニズムを筆者に暴いてもらうことを強く期待したい。

なお、本書の冒頭には「日本には 200 万人を超える外国籍住民がいる。これらの人びとが平和に生活を営めるか否かは、制度的な差別を解消できるかどうかということのみならず、圧倒的多数を占める日本人住民が寛容な態度を醸成できるかどうかということにも、多くを依っている」(p.1)とある。素直に読むと、レイシズム、差別の解消を「寛容な態度」に帰していると解釈可能になり、もしそうだとすれば、人権を「思いやり」とすることにもつながりかねない。けっしてそのような意味で記述したとは思えないが、より慎重にことばを紡ぐべきだったとも思える。

いずれにしろ、先述したとおりに本書の価値は、レイシズム、ヘイト・スピーチにまつわる「やはり」を実証したところである。多くに読まれたい一冊である。

参考文献

野間易通（2013）『「在日特権」の虚構—ネット空間が
生み出したヘイト・スピーチ』河出書房新社。

書評

廣瀬陽一著

『金達寿とその時代 文学・古代史・国家』

〔クレイン、2016年〕

総谷智雄（神戸医療福祉大学）

本書は、在日一世作家・歴史研究者としての金達寿に関して、綿密な資料分析と深い考察によって彼の業績と思想を浮き彫りにした、画期的な研究書・評伝だ。

本書の構成は次のとおりである。序章では先行研究が紹介され、著者の視座が示される。第一章では金達寿の生涯を概観し、第二章では彼の文学活動に焦点をあてた考察がなされる。第三章では、国家や組織と金達寿の関係について論じられ、第四章では1970年代から本格化した彼の古代史研究について、第二章で論じられた文学活動との内的関連についての考察が行われる。そして終章では、「日本と朝鮮の関係を人間的なものにする」という金達寿の課題を軸として、彼の到達点が明らかにされるとともに、その知的活動を現実的に読み替える可能性が提示される。

序章において著者は、先行研究の大部分が、金達寿の知的活動の全体像を視野に入れずに、小説を個別に取り上げて論じた作品研究のレベルにとどまっていると指摘し、彼の古代史研究が「これまでまったく問題にされなかった」(p.54)ことに、強い疑問を表明している。そして、文学の領域においても、自らの文学の原点とも言うべき志賀直哉の文学に対する闘争をとおして、金達寿が「新たなリアリズムの確立を模索し続けたことが完全に見逃されている」(同)と指摘している。このような問題意識にもとづき、著者は、金達寿を「日本と朝鮮との関係を人間的なものにする」ことを生涯の課題とした知識人ととらえ、彼の文学活動

と古代史研究を総合的に考察することによって、「現在の硬直化した日本と韓国・北朝鮮、日本人とコリアンとの対立関係を克服する、新たな道筋を提示することを目指す」(p.57)という視座を提示している。

金達寿は、本書の第一章で述べられているように、志賀直哉の作品に強い影響を受け、文学活動に足を踏み入れた。しかし彼は、文学活動を続けるうちに、当初は「共通の人的真実が書かれている」(p.67)と感銘を受けていた志賀文学への疑問を強めていき、それは直接的批判として表出される。第二章ではその事例として、志賀の短編小説「小僧の神様」に対する金達寿の論考が紹介される。この論考において金達寿は、「小僧の神様」を主人公（秤屋の小僧に同情して鯨をご馳走する議員）あるいは作者である志賀直哉の「安易な観念によって生れたすじがきとしての話」(p.131)と酷評している。そして彼は、志賀の文学が、「社会というものに向って広がり、窓の開いたもの」にならなかったと結論づけている (p.132)。

このような文学的闘争に加えて、1949年に日本共産党に入党して一年も経たずに「分派」として除名された「政治的闘争」を通して、金達寿の認識が変化していったことを、著者は指摘している。著者は「政治的闘争」を経た彼が、「日本人と朝鮮人とは対立関係にあるのではなく、何ものかによって対立させられた関係にある」(p.142)ことを認識し、「ある特定の立場や観念が価値を持つく場」を成立させている基盤を根本的に問い直すこ

とが、彼の『闘争』となる」(同)と述べている。

この「闘争」の果実として著者は、小説「朴達の裁判」を紹介している。この小説は、「南部朝鮮K」という架空の町を舞台に、朴達という朝鮮人青年が繰り広げる政治運動を描いている。朴達は、朝鮮戦争の直前にパルチザンと誤解されて逮捕された際に、獄中にいた政治犯・思想犯から影響を受けて、民族解放のために活動するようになった。彼は逮捕されるたびに転向を誓い、留置所から釈放されるが、釈放されるとすぐに政治活動を再開し、捕まるとすぐに転向を誓う。このような奇妙な政治活動を繰り返す朴達は、町の人々からは一種の英雄扱いを受けており、警察や検察庁の中にも、彼に好意的な者が出てくる。そして、逮捕のたびに朴達を転向させている治安検事が、次第に孤立していく。

この主人公の「転向」について、著者は「朴達は転向ばかりしているけれど、実は全然転向していない」「そうなる、敵が分らなくなる。どれが転向なのかどうか、そういう混乱に陥れる必要があると思うんだ。キレイゴトでは権力にかないませんよ」(pp.150 - 151)という金達寿の発言を紹介している。これはまさに、前述した「ある特定の立場や観念が価値を持つ〈場〉を成立させている基盤を根本的に問い直すこと」の実践だといえよう。朴達がなぜ政治運動と「転向」を繰り返すのかについて、作中には一切の説明がない。この点について著者は、金達寿の直筆原稿を分析し、もともとの語り手が「私」であり、最終稿に近い段階ですべて「筆者」に変更されていたことを明らかにして、「語り手が登場人物の誰でもないが、小説世界を支配する〈神〉でもないことを強調することで、登場人物の内面を語り手がわかったかのように描くことを拒否する姿勢」(p.160)を指摘している。これは前述した志賀直哉の「小僧の神様」に対する「安易な観念によって生れたすじがきとしての話」という問題意識にもとづくものだといえよう。

第三章では、金達寿と朝鮮総連の軋轢と決別、そして彼の韓国訪問(1981年3月)について述べら

れている。光州民主化運動(1980年)を軍事力によって強硬弾圧して政権を掌握した全斗煥政権下における金達寿たちの訪韓には、当時、強い批判が浴びせられた。これについて著者は、「正直いってこれまで在日朝鮮人として韓国の実情を伝える仕事をしてこなかった、と反省させられた。民衆の生活や考え方を伝えずに、軍事政権を糾弾するとか、一種の観念論に終わっていた」(p.239)「僕らが韓国に行く、行かない、という踏み絵的議論をしていたとき、いかに拘束的観念で物を見ていたかという痛切な反省があるんです」(p.260)という金達寿の発言を紹介し、彼の訪韓が、「彼自身にとって訪韓は戦略的なものであっても、北朝鮮から韓国へ、社会主義から民族主義へと、単純に態度変更したことを意味するものではなかった」(p.264)と述べている。著者が紹介した金達寿の発言における「観念」ということばは、前述の志賀直哉批判における「安易な観念」ということばを想起させる。

第四章において著者は、金達寿の『日本の中の朝鮮文化』第一巻が、武蔵国および相模国に残る朝鮮文化遺跡探訪から始められていることに注目し、国木田独歩の小説「武蔵野」と対比している。著者は、国木田独歩が武蔵野の自然風景に注目したのに対し、金達寿はその地域が持つ「固有の歴史性」に注目しており、「独歩の文学は、どこまでいっても自己完結している」のに対し、金達寿が紹介する朝鮮半島との深い関連を物語る文化遺跡の存在は、「日本という国家や民族としての日本人が自己完結的に自立することを許さない事物である」と指摘している(p.293)。著者は、日本各地の古代文化遺跡を探訪して考察する金達寿の古代史研究について、「従来の歴史観が覆い隠してきた日本列島と朝鮮半島との関係や、大和朝廷以後の行政区分によって切断された各地域の関係を、そうした関係をつくる主体である『渡来人』たちの、いわば生の歴史をとおして明らかにしていった」(p.296)と評価し、金達寿が「かつて国境や民族意識で隔てられる以前の〈日朝関係〉があったことを示し、『渡来人』を媒介とした〈日朝関係〉を

参照することで、現代においても両者の関係の再構築が可能であることを提示しようとした」(p.325)と述べている。著者は金達寿が小説家としての活動から古代史研究者としての活動に移行したことを「逃避」などとはとらえずに、「変わったのは活動領域だけであり、ある言説空間を成立させている諸条件を批判的に問い直す立場は根本的に変わっていない」(p.296)と指摘している。この文学活動と古代史研究活動における「内的関連」についての指摘は、説得力がきわめて強い。

終章では、金達寿が日本各地の古代文化遺跡を探訪する過程で、「日本人と朝鮮人との民族的な障壁を超え、専門の古代史研究者から郷土史家やアマチュアの歴史愛好家にいたるまで、多元的な連帯関係を築いていった」(p.365)ことが述べられている。これは、「日本と朝鮮の関係を人間的なものにする」という課題を金達寿がある程度まで達成することができたことを示している。しかし著者は、金達寿が幾度となく他者からの〈衝撃〉を受け、その〈衝撃〉をもたらした他者と闘争して打ち勝つことこそ「植民地的人間」から脱却する一歩だと信じ続けたと指摘し、その闘いは金達寿が批判した志賀直哉の文学のように、自分が小説世界を支配する「神」の視点に立つまで終わらない、すなわち永遠に「植民地的人間」の状態を脱

することはできないため、この発想を根本的に切断できなかったところに金達寿の知的活動の限界があったと述べている (p.368)。

ではどうすればその発想を断ち切ることができるのか。これに関して著者は、「朴達の裁判」や、日本古代史の言説空間に対する金達寿の異議申し立てなどに、その可能性を見出している。著者による「彼の知的活動の中に、『日本と朝鮮との関係を人間的なものにする』ための闘争の在り方の可能性が残されていることを示している」(同)という表現は、少々わかりづらいが、「朴達の裁判」において、金達寿が上述のように「神」の視点を排していることや、前述した「ある特定の立場や観念が価値を持つ〈場〉を成立させている基盤を根本的に問い直すこと」などが、その「『日本と朝鮮との関係を人間的なものにする』ための闘争の在り方」であろうかと評者は解釈している。

冒頭で述べたように、本書は、綿密な資料分析と深い考察によって在日一世作家・歴史研究者としての金達寿の業績と思想を浮き彫りにした、画期的な研究書・評伝だ。本文の内容の深さはもちろんだが、巻末の年譜も充実しており、金達寿の生涯を俯瞰できるとともに、歴史的事実の確認・整理にも有用である。多くの人に読まれるべき傑作・労作である。

国際高麗学会日本支部 第20回 学術大会報告

徐正根 (山梨県立大学)

日 時：2016年6月4日(土) 10:00～17:00
場 所：山梨県立大学飯田キャンパス

<プログラム>

自由論題報告

1. 高正子 (神戸大学)

『祖先祭祀の継承－濟州島S村からの渡日者の事例から－』

2. 関東曄 (東京大学大学院総合文化研究科博士課程)

『戦後初期日本における新たな民族関係の模索－在日朝鮮人メディアに現れる朝鮮人と日本人の「親善」－』

シンポジウム『日本の新安保法制と東アジアの安全保障』

報告者

中村進 (海上自衛隊幹部学校)

鄭京泳 (漢陽大学校)

于鉄軍 (北京大学)

コメンテーター

斎藤直樹 (山梨県立大学)

朴一 (大阪市立大学)

モデレーター

徐正根 (山梨県立大学)

山梨県立大学にて開催された第20回学術大会では、自由論題でふたつの報告があり、日中韓3カ国の報告者を迎えシンポジウムを開催した。シンポジウムの要旨を下記に記す。

なお、国号・国際関係・地域に関する呼称に関しては、報告者の発言どおりに表記した。

例) 朝鮮民主主義人民共和国 → 「北朝鮮」「北」「北韓」「朝鮮」

アメリカ合衆国 → 「米国」「アメリカ」

日韓関係 → 「韓日関係」

朝鮮半島 → 「韓半島」「半島」

尖閣 → 「釣魚」

朝鮮戦争 → 「韓国動乱」

文禄慶長の役 → 「壬辰倭乱」 など

国際シンポジウム『日本の新安保法制と東アジアの安全保障』要旨

最初の報告者、中村進一等海佐の報告「日本の安保法制の変遷－自衛隊創設から新安保法制に至る経緯－」の要旨

新憲法の制定時には、自衛権をも否定する立場から出発した日本の安保法制は、その後の安全保障環境の変化を受けて、その都度、憲法との整合を図りながら変遷を遂げてきた。今般の新安保法制整備も、いわばこの流れの延長線上にあり、新たに限定的な集団的自衛権の行使を容認することとなった。

近年の日本を取り巻く安全保障環境は、北朝鮮の核実験やミサイル発射、中国の広範かつ急速な軍事力の増強等、安全保障上の課題・不安定要因がより深刻化し、国際社会全体の安全保障環境も一国・一地域で生じた混乱や安全保障上の問題が、直ちに国際社会全体の課題や不安定要因に拡大するといったリスクが高まり、一国のみでの対応はますます困難なものになってきている。

こうした情勢の下、政府は「72年見解」について、40年以上が経過した変化の中で当時の情勢認識に従って日本の防衛政策を考えることは妥当か？という問題認識から、その見直しを行う。その結果、現在では、日本と密接な関係にある他国に対する武力攻撃が発生した場合でも、武力を用いた対処をしなければ、国民に日本が武力攻撃を受けた場合と同様の深刻・重大な被害が及ぶ状況もあり得るとして、従前の「自衛権発動の三要件」を見直し、新たに「存立危機事態」における武力行使の枠組を追加した「武力行使の三要件」に改める。

政府は、この新たな枠組について、国際法上の「集団的自衛権」の一部分に該当するが、これはあくまで「日本を防衛するため」のやむを得ない自衛の措置であり、他国を守ることそのものを目的とする「集団的自衛権」の行使については、引き続き認められないとしている。このように見れば、今般の新安保法制における「集団的自衛権」の整理は、「72年見解」で示された、「自衛のための必要最小限度」の範囲を72年当時から大きく変化した現在の安全保障環境に照らして見直したものと見える。

二番目の報告者、鄭京泳教授の報告「戦略環境の変化と韓日安保協力の方向」の要旨

近年、領土問題などで高まっているアジアの軍事的緊張は、当事国間の問題にとどまらず覇権争いの様相も呈している。中国の第一列島線、第二列島線構想は計画的に推進されており、2013年には防空識別区域が設定された。これに対し日本と

韓国は即座に対抗措置を講じた。

日本は「普通の国」、積極的平和主義を掲げて安保制度の拡充を進めており、北の脅威及び尖閣問題へ対抗するため相当な戦力を充当していると認識している。ロシアもアジア太平洋地域における戦略的利益を棄損しないよう新東方政策として東部戦略司令部を陸軍と海軍を統合する形で改編した。そして、東南アジア諸国は米中の狭間で混乱をきたしている。

こうしたなか、北韓では金正恩体制発足後、経済と核開発を同時に進める並進路線を採択、ICBMの実験もほぼ成功し、核保有国として核を決して破棄しない旨を宣言した。これに韓日は協力して対処すべきであり、そのためには目標と戦略が必要となる。

戦略としては韓半島の安定のために安保協力を平時と戦時とで分けて考える必要がある。平時に難しい政治問題があったとしても軍事協力に関しては関係を維持しなければならない。米国を中心とする3ヶ国の安保協力も当然必要である。

北韓急変時への対処は軍事的分野と非軍事的分野を分けて考える。例えば白頭山の爆発と核施設への影響、国連安保理決議に基づいたPKOなど。クーデターなど政変の場合はまた別で情報の共有が求められる。全面戦争時、日本は後方支援基地として物資などのバックアップ、機雷の掃海などで協力が求められる。在韓日本人の退避は米軍が担当すべきであり、自衛隊が独自に退避させることはできない。

すこし視野を広げると東アジアの繁栄にとって安保と経済の協力は不可欠である。警察・NGO・軍で構成される迅速対応軍を創設し超国家的案件に対応することを提案したい。日本は地震、韓国はテロ、中国は洪水など、各国に得意分野がそれぞれある。事案別に事故・事件発生時に協力できるよう普段から交流し信頼構築を図ることが望ましい。

また、海賊対策や海洋航路の安全確保なども協力していく必要がある。ただし南シナ海における中国の覇権拡大には断固対処すべきだ。

最後に韓半島統一問題と安保協力について述べたい。韓半島が分断されたままでは地域の安定と共栄はありえない。植民地支配がなければ分断はなかったし、米ソが進駐しなければ統一、解放されただろう。韓国動乱時の北進で統一が目の前に迫ったが中国の加勢で挫折した。これら韓半島分断に関わった周辺諸国が統一のために努力すべきである。韓国の統一は東北アジアの相互信頼、平和と繁栄、協力のハブになる。そのためにも宿命の深い関係である韓日両国が、未来志向の発展を目指し東アジアにおける主役とならねばならない。

三番目の報告者、于鉄軍准教授の報告「中国の安全保障思考における日米同盟と韓米同盟」の要旨

私のテーマは中国の視点から見た日米同盟と韓米同盟である。最近では日米同盟の動きが活発化し、新ガイドラインの指針が改定され、安保法制が成立した。東アジアにおける軍事同盟の復興に中国はなぜ関心を持っているのか。具体例をあげながら話していく。

米国にとっての軍事同盟はハブアンドスポークで、フィリピンやオーストラリアとの関係もあるが、最も重要なのは日本と韓国との同盟で、米国からすれば日米、韓米同盟は不可分である。

東アジアにおける米軍の拠点日本で、朝鮮戦争時は後方支援基地の役割を果たした。ベトナム戦争時も同様、特に沖縄の戦略的重要性は極めて高い。さらに軍事的側面のみならず海上交通面からの重要性もあり、当然関心が高くなるを得ない。

日本は安倍政権下、三回目のガイドラインの改定で同盟関係強化を図った。一回目は対ソビエト、二回目は東アジア全体を含めたもの、三回目は名指しこそされていないものの対中国の性格が色濃く、日本側が積極的であった。特に首相が積極的で、日本側の認識では周辺事態の変化を強調している。安保法整備に関連して言うと、法案が国会ではスムーズに通過したが民間では反発も起き

た。

安保法制の整備は内容が膨大で複雑である。そして当然のことながら日本や韓国と中国の受け止め方は違う。集団的自衛権行使のための環境整備と目されるが、中国側の論点として次の4点が挙げられる。1. 日本が主体的に海外での戦闘に参加する。2. 有事の際、他の同盟国を支援でき、周辺という概念に縛られることがなくなり臨時立法の必要もなくなった。3. 武力の行使を可能としPKOの幅が広がった。4. 日本国民保護を名目に自衛隊の海外における単独行動を可能にした。また、日米同盟に対する意味からすれば、まず対米支援の幅が広がり日本の役割が高まった。次いで日米同盟の枠を超えて日本の自衛隊は活動できるようになったということである。

さらに中国の歴史的視点から見た日米同盟発動の三つの具体的なシナリオについて述べる。

一つ目は釣魚島（尖閣諸島）問題。古い問題だが日本の国有化によって突出することになった。中国としては決して受け入れられず、緊張が高まっている。中国は自国の領土であるということを示すために船を出動させ、それに対抗して日本も船を出す。中国からすれば1972年の国交正常化時、この問題は話し合われて対応が決まっていたはずなのに、日本が棚上げを否定する形で国交正常化40周年を記念する年に発生した。

2013年に入ると東シナ海にて両国の緊張が高まった。中国が防空識別圏を設定すると日本も設定、何度もニアミスが起きた。中日間で何かあった場合、日米でどうするかという問題が当然生じてくる。以前、釣魚島をめぐる日本の立場は明確に示されなかったが、2015年の日米外相会談では日本の施政下にあり日米同盟の範囲に含められることが確認されている。

中国は中日間に領有権問題が存在することを一連の活動を通じて世界に明示した。2014年に中日首脳会談が実現し、両首脳の表情は硬かったものの裏では和やかな雰囲気だったらしい。これを機に対話が進められるようになった。

二つ目は台湾海峡問題である。国民党馬政権下

で中台関係は良好であったが台湾の政権交代によって厳しい情勢に直面している。台湾問題の当事者は中米が基本であるが、日本も重要な役回りを担っている。1993年に中台首脳が会談し一つの中国を確認したものの、李登輝政権下で第3次台湾海峡危機を迎える。クリントン政権が軍事的圧力を加え、その後、中国は軍備を増強、日米間では二回目のガイドライン改定が行われた。中国の立場からすれば、二つの中国を絶対に認められないし、万が一認めるとなると共産党政権は崩壊する。馬政権が選挙で敗れ民進党が政権を奪取すると、蔡総統就任式には日本から多数のゲストが参加した。台湾問題はこれからも中国にとって重要であり続けるが、中台間の問題にとどまらず、日本や米国との関わり、そして日米同盟の問題でもある。

三つ目は南シナ海の問題で、最近、特に熱くなっている。本来はこうなるはずではなかった。中国、ベトナム、フィリピン、マレーシア、台湾、ブルネイが自らの領域であることを主張しており、非常に複雑な局面を迎えている。特に中越間の対立が激しい。2014年にはベトナムで反中デモが発生し死者も出ている。ベトナムはロシアや米国との関係を密にしている。もともと中越は同じ共産党政権であったものの現在は厳しい関係になり、アメリカの関与もそれに拍車をかけている。

この問題に関する中国の認識は国際法違反ではないとし、米国は航行の自由を主張し軍を派遣して示威行為を展開している。中国は米国に新型大国関係構築を提唱しているものの米国の反応は鈍い。中米は釣魚島問題で互いに不信感を有しており、それ以外では様々なルートで対話が維持されている状態といえる。中国は航行の自由を妨害していないし、フィリピンとは国際法に基づいて解決することが合意され、あくまでも当事者同士で解決を図るというのが中国の立場である。

この問題で米国との対立は以前からある。中国にはこの地域から米国を排斥する意図はないものの、米国はその可能性に憂慮しており、また同盟国との約束を果たすという意味でも譲歩できない

のだろう。注目を集めている複雑な問題であるが、中米両国が理解しあえればうまく解決できると思う。

最後に朝鮮半島問題だが、この地は中国の安全保障にとって非常に重要な地域である。近現代史上の大きな二つの戦争（日清戦争、朝鮮戦争）は朝鮮半島をめぐるものであった。朝鮮の核問題は中国の外交政策の試金石である。中朝関係は特別な関係であり、中韓関係は習近平政権下では最も重要な二国間関係の一つになっている。

中国は朝鮮半島の核問題に対しては当初から非核化という明確な姿勢を示している。2013年にも朝鮮の特使に対して非核化方針をはっきり伝えている。しかし、現在に至るまで中朝首脳会談は実現しておらず、異常な状態と言える。最近の核実験を受けて、中国は国連の制裁決議に賛成する立場に立っているが、決して朝鮮を切り捨てることはできない。両国は極めて特殊な関係である。最近（2016年6月）、習近平総書記が朝鮮労働党中央委員会副委員長と会見したが、驚きを持って受け止められた。それくらい中朝関係は複雑であり、中国にとっては頭の痛い問題である。

韓国とは政治、経済ともに良好な関係にある。本来、韓国は米国の同盟国であり、朝鮮は中国の同盟国のようなものであるが、韓国とこのような関係でいられるのは中国の外交力を示すものである。中韓の関係は発展しているが、北とは難しい局面を迎えている。

今、最も大事なことは対話を通じて緊張緩和を図ることである。鄭京泳先生が話した東アジア全体における安保協力に賛成し、協力すべきであると考える。

齋藤直樹教授のコメント要旨

論点は三つある。まずは、北朝鮮の今後の動向に憂慮している。金正恩体制は不透明で流動的である。経済面の成果をアピールしているものの経済成長率は1%台で外資の導入も進んでいない。一方、核開発は進められていて、遠からず技術革新

も達成されるだろう。核弾頭の小型化とミサイル搭載が実現すれば、核による恫喝を繰り返すことになろう。したがって、中国を含めてそういった事態を封じ込めなければいけないのに成功しているとは言えない。6カ国協議、アメリカの経済制裁は効果を発揮していない。貿易面で見れば北朝鮮の対中依存度が高まっている。習近平指導部が貿易停止を決断するようなことになれば、北朝鮮の孤立化を加速することになり得るし、極めて難しい局面を迎えることになるだろう。厳しい国連制裁決議が可決されており、それを中国も実施すれば重大な影響が及び、南北間で軍事衝突が起きることもあり得る。

次いで、日中韓3カ国間には領土問題、歴史認識問題など難しい問題がある。国際関係はゼロサムゲームとよく言われるが、一方でプラスサムという考え方もあるわけで、それを目指すべきだ。例えば貿易と観光、環境協力など、とくに日本の中国への環境協力はこれまでも行ってきたし、今後さらに促進していくべきである。

そして最後に北朝鮮への姿勢、中国のイニシアティブの発揮が求められる。

朴一教授のコメント要旨

中村先生の安保法制に関する報告は論理的でわかりやすかった。「日本は戦争ができない縛られた国からできる国になった」そして「敵の攻撃から国民を守れない国から守れる国になった」と解釈できる。

これから実際に第二次世界大戦のような状況が生まれてくるようなことになれば、軍事力バランスという点から見た場合、拡大の方向に向いていて、冷戦時と現在の相違点を考えると、東西の対立をベースに核開発、キューバ危機などを経験したのに対し、ソビエト崩壊後は中国が台頭してアメリカと対抗するまでになった。今後、新冷戦を迎えつつあるのではないか。その中で日本も対応を迫られている。

異なる点は、経済面を見た場合、東西間でも相

互依存度が高まっている。日本との関連でいえば、大戦の可能性は低くても軍事衝突の可能性はある。ひとつは尖閣を巡る衝突、もうひとつは朝鮮半島有事の問題である。有事の際の邦人救出の事例を鄭京泳先生が取り上げたが、安保法制が整備されたとはいえ、実際問題自衛隊が韓国にて活動することはできない。したがって自衛隊と韓国軍との連携システムをしっかりと検討して確立すべきだ。

于鉄軍先生の話から感じたのは、日本の集団的自衛権、安全保障の議論は中国に対して軍事的脅威を与えているということ。我々が北のプレッシャーを感じているのと同じように北も大きなプレッシャーを感じている。互いにプレッシャーを与える形で軍拡がなされてきた。経済制裁すればするほど核、ミサイルを開発せざるをえないというジレンマを克服するためには対話しかない。

斎藤先生はおっしゃったが、6カ国協議は失敗したと言えるのか、議論が必要だ。また韓国はなぜ対中傾斜しているのか。朴槿恵大統領が中国の抗日戦争勝利70周年の記念パレードに参加したのに対し、日本では否定的な受け止め方もあった。韓国にとっては経済的相互依存関係にあり、北の核ミサイル凍結への影響力は中国が握っていて、貿易とエネルギーを握っている中国が本気になれば北朝鮮を抑えられると思われる。しかし、その後どうなるのかはわからない。

中国はどうすれば北朝鮮に本気で向き合うのか。于鉄軍先生に質問したい。

北と中国の間で金融取引は行われていて、エネルギー供給も水面下で続いている。日本の専門家の中にも北の核保有を中国は認めているという見方をする人がいる。中国の核の傘のもとで親中路線をとれば容認するものの、そこから飛び出た場合、本気で北を潰しにかかると思う。労働党大会で先軍政治から先党政治へ転換し、軍の強硬派を抑えたように見える金正恩、そういうイメージが広がっているが、実体は未だ軍主導ではないか。北朝鮮が中国の傘から本気で出た場合、中国はどう対応するのか。

二人のコメントを受けた報告者の発言要旨（敬称略）

中村進…邦人保護の問題、日本はできるのか、できないのか。今日も意見が分かれているが、日本の関係者でもよく理解している人は多くない。諸外国では非戦闘員退避活動（NEO）が認められており、戦闘行動も実際に起きている。日本の場合は集団的自衛権と憲法の武力の行使に関する規定から解釈が極めて複雑である。これまではNGOの救出でも外国人ならできるかもしれないが、自衛のための武力行使という観点から、日本人であればできないという状態であった。現在は、受け入れ国の許可を得た上で、例えば韓国での活動に関して言えば、韓国が認めるならできるとし、認めなければ韓国に入れない。

そして朴一先生の指摘に対して言うならば、「戦争ができる国」という表現がしばしばなされるが、フリーハンドで集団的自衛権を行使できるわけではなく「相手と事態を選ぶ必要がある」と理解している。

日韓の軍事協力の将来については、軍事交流は色々なチャンネルですで行われており、また今月も行われるように日米韓で共同訓練が実施されている。また、米韓関係という国連軍としてのアメリカ、米韓同盟としてのアメリカという面があり、国連軍の地位に関する協定を結んでいる日本としては国連軍に対する協力は可能となるが、同盟にまで発展するかどうかは予想がつかない。同様に、日本はオーストラリアと物品・役務に関する協定を結んでいるが米豪同盟があるからといって日本がそれに加われるかという点を考えると集団的自衛権の枠からは判断できない。

于鉄軍…中国は朝鮮を本気で潰せるのかという質問に対して、それを話すと2時間あっても足りない。斎藤先生が指摘した経済、環境をめぐるのは、日中交流の余地があり賛成である。高齢者介護、子供の教育など中国が日本から学ぶことはたくさんあるが、歴史問題などで阻害されてしまう。

新冷戦にはならないと思うが軍事衝突はあり得

る。中国が力を入れているのは危機管理。衝突の事態をいかに避けるか、衝突した場合どう対処するか。衝突は互いの利益にならないと認識している。緊張を避けるルール作りが必要だ。

朝鮮の問題は非常に話づらい。現在、対朝鮮政策で中国内での対立が高まっている。本来、圧力をかけられるはずなのに何故かけないのか。実は、圧力はかけ続けており、やりすぎるとどうなるかを考える必要がある。中国にどのような影響を及ぼすのか真剣に考えなければならない。私自身は朝鮮が核兵器を放棄するとは思わない。中国は非核化を目指しているが実際問題としてすでに有核化している。中国は朝鮮に改革開放を推進させようとしたが、朝鮮がその路線を選択して推進したら現政権は崩壊するであろう。

圧力を強めて朝鮮が崩壊した場合、半島の戦略的状况はどう変わるのか。朝鮮は共産政権であって、同じ共産政権である中国が米国と協力して朝鮮を崩壊させるということが可能だと考えるのか。朝鮮戦争に参戦した義勇軍がまだ2～3万人生きている。彼らがどう解釈するのか。両国は友誼の関係であったと教育してきたことに対してどう説明するのか。政権崩壊により生ずるかもしれない数百万の難民にどう対処するのか。

朝鮮政策をめぐる様々な問題があり、中国内部で激しい論争、対立がある。対立する面々が互いにぶつからないよう会議の時間をずらしているという実情である。

鄭京泳…多様な見解と視角から議論ができて極めて有意義であった。各国の総合的な考え方や性格を垣間見ることができた。どのような葛藤があり、それにどう挑んでいるのかを参考に紛争防止に注力すべきだと考える。

三点指摘したい。北が核を放棄しないと考えるが、放棄しない限り平和と統一の実現は困難である。金正恩体制が存続する限り統一は難しいと考える。この問題は韓国が独自に解決できるものではなく国際社会の協力によって可能となる。

中国政府は非核化と半島平和のための協議を提

案しているが、それも前提があつての話だと思う。核の放棄、ミサイル実験の凍結、IAEAによる査察の受け入れなどが実現しなければ6カ国協議に入るべきではない。また、現在の休戦協定を平和協定に変えるためには、ベトナム停戦時、パリ協定によって外国軍は撤退したが北ベトナム軍が南進したことを忘れてはならない。北は米軍撤退と韓米同盟の解消を主張している。THAAD 配備に反対する中国、ロシアは、韓国が北の核に対抗して講じる措置であることを理解していない。解決策は簡単だ。北の核を無くせばTHAADはいらない。先々、北の核とミサイルは中国に向けられることもあり得る。そうしたことを考えないのはナイーブな発想だ。金正恩体制について、中国もよく認識する必要がある。韓半島統一の協議を進めるにも軍事的緊張と対立を緩和するシステムを構築する必要がある。

韓日関係では、邦人救出の件、戦時に自衛隊が入ることは想定できるものの壬辰倭乱、日清戦争、植民地支配という歴史的事実から精神的苦痛を伴う韓国の情緒からして、場合によっては北に向い

ている銃口が日本に向けられるかもしれないということを日本が理解しない限り、韓日関係は順当に進まない。それでもなお、両国は協力していかなければならないと考える。

斎藤直樹…二点述べる。6カ国協議は個人的に命運尽きたと思う。北朝鮮が核を放棄するという前提で開始されたものであるが、現実問題として4回の核実験を実施し10発以上保有している現状を覆すことはできない。核保有国であることを認めさせようとしている実態からして別の枠組みを考えていかなければならない。

北朝鮮において経済危機、自然災害などが重なり偶発的に暴発した場合は対処の余地があると思われるが、まずは、米中が軍事衝突を回避する合意を結ばなければいけない。そうしないと朝鮮戦争と類似した状況が生まれかねないので、双方がどう抑制的な行動をとるかを検討する必要がある。

以上

国際高麗学会日本支部

2016 年度

学会活動

●国際高麗学会日本支部 特別講演会

「『新・韓国現代史』をめぐって」

<開催概要>

テーマ：『新・韓国現代史』をめぐって

講演者：文京洙（立命館大学 教授）

コメンテータ：滝沢秀樹（大阪経済法科大学 教授）

日 時：2016 年 11 月 19 日（土）15：00～17：00

会 場：立命館大学大阪いばらきキャンパス C471 教室

●人文社会研究部会

第 84 回人文社会研究部会

日 時：2017 年 1 月 9 日（月）15：00～17：00

場 所：大阪教育大学天王寺キャンパス 中央館 4 階 415 号室

報告者：丁振聲（韓国放送大学 教授）

主 題：「1940 年の在日朝鮮人の就業構造 — 国勢調査原票の分析」

第 85 回人文社会研究部会

日 時：2017 年 2 月 25 日（土）15：00～

場 所：大阪市立大学梅田サテライト 108 教室（講義室 7）

報告者：李洪章（神戸学院大学 現代社会学部 現代社会学科）

主 題：「在日朝鮮人個人にとっての民族／歴史」

●科学技術研究部会

第 58 回科学技術研究部会

日 時：2016 年 4 月 16 日（土）16：30～

場 所：京都大学理学部 6 号館 272 号室

報告者：文世一（京都大学大学院経済学研究科 教授）

主 題：国際交通インフラストラクチャについて

第 59 回科学技術研究部会

日 時：2016 年 8 月 27 日（土）16：30～

場 所：京都大学理学部 6 号館 272 号室

報告者：趙崇貴（奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科）

主 題：距離センサアレイを用いた前腕形状変化計測に基づく手の動作解析

第 61 回科学技術研究部会

日 時：2017 年 2 月 4 日（土）17：30～

場 所：京都大学理学部 6 号館 2 階 272 号室

報告者：李煥信（大阪市立大学大学院工学研究科 電子情報系）

主 題：半導体ナノ粒子及びその周期配列構造の作製と光学特性

第 62 回科学技術研究部会

日 時：2017 年 3 月 25 日（土）15：30～

会 場：京都大学理学部 6 号館 2 階 272 号室

報告者：李泰洪（奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科）

主 題：リン栄養条件に依存した植物の免疫制御

◎人文社会・科学技術研究部会 共同研究会

日 時：2016 年 12 月 10 日（土）15：00～17：00

場 所：大阪教育大学天王寺キャンパス 4 階 415 教室

報告者：①具徳會（ソウル教育大学コンピューター教育科）

②蔡徳七（大阪大学大学院理学研究科）

主 題：①「韓国における教育の情報化」

②「分子を配向制御した化学反応の観察」

1. 投稿資格

国際高麗学会日本支部は、学会誌『コリアン・スタディーズ』を年1回発行する。掲載される原稿は、朝鮮半島および朝鮮民族に関するあらゆる分野の学術的な論文、研究ノート、書評論文、キルチャビ、書評である。論文、研究ノートについては、国際高麗学会日本支部会員は自由に投稿できる。投稿については、寄稿規定並びに執筆規定を熟読すること。ただし、当該年度までの会費納入を要する。投稿論文は常時受け付ける。また、編集委員会で企画する特集については、非会員にも寄稿を依頼することがある。

2. 投稿条件

投稿される原稿は、未発表の書き下ろし作品のみとする。同一原稿を『コリアン・スタディーズ』以外に同時に投稿することはできない。

3. 審査

寄稿された原稿を掲載するか否かは、別途定める査読規定に基づいて編集委員会で審査の上決定する。

4. 使用言語

本文は日本語のみとし、注および参考文献に限り外国語を使用できる。要旨およびキーワードは日本語および英語とする。

5. 枚数

原稿枚数は400字詰め原稿用紙換算で50枚以内とし、本文（タイトル、氏名含む）、注、参考文献、図表を含めたものとする。論文には、日本語要旨、英語要旨およびキーワード（日本語および英語）を付けることとする。ただし、いずれも枚数には含まない。枚数を超過した場合、審査対象としないこともあるので、下記を確認すること。

論文 50枚以内+日本語要旨（400～800字）、英語要旨（800～1000語）+キーワード（日本語および英語）

研究ノート 50枚以内

キルチャビ 20枚以内

書評 5～15枚

6. 投稿形式

投稿は原則として電子文書とし、マイクロソフト・ワード形式かリッチテキスト形式で作成したものを投稿規定10にある提出先のe-mailアドレスに送付すること。図表や写真は可能な限り本文中に挿入すること。マイクロソフト・ワード形式かリッチテキスト形式以外での提出については、投稿規定10にある問い合わせ先に連絡すること。必要に応じて印刷された原稿の郵送を求めることがある。

7. 抜き刷り

本誌は国際高麗学会日本支部会員には1部ずつ、論文、研究ノート各1本につき1部配布する。抜き刷りをご希望の場合は別途有料となるので、投稿の際に申し添えること。問い合わせについては10を参照のこと。

8. 校正

校正は原則として著者校正のみで、内容のみならず、投稿規定および執筆規定に則った形式に訂正することも校正作業に含まれる。審査により採用決定となった後に行われる初校段階での誤植以外の修正は原則として認めない。なお、再校は初校段階の訂正を確認するだけの作業となる。

9. 原稿の保管

投稿原稿の保管や取り扱いについては編集委員会が責任を負う。

10. 提出先および問い合わせ

投稿原稿は下記宛に提出すること。

国際高麗学会 日本支部事務局

〒530-0047 大阪市北区西天満4丁目5-5 マーキス梅田 506号

tel 06-6314-3775 fax 06-7660-7980

isksj@ams.odn.ne.jp <http://www.isks.org/>

投稿などに関する問い合わせは、上記住所の支部事務局をお願いします。

11. 著作権

投稿された原稿の著作権は国際高麗学会日本支部に所属するが、原著者が『コリアン・スタディーズ』に掲載された当該論文を自著作の単行本や論文集に再掲載することは妨げない。

(2014年6月30日)

国際高麗学会日本支部学会誌『コリアン・スタディーズ』執筆規定

2014年6月30日一部改訂

1. 本文

(1) 基本用語

- a. 原稿は日本語、横書きとする。図表や図版は原稿本文に組み込み、紙幅の制限内に含める。
- b. 朝鮮、中国に関わる人名・地名は漢字（日本の現代漢字も可）で表記し、漢字不明の場合はカタカナ表記とする。欧米由来の度量衡はカタカナ表記とする。

(2) 数字

- a. 数字はアラビア表記を原則とし、場合に応じて漢数詞を用いる。
- b. 年号は西暦を用い、国家・地域固有の年号を使用する際は西暦を（ ）で付記する。

(3) 見出し

- a. 章はアラビア数字で1, 2, 3…と表す。「はじめに」と「おわりに」（あるいはそれ等に該当する見出し）にも数字を振る。「はじめに」は1とする。
- b. 章以下の節は(1)、(2)、(3)の順で表す。
- c. 節以下の項はa, b, cの順で表す。

(例) 第1章⇒1、第1節⇒(1)、第1項⇒a

2. キーワード

論文、研究ノートには日英5語以内でキーワードを付けること。キーワード間は読点ではなくコンマを入れること。

3. 文献引用

(1) 本文や注、図表で文献を表記する際は、編著者の姓（刊行年：ページ）のみ表記し、文献の詳細は参照文献リストに表示する。朝鮮人の名は姓名とも表記する。編著者名が付いていない刊行物の場合は、発行機関名を表記する。

(例) 文献全体を示す場合

鈴木 [2005], 朴統一 [2011] によれば・・・

文献の一部を示す場合

…投票率は低かったとされる [キムハヌル 2012: 11-13]。

(2) 2度目以降の引用でも前掲書・前掲論文、同上書・同上論文などの用語は使用せず、上記(1)のように

表記する。

(3) 新聞・雑誌記事や社説の場合は本文・注・図表に新聞・雑誌名、発行年月日を記した上で、参考文献リストに新聞・雑誌名を入れる。

(例)

…保守言論による歪曲は深刻である [『月刊朝中東』2001年1月]。

…と指導者は発言している [『労働新聞』2012年4月16日]。

4. 注

(1) 注は、本文の内容について文脈上の解説や言及をする必要がある場合に用いる。

(2) すべて文末注とし、方カッコ付アラビア数字で表示する。

(例) 1)、2)、3)・・・

5. 図表

図表のタイトルは、図の場合は図の下に、表の場合は表の上に付ける。

6. 参考文献

(1) 本文、注記、図表で用いたすべての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。参考文献とは、本文中または注において引用した文献を指す。

(2) 文献リストは言語ごとに分け、日本語文献は著者名の50音順、韓国・朝鮮語文献は著者名のカナダラ順などに並べる。

(3) 参考文献については、著者名・(刊行年)・書名・号数(発行年月日を入れてもよい)・発行所・頁等を示す。筆者名のある新聞・雑誌記事は雑誌論文と同様に表記し、発行年月日も記入する。

(4) 英文文献の場合、書名はイタリックで表記する。論文名は単行本所収か雑誌所収かに関わらず一律クォーテーション・マークで括る。

(例)

単行本の場合

・朴一 (2005) 『朝鮮半島を見る眼－「親日と反日」「親米と反米」の構図』藤原書店、pp.123－125

・이광우 (2004) 『신경과학』 범문사, pp.153.

・Kim, L. (1997). *Imitation to Innovation: The Dynamics of Korea's Technological Learning*. Boston: Harvard Business School Press.

論文の場合

・文京洙 (2005) 「戦後60年と在日朝鮮人“国民”の呪縛を超えて」『思想』No.980、岩波書店、pp.8－9

・김신일 (1991) 「교육자치의 당위성과 현실」『교육학연구』Vol21, 교육출판, pp. 11－18.

・Min, Pyong Gap. (2001). “Koreans in New York: An ‘Institutionally Complete’ Community.” *New Immigrants in New York*, edited by Nancy Foner, New York: Columbia University Press, pp.173-200.

・Koh, Y.S. (2008). “Financial and Corporate Reform in Korea: Survival Strategies of the Korean “Chaebols””, *Asian Studies*, 54 (2), pp.71-88.

編集後記

『コリアン・スタディーズ』第5号をお届けいたします。

前任の伊地知紀子編集委員長から任務を引き継ぎ、不安と戸惑いの中で編集作業を始めましたが、伊地知先生が残してくださった第4号の精緻な「工程表」「構成案」ファイルをお手本にして、作業を進めることができました。また、森類臣先生が、近隣京都所在の印刷会社の有能な担当者をご紹介くださったことにも大変助けられました。お二人に改めてお礼を申し上げます。

さて、第5号の特集は、決して「時流に乗った」テーマではありません。しかし、「言の葉」によってつむがれる文学には時を越える力があると、私は信じています。今回寄せられた3篇の論文は、それを裏付けるものだといえるでしょう。済州4.3事件を立体的に照射する金石範文学の力、文学を正面からは語ってはいませんが、文学者としての金達寿の精神が注入された雑誌が発揮した力、そして、植民地支配という愚行を省みない安易な「郷愁」を断固として拒否しつづけた小林勝の「『懐かしい』と言ってはならぬ」ということばの強靱な力を、3篇の力作から感じ取っていただければ幸いです。

残念ながら、今回は投稿論文・研究ノートの掲載はなしという結果になりました。投稿の申し込みをしながら、投稿辞退という事例が数件あったことから、次号からはスケジュールを変更することになりました。具体的には、6月初旬に論文募集告知、7月末に論文投稿申請締切、9月末に論文投稿締切という流れを予定しています。今回投稿辞退をされた方々も含めて、多くの投稿をお待ちしております。（総谷智雄）

『コリアン・スタディーズ』編集委員
文京洙
高正子
朴一
高龍秀
鄭雅英
蔡徳七
裴光雄
伊地知紀子
鄭栄鎮
森類臣
総谷智雄（編集委員長）

コリアン・スタディーズ

第5号

Korean Studies No.5

頒価 1,000 円

2017年6月1日 発行

編集・発行団体 国際高麗学会日本支部

〒530-0047

大阪市北区西天満4丁目5-5

マーキス梅田506号

TEL 06-6314-3775

FAX 06-7660-7980

E-mail isksj@ams.odn.ne.jp

発行者 国際高麗学会日本支部会長 鄭雅英

編集代表者 総谷智雄

装丁 金文男

制作 株式会社 田中プリント

Korean Studies
Vol.5 2017

Future Articles: Japan, the Korean Peninsula and the Future as Reflected by Literature

Foreword CHUNG Ahyoung

Jeju 4.3 Incident and its Meaning Drawn on "Volcanic Island" by Kim Seok-Peom
..... KIM Deong Yoon

KIM Dalsu and the magazine "Korean Culture in Japan" HIROSE Yoichi

Shooting the Colonial Nostalgia: KOBAYASHI Masaru's "I'll never say I miss Korea"
and "Japanese junior high school" HARA Yusuke

Kilchabi (Compass)

Studies on the History of science in the Democratic People's Republic of Korea IM Jong Hyok

Today's "SORI" is only for today AHN Sungmin

On My Retirement Commemorative Lecture MUN Gyong Su

Book Reviews

The Contemporary History of "Anti-Japan" and "Anti-Korea":
Beyond the Border of Nationalism by HYUN Mooam CHUNG Ahyoung

Analyze the Racism - Prejudice Against Zainichi Korean and the Internet by TAKA Fumiaki
..... CHUNG Youngjin

KIM Dalsu and the times: Literature, Ancient history, Nation by HIROSE Yoichi
..... KASETANI Tomoo

Published by the Japan Branch of International Society for Korean Studies
4-5-5-506, Nishitenma, Kita-ku, Osaka, Japan